鳴神（なるかみ）Ⅳ遺跡　第６次発掘調査概報

―地方改善整備事業道路改良工事に伴う調査報告―

１９９５

（財）和歌山市文化体育振興事業団

序　　文

今回の鳴神IV遺跡の調査は、和歌山市の地方改善整備事業道路改良工事に先だって当事業団が実施したものであります。遺跡の立地する鳴神地区は周辺に鳴神貝塚や岩橋千塚古墳群、秋月遺跡など著名な遺跡が集中しており、和歌山市の歴史を考える上で大変重要な地域であるといえます。

調査の結果、竪穴住居11棟・掘立柱建物６棟・方墳１基などの重要な遺構が検出され、古墳時代の集落及び墓域構造の一端を明らかにすることができました。当調査による新たな学術成果は郷土の古代史を語る上で、なくてはならない視点を与えることとなりました。

調査は当事業団が平成６年１０月から１２月までの約３ケ月間で行い、ここに概要報告書をまとめたものです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大の御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々御教示を賜わりました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成７年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　筒井敏郎

例　　言

1．本書は、和歌山市が市内鳴神字亀宇田627番地の3、他に計画した地方改善整備事業道路改良工事に先立つ発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約800㎡を1994年10月４日から同年12月16日までの約３ケ月間で実施した。

3．発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	浅井周英	理事長	筒井敏郎
文化振興課長	安井紹郎	総務課長	別院　稔
文化財班長	松本信明	事務主任	小松義博（調査庶務担当）
学芸員	前田敬彦	学芸員	北野隆亮（発掘調査担当）
		学芸員	井馬好英（　〃　）
		学芸員	木村喜晶（　〃　）

4．遺跡・遺構の写真撮影については各担当者がこれにあたり、本概報掲載の遺物写真撮影は井馬・木村が行った。

5．本書の執筆は北野、井馬、木村が分担し、編集は北野が行った。各執筆分担の文責は目次に示した。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

7．遺跡の地形環境については額田雅裕氏（和歌山市立博物館）の玉稿をいただくことができた。噴砂については寒川旭氏（通産省工業技術院地質調査所）に、また古墳の呼称については石野博信先生（徳島文理大学）に御教示を受けた。記して感謝申し上げます。

8．概要報告書の作成にあたり、多くの方々に現地及び遺物整理作業時に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

9．発掘調査及び遺物整理に際して以下の方々の御協力をいただいた。記して謝意を表します。

今山直美　海野榮喜男　岡野恵津子　木下かずこ　木下すみえ　木村二朗　小島常夫
谷川弘治　出縄恭子　土澤真喜子　中居波夫　中嶋雅士　中谷ひろ　中野圭子　西口コイト
西谷イサコ　西中てるよ　橋本昭二　橋本美代子　冨加見百合子　藤田裕美子　藤本とよ子
三木礼子　水田久枝　宮崎英子　山中常広　龍神房次

本文目次

1．調査の契機と経過……（北野隆亮）…1
2．位置と環境……（木村善晶）…2
3．調査の方法と経過……（北野）…4
（1）調査の方法
（2）調査の概要
4．遺構
（1）A区の遺構……（井馬好英）…8
（2）B・C区の遺構……（北野・木村）…9
5．遺物
（1）A区の遺物……（井馬）…20
（2）B・C区の遺物……（北野・木村）…23
6．まとめ
（1）B・C区検出の竪穴住居と方墳について……（北野）…31
（2）A・C区検出の噴砂について……（〃）…35
（3）鳴神IV遺跡の地形環境……（額田雅裕）…36
報告書抄録……39

図版目次

図版1　A区　調査前（東から）、B区　調査前（東から）
図版2　C区　調査前（南東から）、A区　全景（東から）
図版3　B区　全景（東から）、B区　全景（南西から）
図版4　C区　全景（北東から）、C区　全景（南西から）
図版5　A区　SD-3（西から）、A区　SD-4（北から）
図版6　A区　SD-6・7土層堆積状況（北から）、A区　SD-8（北から）
図版7　B区　SD-9（東から）、B区　SD-32土層堆積状況（東から）
図版8　C区　SD-32遺物出土状況（西から）、B区　SB-1（北から）
図版9　B区　SB-2・3（西から）、B区　SB-2カマド断割り状況（南から）
図版10　B区　SB-4・5・6・7・9（南から）、B区　SB-4（西から）
図版11　B区　SB-5（南から）、B区　SB-5柱穴内遺物出土状況（西から）
図版12　B区　SB-7（北から）、B区　SB-7カマド袖部断割り状況（東から）

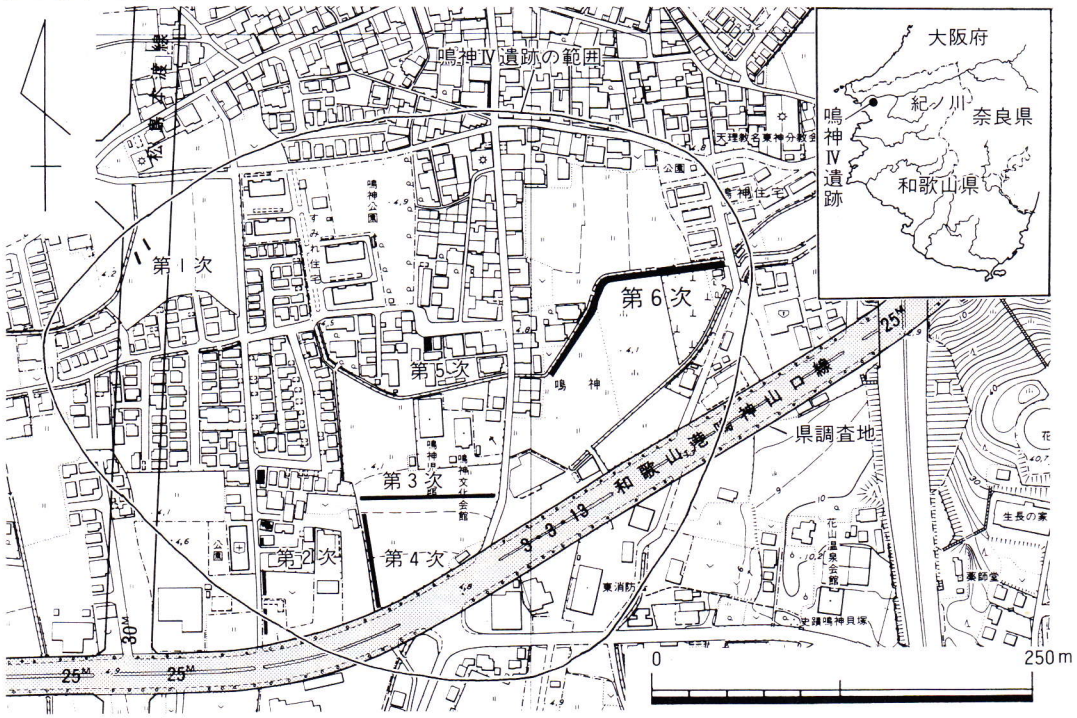
図版13　B区　SB-8（北から）、B区　SB-8（西から）
図版14　C区　SB-10（東から）、C区　SB-10カマド周辺土層堆積状況（東から）
図版15　C区　SB-11（南東から）、C区　SB-11（北西から）
図版16　B区　堀立柱建物１（西から）、B区　堀立柱建物１（南から）
図版17　C区　堀立柱建物２（南東から）、C区　堀立柱建物群（南西から）
図版18　C区　方墳（SD-31）（南西から）、C区　方墳周溝（SD-31）土層堆積状況（南西から）
図版19　C区　南東壁土層断面噴砂・砂脈貫入状況、C区　遺構面噴砂・砂脈検出状況
図版20　弥生土器、SD-9出土遺物
図版21　SD-9出土遺物、SD-8出土遺物、埴輪
図版22　SB-2・4・5出土遺物、SB-5出土遺物、掘立柱建物出土遺物
図版23　方墳（SD-31）出土遺物
図版24　SD-32出土遺物
図版25　SD-32出土遺物
図版26　SK-27出土遺物、SX-4出土遺物
図版27　遺物包含層出土遺物
図版28　製塩土器
図版29　土製品、石製品
図版30　石製品、自然遺物

1、調査の契機と経過

和歌山市が市内鳴神に計画した地方改善整備事業道路改良工事の建設区域のうち鳴神字亀宇田627番地の３、他の区間が『和歌山市埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された鳴神Ⅳ遺跡（遺跡番号316）の範囲内に相当することから、和歌山市教育委員会が指導を行い、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて発掘調査を実施する事となった。鳴神Ⅳ遺跡は、和歌山県教育委員会が昭和52～54年に国道24号線建設時に調査を行った後、和歌山市関連調査として平成２年の第１次調査から第４次調査までを当事業団が行い、平成６年に和歌山市教育委員会が第５次調査を行っている（第１図）。

第６次にあたる本調査は現地において平成６年10月４日から12月16日までの約３ヶ月間で実施した。調査対象地は幅約５m、総延長約160mの北東から南西方向に細長い区域で、面積約800㎡を調査対象として調査を行った。なお、調査の際に生じる排土の置き場等の制約から北東からA・B・C区の３区間に調査地を分割した。A区の調査は平成６年10月４日から同月25日まで、B区は10月26日から11月23日まで、C区は11月24日から12月16日までの期間を要した。

実際の現地での発掘調査は調査対象である道路建設予定地に隣接して設けられている用水路及びブロック塀等の保護の為、A区においては調査区を幅約3.2m、長さ38mに、B区では幅約3.5m、長さ50mに、C区では幅約４m、長さ56mにそれぞれ設定して調査を行った。その結果、A区は面積約121㎡、B区では約175㎡、C区では約224㎡の合計約520㎡を調査することができた。



第１図　調査位置図

2、位置と環境

当遺跡の所在する和歌山市は紀ノ川により形成された沖積平野に位置する。紀ノ川は奈良県の大台ヶ原に源を発し、紀伊水道に向かって西進し、その北岸には砂岩、礫岩、泥岩からなる和泉層群により形成される和泉山脈が存在する。南岸は三波川変成帯に属し、緑泥角閃岩を主体とする結晶片岩により構成されている。鳴神Ⅳ遺跡はその独立丘陵である花山の西麓に広がる沖積平野に位置する。

周辺の遺跡をみると、旧石器時代では紀ノ川北岸においては鳴滝遺跡や西ノ庄遺跡で、南岸においては総網寺谷、頭陀寺等でナイフ形石器が採集されている。縄文時代の遺跡は鳴神貝塚・岡崎縄文遺跡・吉礼貝塚・祢宜貝塚が知られている。当遺跡に近接する鳴神貝塚は中期・晩期の土器が出土している。また、海水産の貝殻がみられることから当時は内湾であったことが推測される。弥生時代にはいり、紀ノ川による堆積作用は陸化を進めていくが、前期においては紀ノ川南岸の日前宮周辺の微高地に居住域が認められる。代表的な遺跡に太田・黒田遺跡があり、前期・中期を中心とした竪穴式住居や土坑が検出され、多量の土器等が出土している。中期では紀ノ川北岸に宇田森遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡などの集落が営まれるようになる。後期になると平野部に顕著な集落がなく、太田・黒田遺跡でも集落が営まれなくなる。代ってその周辺の丘陵部に滝ヶ峰遺跡、橘谷遺跡などの高地性集落が出現する。古墳時代の集落は特に花山丘陵、岩橋丘陵の山麓付近にみられる。井辺Ⅰ遺跡、井辺Ⅱ遺跡、大日山Ⅰ遺跡、音浦遺跡などである。太田・黒田遺跡にも再度集落が営まれるようになり、秋月遺跡も出現する。また、集落の生産力に関わるものとして鳴神Ⅱ遺跡から幅7～8m、深さ3m程の用水路と考えられる溝状遺構が、鳴神Ⅴ遺跡からは古墳時代前期のものと考えられる水田区画遺構が検出されている。この地域の丘陵上に古墳が築造されはじめるのは4世紀末あるいは5世紀初頭であり、花山丘陵上に前方後円墳9基を含む90基あまりの古墳が確認されている。その後、周辺の岩橋山塊に7世紀初頭まで頻繁に古墳が造られるようになる。それらは岩橋千塚古墳群と呼ばれ、総数約700基を数える。平野部においては、庄内式新段階・布留式古段階から７世紀初頭まで鳴神Ⅴ遺跡や秋月遺跡などで微高地上に前方後円墳、円墳、方墳などが築造される。歴史時代における良好な遺跡は確認されていないが、太田・黒田遺跡から白鳳期の軒丸瓦が出土している。秋月には日前国懸神宮が祭られており、「日本書紀」においての記述がみられる。また、日前宮一帯の地域は河南条里と呼ばれる条里制土地区画の痕跡を良好に留め、県内でも最大の規模を有するものであると考えられている。

参考文献
和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第1巻　1991年
和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』　1984年
㈶和歌山市文化体育振興事業団『鳴神Ⅴ遺跡発掘調査概要報告書』　1994年

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	田屋遺跡	9	鳴神III遺跡	17	井辺遺跡
2	西田井遺跡	10	鳴神II遺跡	18	神前遺跡
3	紀の川銅鐸出土地	11	鳴神貝塚	19	岡崎縄文遺跡
4	太田・黒田遺跡	12	音浦遺跡	20	井辺前山古墳群
5	秋月遺跡	13	花山古墳群	21	森小手穂埴輪窯跡
6	鳴神VI遺跡	14	津秦遺跡	22	寺内古墳群
7	鳴神V遺跡	15	大日山I遺跡	23	山東古墳群
8	**鳴神IV遺跡**	16	岩橋千塚古墳群	24	吉礼砂羅谷窯跡

第2図　鳴神IV遺跡周辺の遺跡分布図

3、調査の方法と経過

(1)調査の方法

発掘調査は、幅約5m、総延長約160mの北東から南西方向に細長い調査対象区域で行った。調査は排土処理の為に調査地を北東から南西方向に3等分して、それぞれ北東からA区、B区、C区と地区名を便宜的に与えた(第3図)。発掘調査は地区単位で東側のA区から順次1区画ずつおこなった。

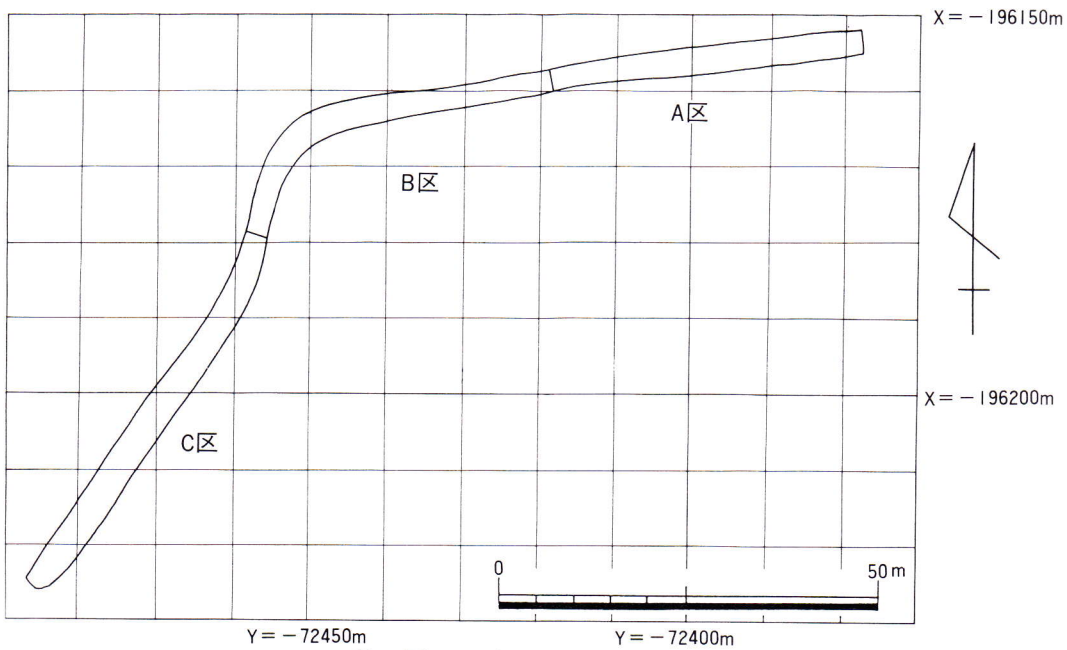
調査は、機械力（ユンボ1台、ダンプ1台）によって、造成された整地土を掘削後、旧地表面である第1層（水田耕土）及び第2層（床土)、第3層（黄灰色粘質土）までを掘削し、以下を人力によって実施した。遺構検出はA区を井馬が、B・C区を北野・木村が行った。その他、調査方法は以下の方針で実施した。

1、溝や土坑などの遺構には土層観察用ベルトを原則的に1箇所以上設けることとし、2層以上の堆積が認められたものについては分層し写真撮影及び実測図を作成した。土層の色調及び土質観察については、「灰褐色粘質土」など従来通有の呼称を用いたほか、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1993年版をあわせて使用した。

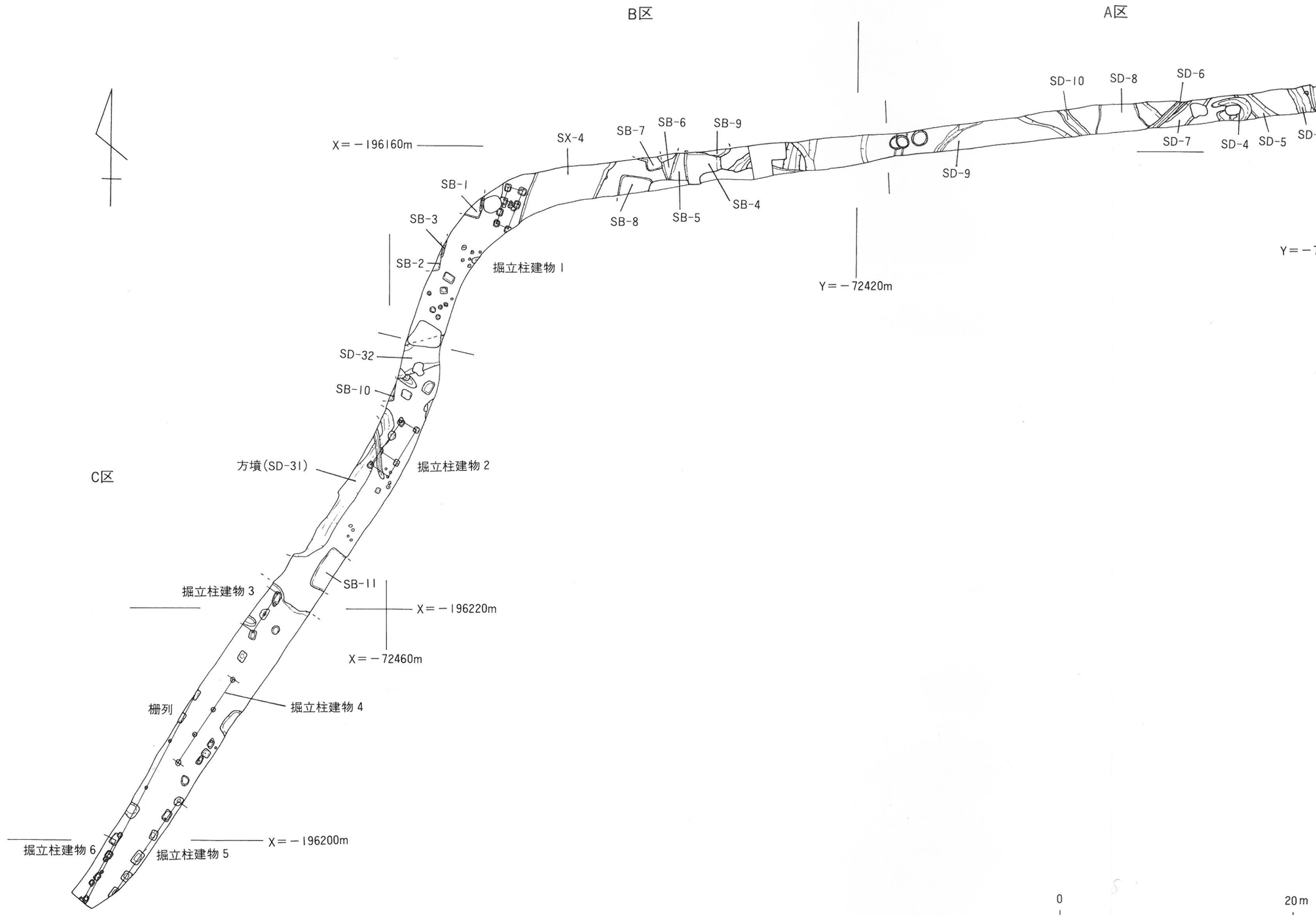
2、遺物包含層の遺物取り上げの為に国土座標軸のメートル単位の整数値に準じた4mメッシュの杭を打ち、小地区設定を行った。

3、平面実測図、調査区壁面土層図及び遺構の土層堆積状況図については1/20の縮尺で全て手実測で実施した。なお、遺構内の遺物出土状況図及び特殊遺構については1/10の縮尺で実測図を作成した。

4、遺跡の水準は国家水準点及び和歌山県水準点を基準とした。



第3国　調査地区割図

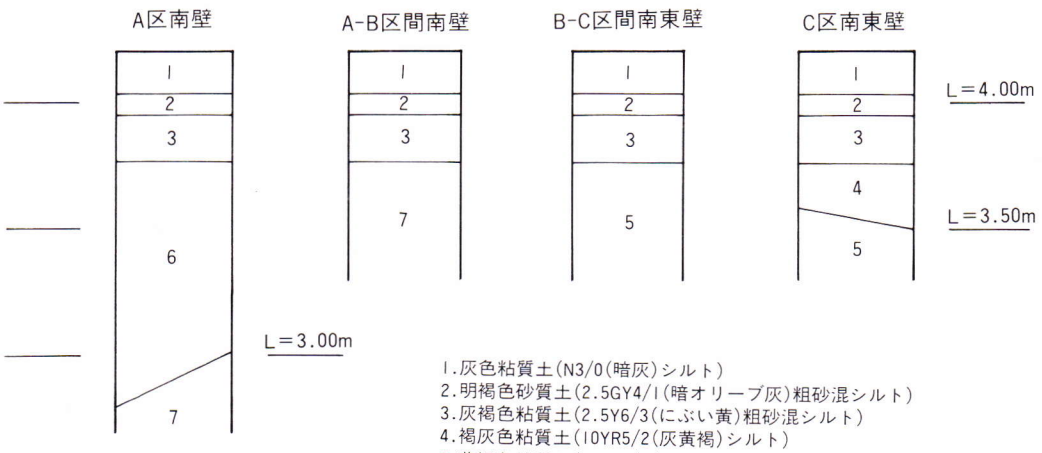

B区
A区
C区
X＝－196160m
SX-4
SB-7
SB-6
SB-9
SB-1
SB-3
SB-2
SB-8
SB-5
SB-4
SD-10
SD-8
SD-6
SD-7
SD-4
SD-5
SD-3
SD-9
掘立柱建物 1
Y＝－72420m
Y＝－72380m
SD-32
SB-10
方墳(SD-31)
掘立柱建物 2
掘立柱建物 3
SB-11
X＝－196220m
X＝－72460m
柵列
掘立柱建物 4
掘立柱建物 6
掘立柱建物 5
X＝－196200m
0
20m

第 4 図　遺構平面全体図

(2)調査の概要

基本層序（第５図）は、現代の盛土がA区で約50cm、B区で約80cmの厚さで堆積しており、旧耕土である第１層は灰色粘質土であり、約20cmの厚さの堆積である。上面（現代の地表面）は標高約4.2mであり、周辺との比高差はほとんどない。第２層は約５cmの堆積で、明褐色砂質土の床土である。第３層は約15cmの堆積で灰褐色粘質土の古墳時代後期以降の遺物を出土する遺物包含層である。第３層下面で古墳時代中期から後期の遺構を検出した。したがって遺構面の標高は約3.8mである。なお、第３層上面から掘り込まれる中世（鎌倉～室町時代）の遺構も若干認められたが、第３層下面において同時に検出を行った。第４層は褐灰色粘質土でC区南西側半分の部分にみられ、遺物を出土しないことから自然堆積層と考えられる。堆積の厚さはC区南西端で約30cmを測り、南西へ行くほど緩やかに深くなる。第５層は黄褐色粘質土でB区からC区にかけて堆積しており、南西方向に深くなる。西側に隣接する鳴神Ⅴ遺跡の古墳時代の遺構面の基盤層に対応する層である。B-C区間南東壁で50cm以上の堆積の厚さをもつ。第６層は淡黄褐色砂質土でA区東側半分の部分に堆積しており、東側に深くなる。河道堆積であると考えられる。第７層は灰色粗砂で、無遺物層である。土層断面観察により、この層から液状化現象による噴砂の砂脈が上層へ貫入していく様子がみられる。この層は鳴神Ⅴ遺跡にも認めることができ、周辺に広範囲に広がっていることが予想される。

検出した遺構の概要は、微低地に相当するA区で古墳時代中期から後期の溝を10条以上、土坑数基、及び江戸時代の土坑３基、小溝６条を検出した。微高地上とみられるB区からC区にかけては古墳時代中期後半から後期前半の竪穴住居を11棟と堀立柱建物１棟、同後期後半の方墳１基、詳細な時期は不明ながら、古墳時代の掘立柱建物群（５棟）・柵列、土坑及び鎌倉・室町時代の土坑などを検出した（第４図）。



第５図　調査地土層柱状模式図

4、遺構

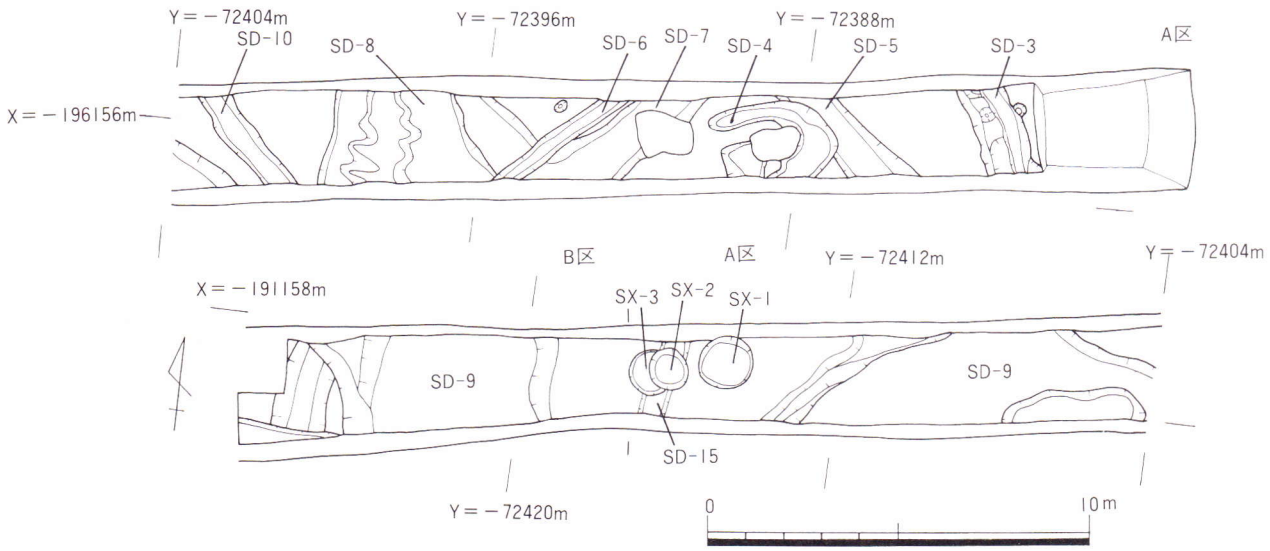
検出遺構の概要は、A区では微低地に掘削された溝群が検出され、B・C区は微高地上に展開した古墳時代の中期後半から後期前半にかけての竪穴住居11棟を中心とした集落、古墳時代後期後半には墓域となったことを示す方墳1基などが検出された。

なお、B・C区で鎌倉・室町時代の土坑や溝、A区において近世の土坑を検出した。

(1)A区の遺構

A区で検出した遺構は、ほとんどが溝状の遺構であり、3層上面からの小溝遺構(6条)は遺物は希薄であるが近世以降と認められ、また3層下面で検出した多くの遺構は比較的豊富な遺物から古墳時代が中心であることが確認できた(第6図)。しかし、A区西端で検出した径1.2～1.4mの円形の土坑(SX-1・SX-2・SX-3)は、上面では検出できず、下面において明確にしたが、多量の古墳時代の遺物に混ざり唐津焼や丸瓦等の破片が含まれていたことから近世初頭頃の遺構とみられる。

調査区東端で検出した溝状遺構SD-3は幅1.2mを測るもので、底面は不定形を呈し、北側の最深部では遺構検出面から約60cmの深さをもち、底面の状況よりやや南から北に傾斜する様相を呈する。この遺構の覆土は、灰褐色主体の砂質土によって埋まる。また、調査区東端より10m付近で検出したSD-4は、U字状に曲がる溝状の遺構で、幅50cmから1mを測り、覆土は暗灰褐色砂である。SD-4と重なりをもつSD-5は、幅1.8m前後の比較的大きい規模をもち、深さは検出面より50cm程度である。この溝状遺構は、底面の観察より北から南という傾斜がみられる。調査区のほぼ中央で検出した溝状遺構SD-6・SD-7は、ともにN-40°-Eと東寄りの方向性をもち、その重なりからSD-7よりSD-6の方が新しい時期の溝であることが確認できた。これらの遺構の底面における傾斜は、SD-7は不明瞭であるが、SD



第6図　A区遺構平面図

-6はSD-3と同じ傾斜を示す。また、その西側において検出した溝状遺構SD-8は、幅3m前後と比較的規模は大きいが深さは検出面より最深部で30cmと浅く、底面は凹凸が激しいものである。この遺構の堆積は灰褐色主体の層位で、大きく3層に分けられ、すべて砂質土である。また、この覆土中には古墳時代の須恵器、土師器に混ざり土製品である土玉、土錘などが出土している(第25図4・5、図版21)。

A区の西側において検出した大規模な谷状遺構SD-9は、B区に跨るもので幅約15mを測るとみられる。この遺構の堆積は、大きく4層に分けられ、灰褐色主体の砂質土で埋没しており、下層ほど砂質が強くさらに下層ほど遺物が多く含まれていた。出土遺物には、須恵器の蓋杯・甕、土師器の杯身・高杯・壺・甕・製塩土器など良好な遺物が含まれている(第26図、図版20・21)。

このように、A区の遺構面は古墳時代において微低地にあたるとみられ、数期にわたり溝状の遺構が構築されたとみられる。この溝状遺構の分類は、その方向性から磁北より東に振るSD-6・SD-7、やや西に振るSD-3・SD-5・SD-10・SD-15、不定形を呈するSD-4・SD-8とに分けられ、また底面の傾斜の状況より南から北に傾斜をもつSD-3・SD-6・SD-8・SD-10と北から南に傾斜をもつSD-5とに分けられる。

(2)B・C区の遺構

〔竪穴住居〕

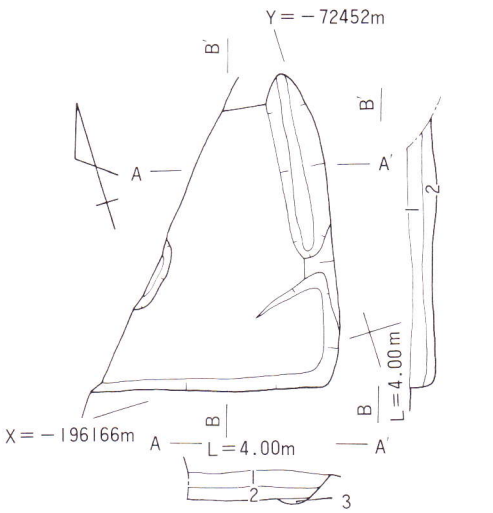
B区において9棟、C区で2棟の竪穴住居を検出した。住居はほとんど平面形が方形のものと考えられるが、SB-4は確実に長方形を呈する。なお、出土遺物から5世紀後半から6世紀中頃の竪穴住居群であると考えられる。以下、まとまり毎に説明する。

SB-1(第7図、図版8)

B区の中央で検出した竪穴住居で、東辺に壁溝をもつものである。不明確ながら主柱穴とみられるピットを床面に検出した。覆土の厚さは約10cmを測り、堆積層は上から第1層・褐黄色粘質土、第2層・褐黄灰色粘質土が約5cmずつ堆積する。後述する掘立柱建物1と同じ方向性をもつことなどから、同時期のものと考えられる。覆土から須恵器杯蓋、製塩土器などが出土した。

SB-2・3(第8・9図、図版9)

SB-1の南西に隣接して検出した竪穴住居であり、SB-3をSB-2が切っている。SB-2の南東隅には造り付けのカマドがみられ、カマドはドーム状になるとみられる上部が削平を受け基底部のみが



第7図　SB-1遺構平面図及び断面図

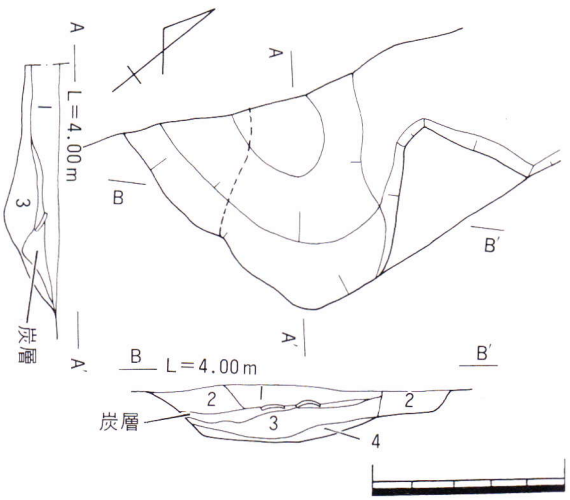
残存している(第８図、図版９)。カマドの内部は煮炊きによる熱によって赤変し、焼土及び炭が多く含まれている。袖部については、南東部分に作り替えがみられる。SB-2の覆土は褐黄灰色粘質土の単層で、厚さ約10cmが残存している。TK10型式併行期とみられる須恵器杯身（第29図40、図版22)、砥石（図版30）などが出土した。SB-2はSB-3の建て替えであると考えられ、方向性が同一である。

SB-3は南東隅の一部を調査した。製塩土器などが覆土から出土している。

SB-4・9（第10図、図版10)

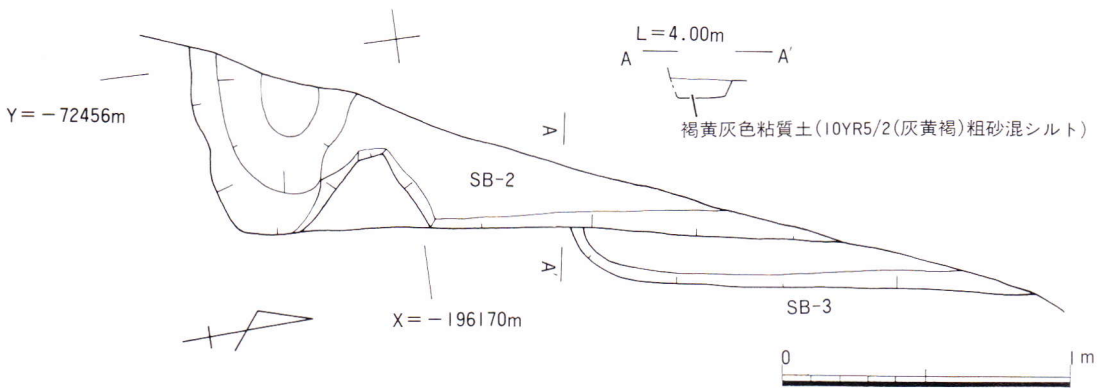
B区東端部で検出した住居である。SB-4は東西2.9m南北3.0m以上の規模を測り、平面形は長方形を呈するものと思われる。覆土の厚さが75cm残存しており、上から第１層・黄褐色粘質土がブロック状に混入した褐灰色粘質土、第２層・褐灰色粘質土、第３層・灰青色粘質土が堆積している。第１層は人為的に埋めた可能性がある。滑石製模造品である臼玉が３個（第34図95～97、図版29）出土しており、点数では出土遺構中で最も多く出土したことになる。特に96・97は最下層の堆積である第３層から出土した。その他、TK-47形式併行期とみられる須恵器杯蓋・杯身（第29図41～44、図版22）の他、製塩土器（第32図77～79、図版28)、土錘（第33図86～91、図版29)、刀子などの鉄製品、炭化桃核(図版30)、鉱滓、緑色片岩製用途不明品（図版30）などの豊富な遺物が第２・３層を中心として出土した。

SB-9はSB-4の北に隣接するものであり、南東隅の部分のみ検出した。SB-4に切られており、東西2.9m以上の規模を推定することができる。覆土が約35cm残存しており、上から第１層・濁褐灰黄色粘



1.褐黄灰色粘質土(10YR5/2(灰黄褐)粗砂混シルト)
2.黄褐色粘質土(10YR6/3(にぶい黄褐)粗砂混シルト)(袖部)
3.褐灰色粘質土(7.5YR5/3(にぶい褐)粗砂混シルト)
4.黄灰色粘質土(10YR6/2(灰黄褐)粗砂混シルト)

第８図　SB-2カマド遺構平面図及び断面図



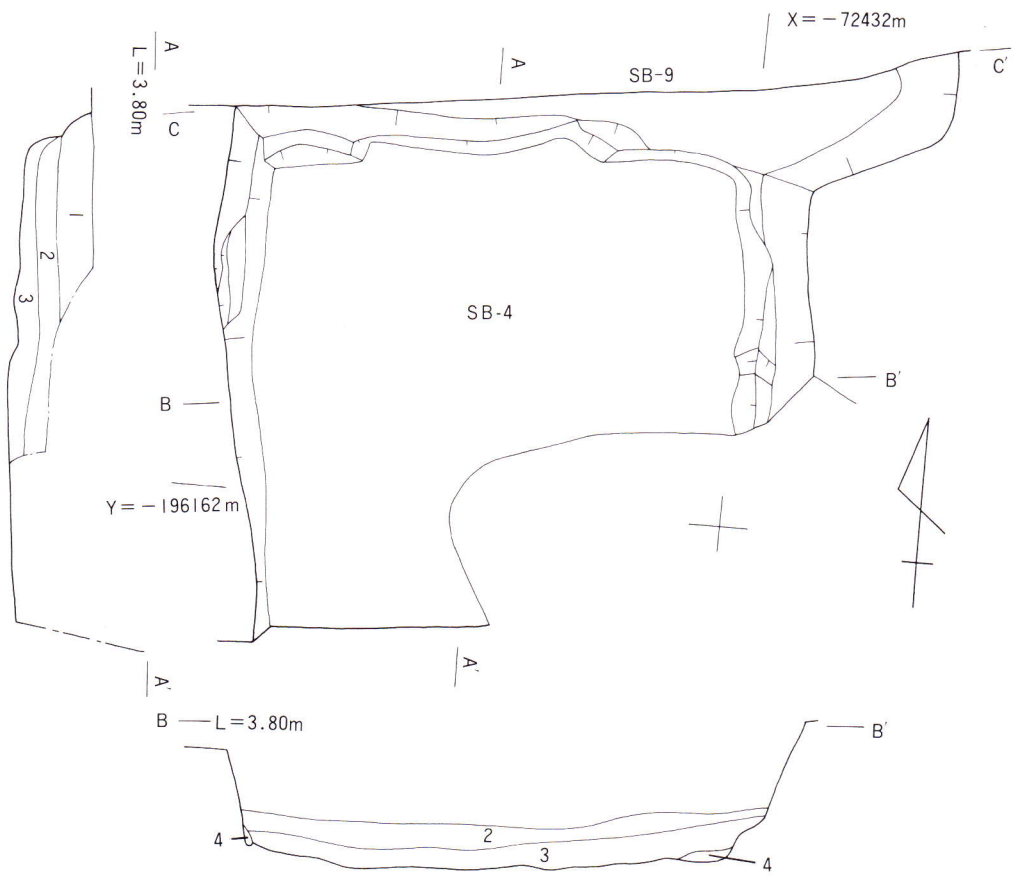
第９図　SB2・3遺構平面図及び断面図

質土、第２層・濁褐黄色粘質土が堆積する。製塩土器等が出土している。

SB-5・6・7（第11図、図版10・11）

SB-4の東に展開する住居群であり、遺構の切り合いからSB-7⇨SB-6⇨SB-5⇨SB-4の順に建て替えられたものである。SB-5は西辺部の一部を調査したにすぎないが、主柱穴と壁溝をもつものである。覆土は約25cm残存しており、上から第１層・褐黄色粘質土、第２層・黄褐色粘質土が堆積する。床面の柱穴からは完形の土師器椀（第29図48、図版11・22）が出土し、住居覆土からは、製塩土器（第32図80・81、図版28）、TK47型式併行期とみられる須恵器杯蓋（第29図45・47）・高坏（第29図46、図版22）、滑石製臼玉（第34図99・

SB9　5.濁褐灰黄色粘質土（10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト）
6.濁褐黄色粘質土（10YR5/2（灰黄褐）粗砂混シルト）



SB4　1.褐灰色粘質土（10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト）黄褐色粘質土ブロック混り
2.褐灰色粘質土（10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト）
3.灰青色粘質土（N6/0（灰）粗砂混シルト）
4.暗灰色粘質土（N5/0（灰）粗砂混シルト）

第10図　SB-4・9遺構平面図及び断面図

100、図版29)、鉱滓などが出土した。

SB-6は南西辺の一部を調査した。覆土は約15cm残存しており、上から第1層・灰黄色粘質土、第2層・灰黄褐色粘質土が堆積する。覆土から製塩土器、フイゴ羽口などが出土した。

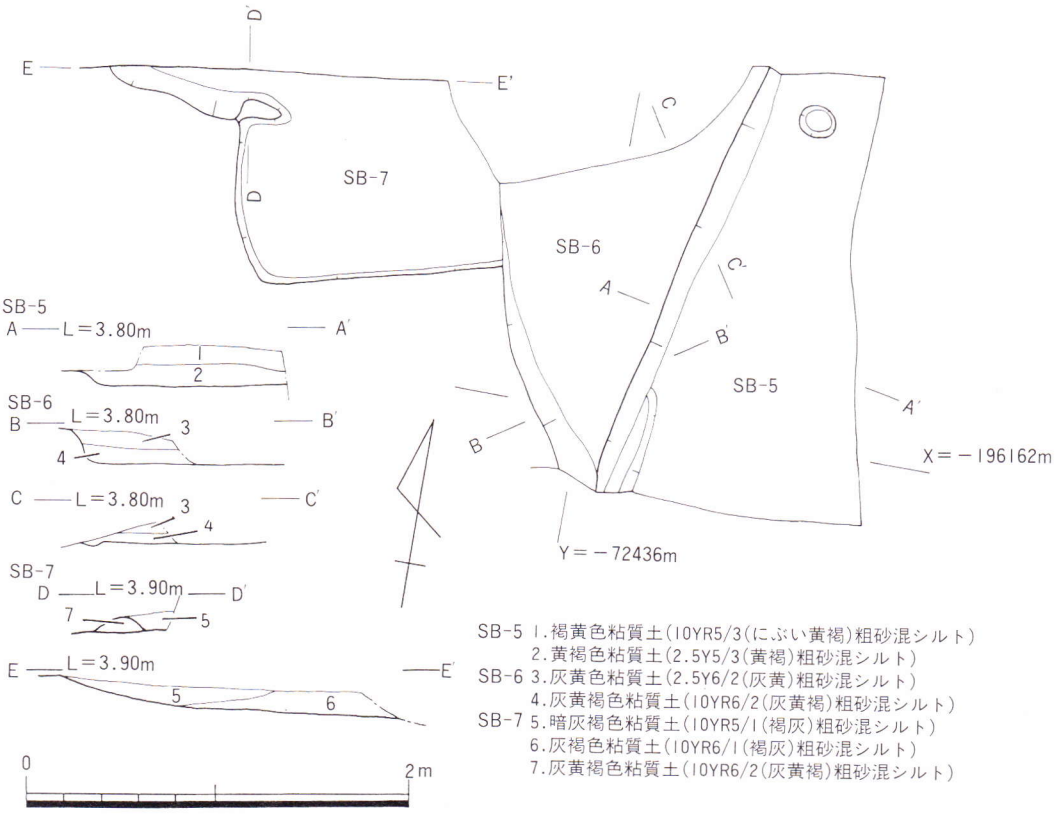
SB-7（図版12）は南西隅を調査した。住居西辺のおそらく中央に造り付けのカマドがとりつくものである。ドーム状になるとみられる上部が削平を受け、基底部のみが残存している。煙道部分が住居の外にのびた状態で検出した。カマド袖部は灰黄褐色粘質土を盛土しており、高さ約10cmが残存していた。住居覆土も約10cm残存しており、煙道部周辺でみるならば、上から第1層・暗灰褐色粘質土、第2層・灰褐色粘質土が堆積する。カマド内からTK23型式並行期とみられる須恵器杯蓋（第29図51)、住居覆土からは製塩土器、滑石製臼玉（第34図98、図版29）などが出土した。

SB-8（第12図、図版13)

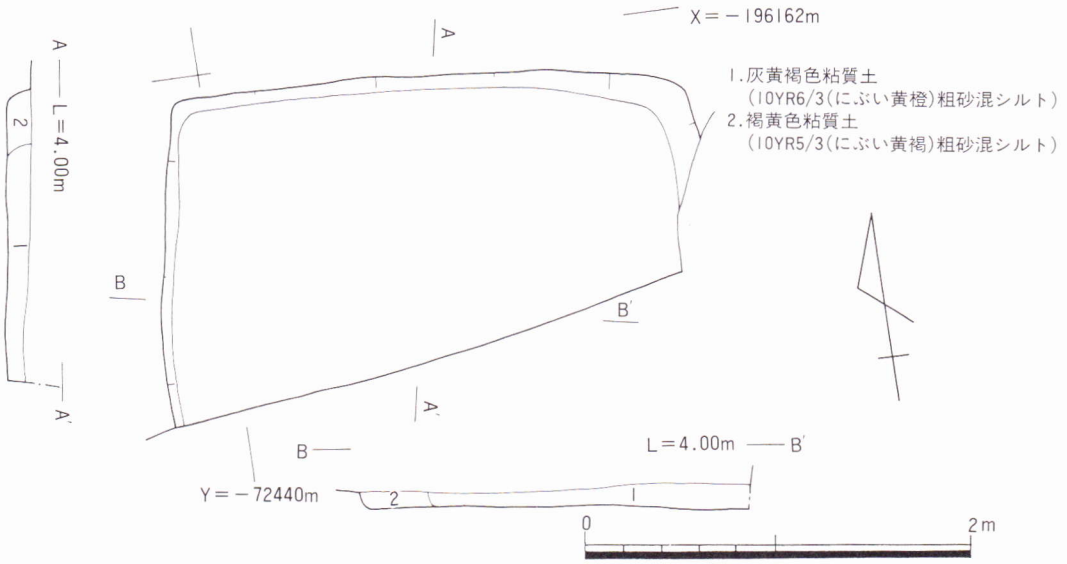
SB-8はSB-7の南西に隣接して、一棟の北側半分を検出した。東西2.9mの規模を測る。覆土は約10cm残存していた。遺物は須恵器・土師器の他、滑石製有孔円板（第34図92、図版29）が出土した。

SB-10（第13図、図版14)

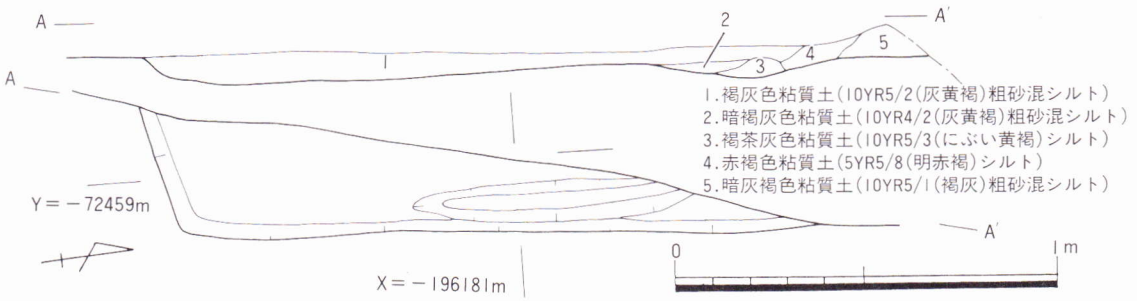
SB-10はC区北東端に検出した。住居の南東隅の一部を調査したが、覆土が約5cm残存し



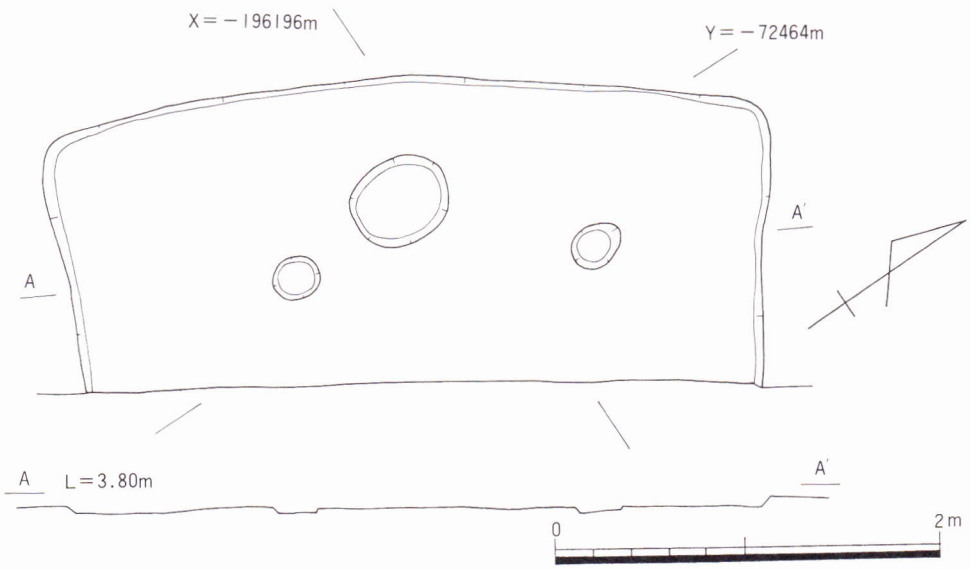
第11図　SB-5〜7遺構平面図及び断面図



第12図　SB-8遺構平面図及び断面図



第13図　SB-10遺構平面図及び断面図

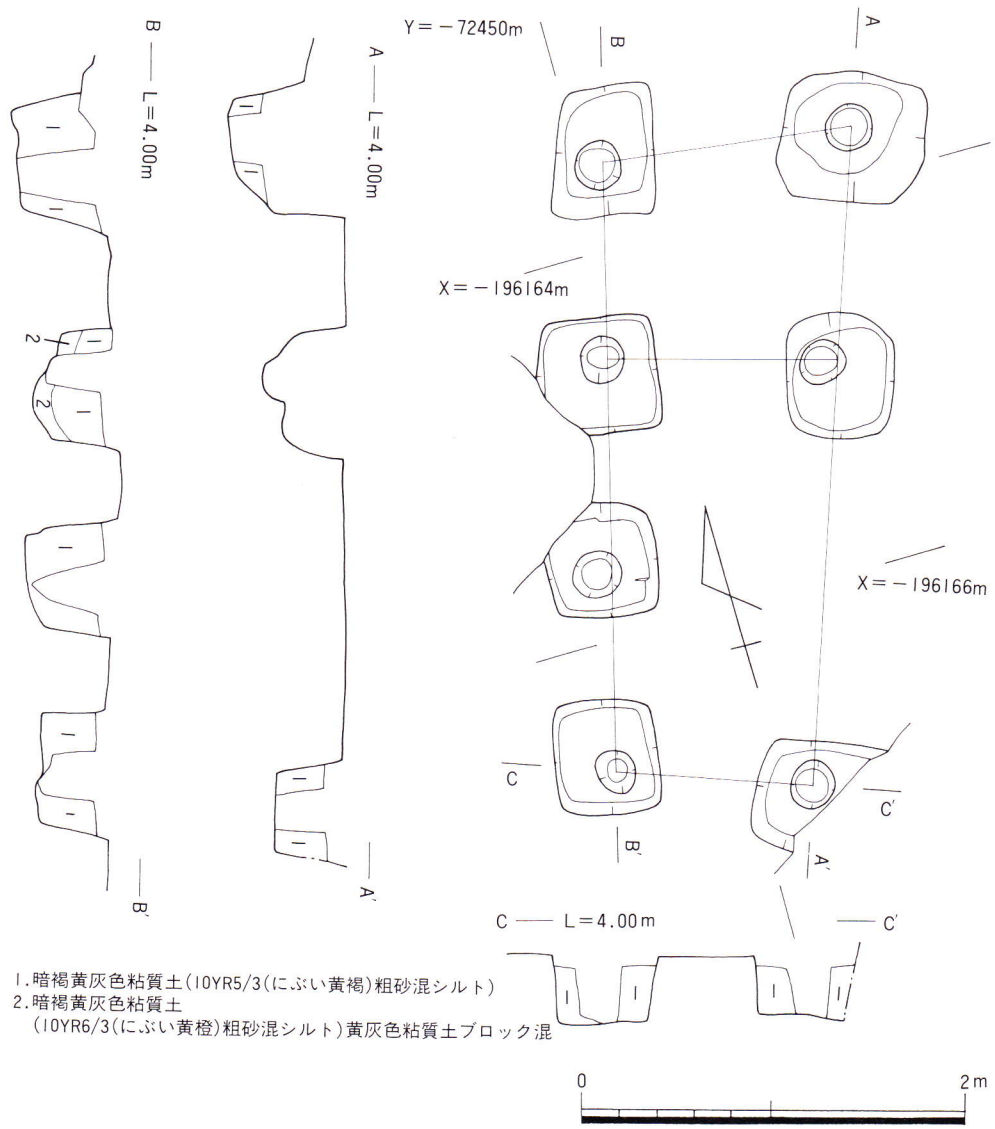


第14図　SB-11遺構平面図及び断面図

ていた。東辺に深さ約３cmの浅い壁溝を確認し、調査区の北西壁でカマドの存在を確認した。カマド本体は調査区外にあるものと思われるが、東辺北端部に焼土面及び北西壁面に造り付けのカマドの袖部を確認した。おそらくは、北東隅にカマドがとりつくものと思われる。

SB-11（第14図、図版15）

C区のほぼ中央部で検出した。住居の南西側のほぼ半分を調査した。主柱穴とみられる２本のピットを検出したが、深さ約３センチと浅いものである。覆土は約５cmと浅く、製塩土器など少量の遺物が出土した。この住居は当調査で検出した竪穴住居の中では最も西側に位置するものである。



第15図　掘立柱建物１遺構平面図及び断面図

〔堀立柱建物〕

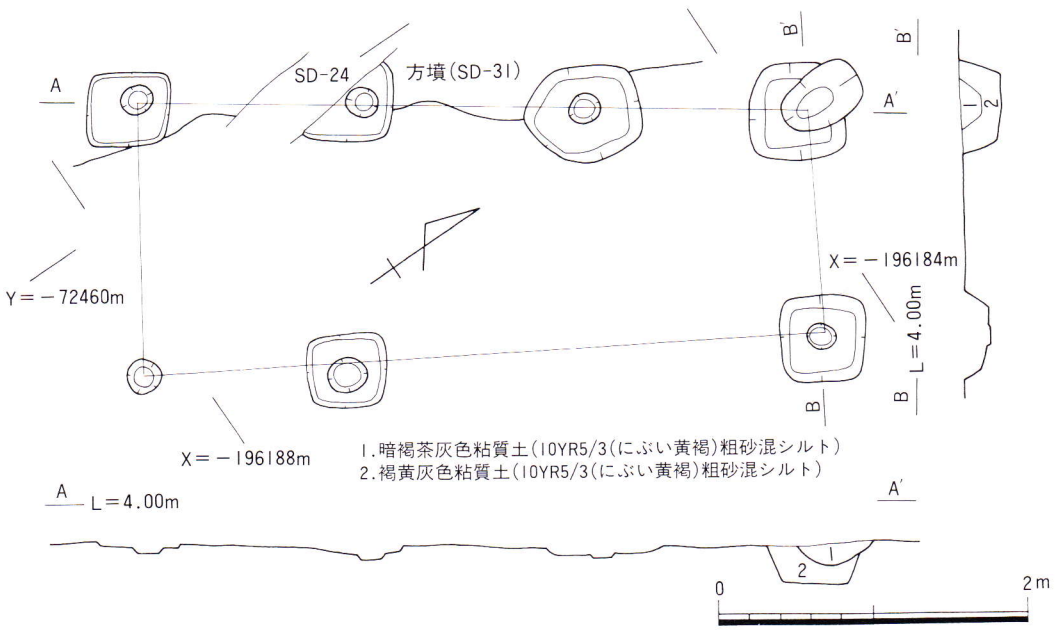
堀立柱建物はB区で1棟、C区で5棟の合計6棟分検出した。この中でもC区第4層上面から切り込む堀立柱建物3～6はそれぞれ近接しており、ほぼ同じ方向性（N-30°～35°-E）を持つ。

堀立柱建物1（第15図、図版16）

B区の中央部にて検出され、N-14°-Eの方向性を持つ。南北3間（3.2m）、東西1間（1.2m）の規模を持つが東側列の南から2つ目には柱穴を欠く。柱間は南北、南から1.1m、1.1m、1.0mである。柱堀方は規格制を持ち、やや南北に長い長方形を呈する。その規模は60cm×55cm、深さ40～50cmを測り、その中央付近にそれぞれ直径約20cmの柱痕跡が確認された。覆土に含まれる遺物は土師器、製塩土器、須恵器等であり、いずれも細片であった。また、自然遺物として炭化桃核（図版30）、柱材と思われる木片も出土している。建物の方向性が、西に隣接するSB-1と一致しており、SB-1とは同時期に存在した可能性がある。

堀立柱建物2（第16図、図版17）

C区の北端で検出した。方墳（SD-31）及びSD-24と重複を見せる。切り合いからそれらの新旧関係は方墳（SD-31）⇨堀立柱建物2⇨SD-24となる。N-35°-Eの方向性をもち、調査区内で南北3間（4.5m）、東西1間（1.8m）の規模を持ち、柱間は南北1.5mを測る。柱堀方は6ヶ所で検出でき、規模はおおよそ50cm×50cm、深さ10cmを測る。それぞれに直径15cmの柱痕跡が確認されたが、北端の1ヶ所は長楕円形を呈するピット状遺構に切られており、これは抜き取り穴の可能性がある。時期のわかる遺物は出土していないが、他遺構との切りあいから7世紀前半以降に存続時期を考えることができる。



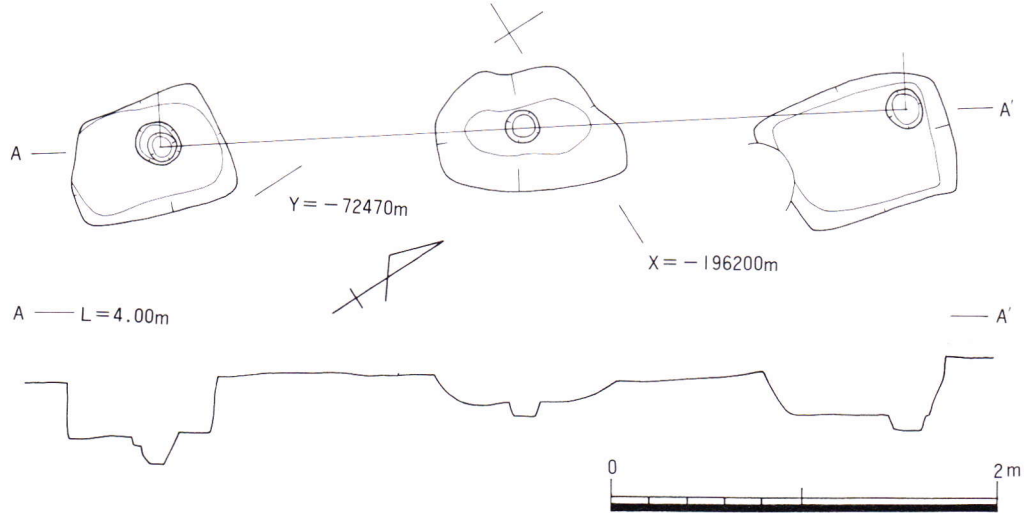
第16図　堀立柱建物2遺構平面図及び断面図

堀立柱建物３（第17図、図版17）

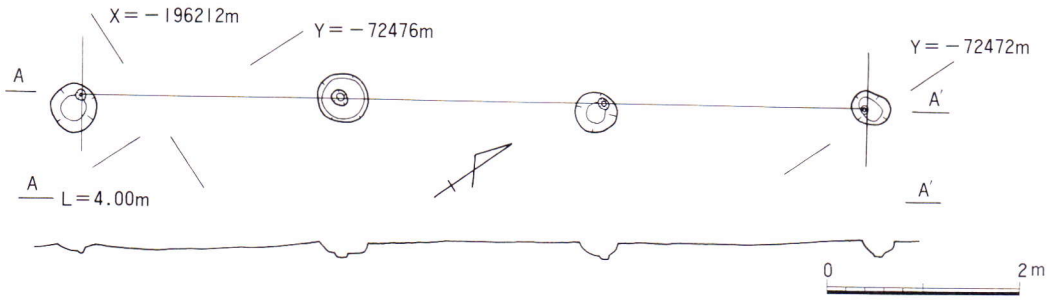
C区中央部に検出した。N-30°-Eの方向に並び、柱間1.0cmを測る。検出状況から建物は西に展開しているものと思われる。堀方は90cm×70cm、深さ30cmの隅丸長方形のプランを持ち、それぞれに直径20cmの柱痕跡が確認された。正確な時期は確定しがたいが、覆土の状況、出土遺物などから古墳時代のものと考えられる。

堀立柱建物４（第18図、図版17）

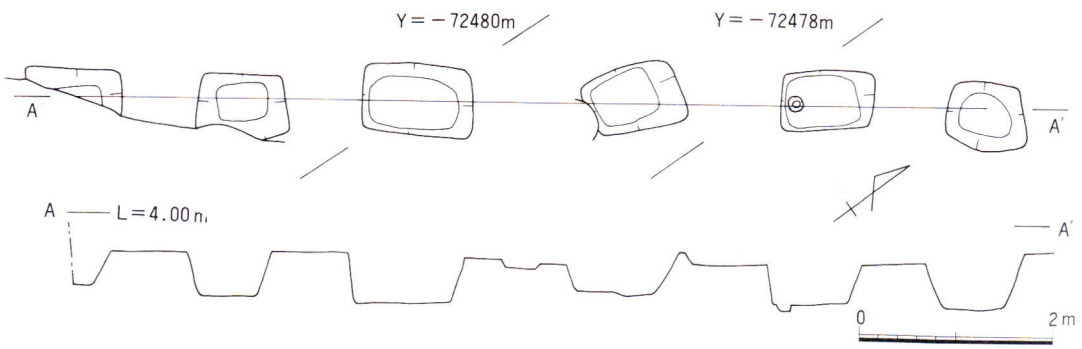
C区中央部、堀立柱建物３の南東に検出した。N-35°-Eの方向に並び、規模は３間（4.1m）



第17図　掘立柱建物３遺構平面図及び断面図



第18図　掘立柱建物４遺構平面図及び断面図



第19図　掘立柱建物５遺構平面図及び断面図

を測る。堀方は直径20cm、深さ10cmの円形のプランを持ち、それぞれに直径10cmの柱痕跡が確認された。柱間約1.4cmを測る。正確な時期は確定しがたいが埋土の状況、出土遺物などから古墳時代のものと考えられる。

堀立柱建物５（第19図、図版17）

C区の南端に検出した。N-35°-Eの方向性を持ち、調査区内で南北5間(9.5m)の規模を持つ。建物は東に展開しているものと思われ、柱間は南から1.6m、1.8m、1.8m、2.2m、1.7mを測る。柱堀方は80cm×65cmの隅丸長方形のプランを持ち、深さ約50cmを測る。そのうちの２ヶ所で直径15cmの柱痕跡が確認された。

堀立柱建物６（第20図、図版17）

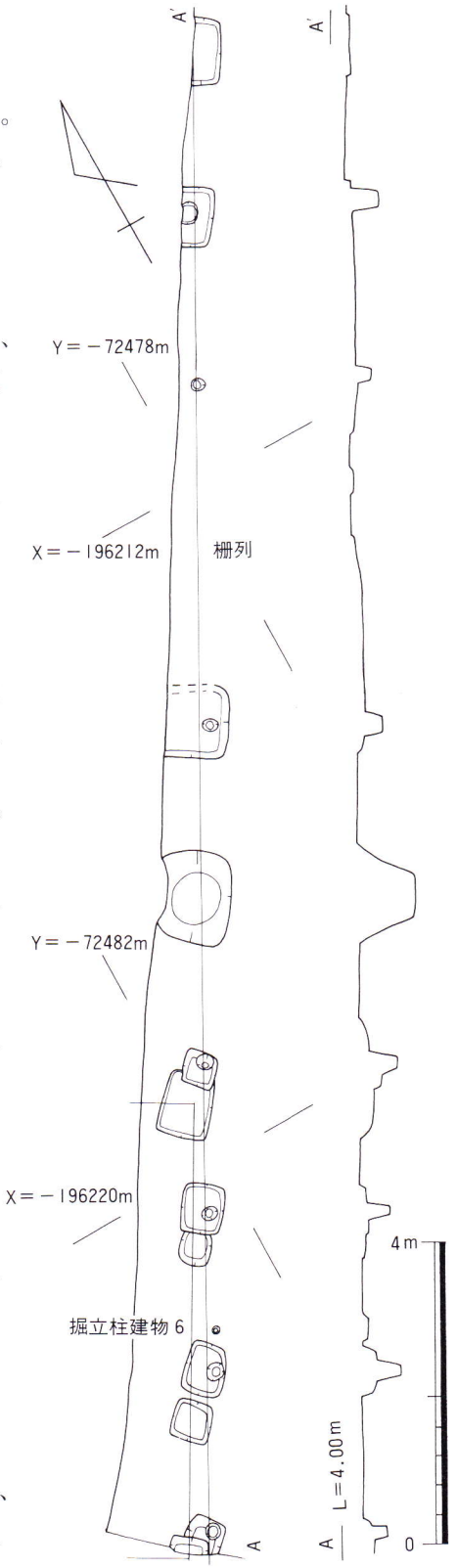
C区の南端において検出した。N-30°-Eの方向性を持つ。建物は西に展開していると思われ、調査区内で南北３間(6.0m)の規模を持つ。柱間は南から1.7m、2.4m、2.0mを測る。柱堀方は隅丸長方形のプランを持ち、深さ10cmを測る。正確な時期は確定しがたいが、埋土の状況や出土遺物などからみて古墳時代のものと思われる。

柵列（第20図、図版17）

C区の南端にて検出。堀立柱建物６と重なりを持ち、その切り合いから柵列⇨堀立柱建物６ということがわかる。N-25°-Eの方向性を持ち、調査区内で南北９間(20.0m)の規模を持ち柱間は約2.1mを測る。柱堀方は隅丸長方形のプランを持ち、深さ10cmを測る。柱痕跡は直径15cmの規模を持ちほぼ一直線に並ぶ。

方墳（SD-31）（第21図、図版18）

C区の北東側で方墳の周溝とみられる溝（SD-31）を検出した。主軸方位はN-30°-Eであり、南東辺を検出した。基底部は隅丸方形を呈するものと思われ、検出長約12.8mを測り、復元するならば一辺約14mが考えられる。周溝幅約1.4m、深さ0.6mの規模をも



第20図　掘立柱建物６・柵列
遺構平面図及び断面図

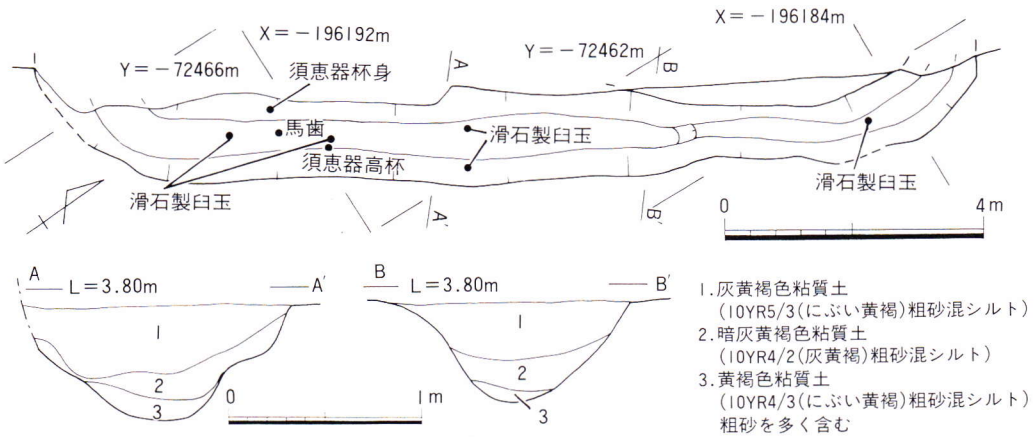
つものである。北東隅から南へ約４mまでは少し浅くなっている。土層の堆積状況は３層に分層することができた。上から第１層・灰黄褐色粘質土、第２層・暗灰黄褐色粘質土、第３層・黄褐色粘質土の順に堆積する。最下層の第３層は墳丘側から土が流れ込んで堆積しているものと思われる。遺物はTK43～TK209形式併行期とみられる須恵器杯身・杯蓋（第29図55・56、図版23）・高坏（第29図57・58、図版23）、土師器壺（第29図59）、滑石製臼玉（第34図102～106、図版29）、馬歯などが出土した。遺物は主として第２・３層から出土している。出土遺物から最終埋没は６世紀後半～７世紀前半のことと思われる。

溝状遺構（SD-32）（第22図、図版7・8）

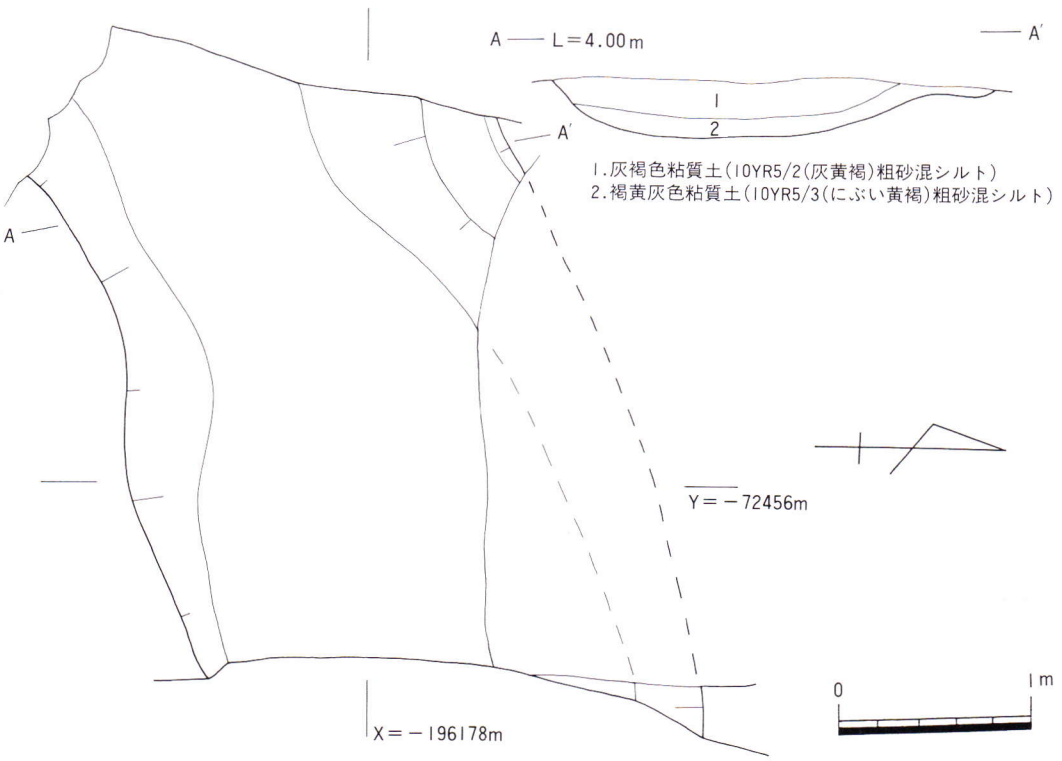
B区・C区にまたがって検出された。N-70°-Eの方向性を持つ。幅1.2m、深さ40cmを測る浅いU字溝である。覆土は第１層・灰褐色粘質土（10YR5/2（灰黄褐）粗砂混シルト）と第２層・褐黄灰色粘質土（10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト）の2層に分層できる。遺物はコンテナに１箱分出土した。ほとんどは土師器で若干の須恵器が入るのみである。土師器甕には韓式系のものがみられる。時期は出土遺物から須恵器TK23～47型式併行期と考えることができる。

不明遺構（SX-4）（第23図）

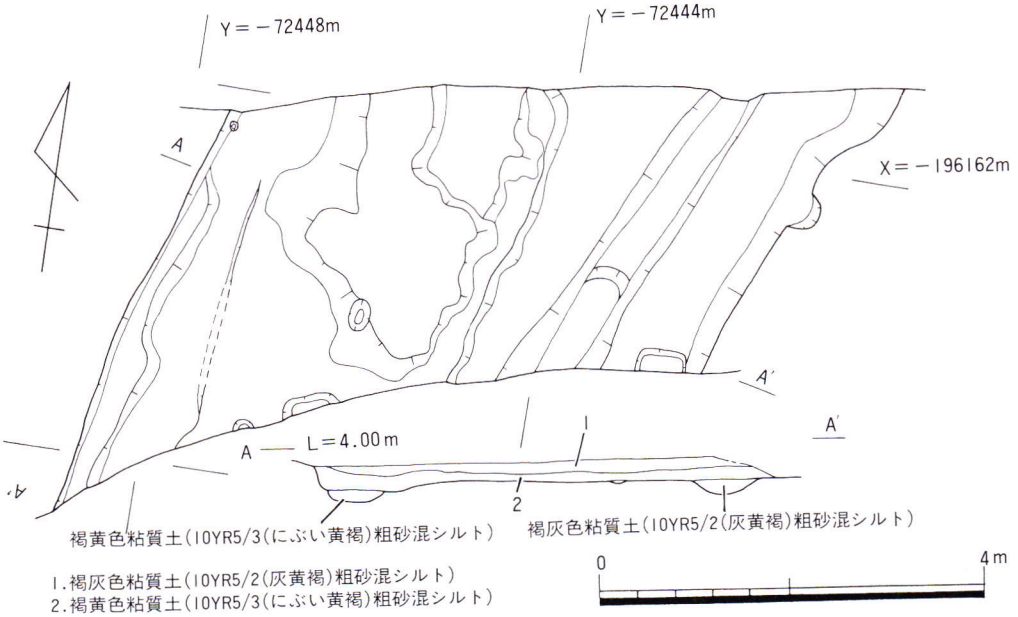
B区中央部付近、堀立柱建物１の東隣に検出された。南北に走る溝状の遺構である。幅5.6m、深さ30cmを測る。堀立柱建物１と方向性を同じくする西側の肩はほぼ垂直に落ちているが、東側は緩やかである。また、底面は全体的に平坦であるが、両肩の付近にそれと平行する溝状の落込みがみられる。覆土からはコンテナ１箱分の遺物が出土した。遺物の種類は須恵器、土師器、製塩土器、滑石製臼玉などで竪穴住居と類似した遺物構成をみせる事などから、SX-4は竪穴住居の残骸の可能性がある。



第21図　方墳（SD-31）遺構平面図及び断面図



第22図　SD-32遺構平面図及び断面図



第23図　SX-4遺構平面図及び断面図

5、遺物

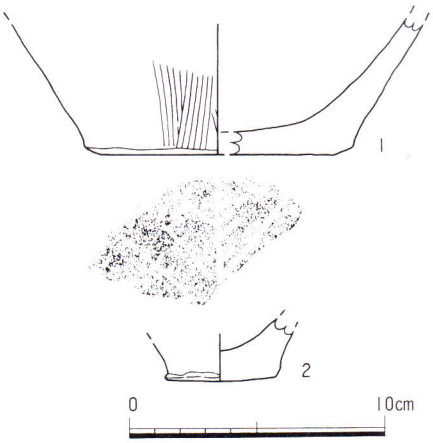
本章では、出土遺物についてA区とB・C区に2分して扱い、大きく各時代に分類して触れ、古墳時代の竪穴住居跡等の一括資料は遺構ごとの分類で記述し、また特殊な遺物についてはその器種等により記載を行った。なお、今回の調査で出土した遺物は、弥生時代中期から中近世のものまで含まれ、複合的な様相を呈しているが、集落が営まれていたとみられる本遺跡の中心的な時期は古墳時代中期後半から後期であり、この時期の遺物が最も多く出土している。なお、稀薄ではあるが、鎌倉・室町時代の遺構から瓦器や備前焼など、江戸時代の遺構から肥前系陶磁器なども出土している。

(1)A区の遺物

弥生時代の遺物(第24図、図版20)

今回の調査においては、弥生時代の遺構は全く検出できなかったが、弥生土器等の遺物は数点出土している。

まず1は弥生時代中期の底部である。外面はタテハケ調整が施され、底部には木の葉の圧痕が明瞭に残る。また胎土には石英、片岩粒がわずかに含まれる。2は、弥生時代後期の甕の底部とみられ、いわゆるV様式のもので外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈する。1・2ともにSD-9から出土した。

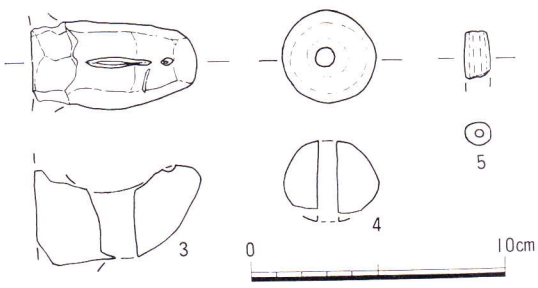


第24図　遺物実測図1

古墳時代の遺物(第25～28図、図版20・21)

SD-8出土遺物(第25図3～5、図版21)

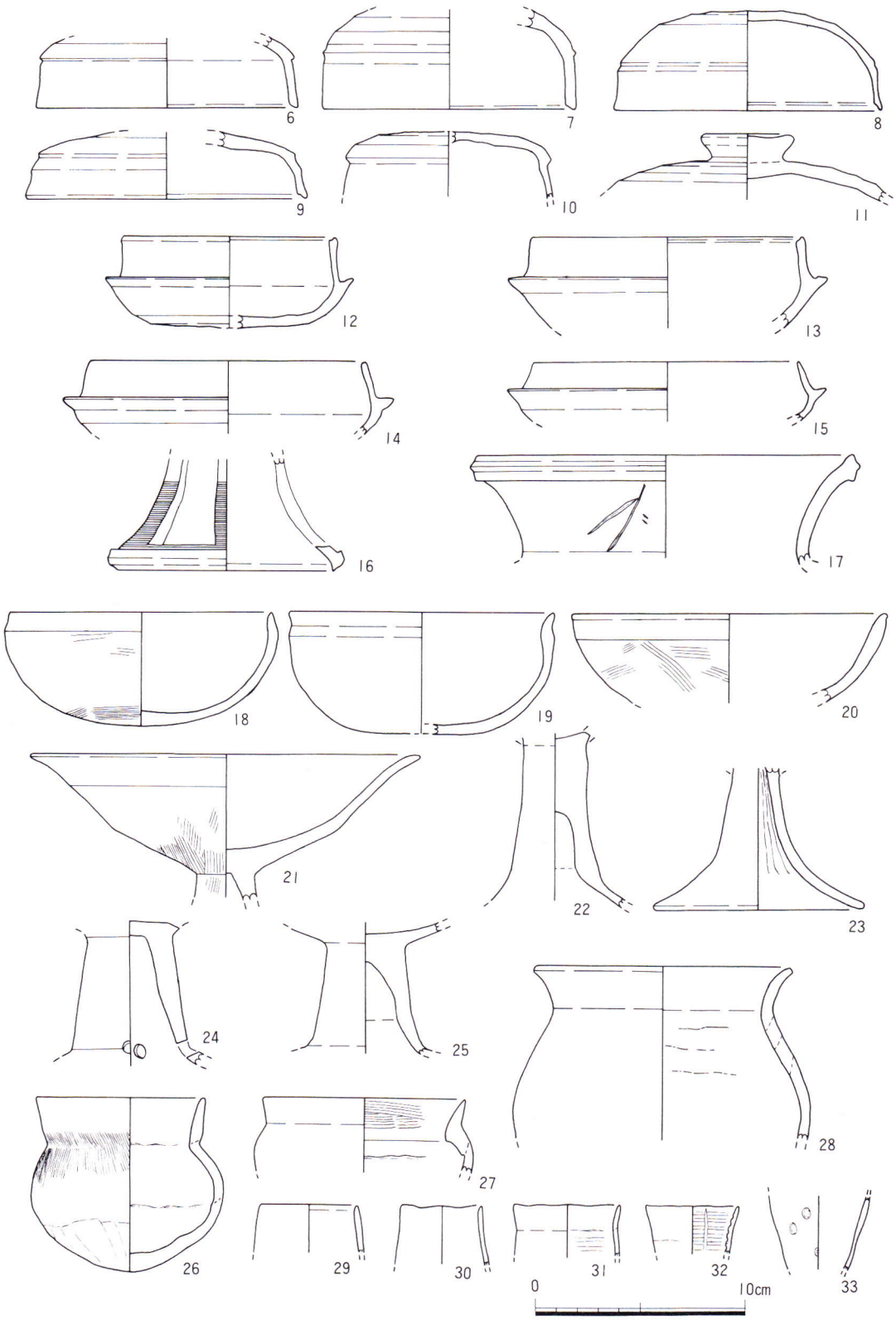
まず3は土鍋の把手である。上面から下方へ貫く切り込みがみられる。4・5はそれぞれ土師質の土玉、土錘とみられる。土玉(4)は断面が楕円形を呈し、やや最大径の部分で稜を成す。胎土には石英、長石などを含み赤みの褐色を呈する。5の土錘は暗灰色の色調をもつもので、その形状から土製の管状製品の可能性も考えられる。



第25図　遺物実測図2

SD-9出土遺物(第26図6～33)

須恵器は蓋杯・高杯・甕などがある。まず蓋杯の蓋(6～10)では、やや肉厚な(6・7)の肩部にみる稜は比較的鋭く、口縁端部に内傾する明瞭な凹面を成す。天井部の回転ヘラ削り調整は、2/3と比較的広いものである。蓋(8)は肩部の稜線は丸く沈線状に施されたもので、


6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

第26図　遺物実測図 3

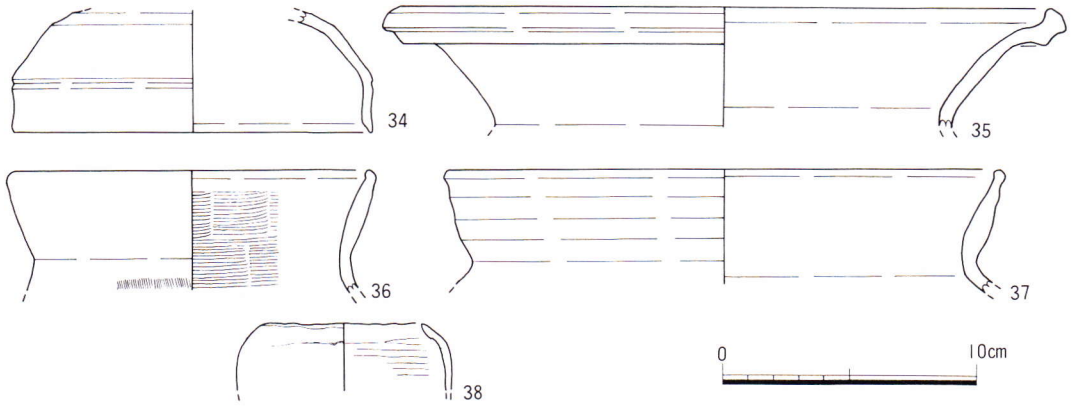
口縁部には内傾する明瞭な段を成す。この蓋の天井部における回転ヘラ削り調整は約1/2程度である。9･10の蓋はやや器高が低いタイプのもので、肩部にやや丸みをもつ稜が施されている。また11の蓋は、比較的大型の有蓋高杯の蓋とみられ、天井部の中央に凸形の張り付けによるとみられるつまみが付されている。次に、杯身(12～15)では、まず口縁部径が10.1cmと比較的小さく、ほぼ直立する口縁部を呈する12がある。この杯身は口縁端部に内傾する明瞭な段をもち、底部外面の回転ヘラ削り調整は1/2前後である。13の杯身も12と同じく口縁端部に明瞭な段をもつが、立ち上がりはやや内向気味であり、口径も13.0cmと大きいものである。14・15は内向気味に立ち上がる口縁部を呈し、口縁端部は丸く収められているもので焼成があまく、特に15は口縁部の立ち上がりが短く、比較的時期の新しいものである。16は、高杯の脚部であり、回転カキ目調整が施されておりスカシ孔を三ヶ所にもつ。17の甕は、ゆるやかに外反する口頸部を呈し、端部を上下方に屈曲させている。また頸部外面にはヘラ記号が施されている。

次に、土師器には杯・高杯・壺・甕・甑・製塩土器などがある。杯(18・19・20)は、口径12cmから15cm大のものが圧倒的に多い。なかでも口縁部の形態がやや内彎するもの(18)や外反するもの(19)があり、また器肉が特に肉厚な(20)などがある。これら杯の調整は、19は剝離のため不明瞭であるが、18・20の外面はハケ調整ののち指ナデによって整形している。また口縁端部はともに強いヨコナデ調整によっている。次に、高杯では21～25がある。まず杯部(21)はやや屈曲してのび端部で外反する口縁部をもち、欠失している脚部には23のようなタイプが付くものである。内外面とも剝離が激しく、一部に残る調整からハケ調整であることがわかる。脚部(22・23)はゆるやかに開くタイプであり、23の内面には成形時の絞り目が顕著に残る。また、24・25の脚部は前者とは異なり、欠失している端部は屈曲して開くタイプのもので、24の屈曲部には4ヶ所の穿孔がみられる。26・27は小型の壷である。26は最下層からほぼ完品の状態で出土したもので、剝離等によって調整は不明瞭であるが頸部にはタテハケ調整がみられ、また体部外面の一部には黒斑がみられる。この壷の胎土には片岩やクサリ礫が多く含まれる。27は肉厚の頸部から外反してのびる口縁部をもつもので、口縁部内面にはヨコハケ調整を施している。甕(28)は体部からゆるやかな曲線を描き、外反して口縁部を形成するものである。

次に、製塩土器(29～33)ではすべて器壁が薄く、底部は欠失しているが丸底とみられるいわゆる丸底II類が出土している。これらの製塩土器ではやや内向気味に口縁部を形成する29・30、外方にほぼ直にのびる32・33や両者の中間的なやや外反して口縁部を形成する31がある。外面調整は、ほとんど指ナデであるのに対し、内面は指ナデ調整のものと貝殻条痕のものがあり、特異なものとして外面に竹管文を施した例(33)がある。

SX-2出土遺物(第27図34～38)

SX-2は近世の遺構であるがSD-9埋没面上に存在するものである。このため覆土中にはSD-9の遺物とみられる古墳時代のものが多量に含まれていたためここに触れておく。



第27図　遺物実測図 4

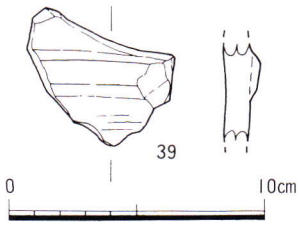
まず須恵器では蓋杯の蓋(34)、甕の口縁部(35)などがある。蓋(34)は 8 と同様に肩部の稜線は丸く沈線状に施されたもので、器高は高く口縁部には内傾する明瞭な段を成す。また35の口縁部は大きく外上方に開くタイプのもので、端部は強く上方に屈曲し、肥厚する。焼成は極めて悪いものである。

次に土師器では、甕(36・37)がある。36は暗茶色の色調をもつもので、体部外面には細かいタテハケ、頸部内面には同様のヨコハケが施されている。また37は比較的大型のもので口径21.4cmを測る。口頸部は強いヨコナデ調整によって段を成す。

製塩土器(38)は、口縁部が大きく内側に折れ曲がるタイプのもので、内面には貝殻条痕を観察することができる。

埴輪(第28図39)

39はSD-9の覆土中から出土したもので、円筒埴輪の破片とみられる。外面にはタガとみられる突帯があり、わずかながらヨコハケが残る。内外面とも淡赤褐色の色調を呈し、胎土にはクサリ礫、片岩を多く含む。



第28図　遺物実測図 5

(2)B・C区の遺物

竪穴住居出土遺物(第29図40～52、図版22)

竪穴住居内から出土した遺物はほとんどが細片である。須恵器、土師器、製塩土器、滑石製臼玉等である。製塩土器、滑石製臼玉については後の項目で述べる。

SB-2出土遺物 (第29図40、図版22)

須恵器杯身(40)は灰色を呈し、外面調整は中心から2/3まで回転ヘラケズリがなされている。受け部の形状等からTK10型式に併行するものと思われる。

SB-4出土遺物 (第29図41～44、図版22)

須恵器杯蓋・杯身(41～44)などが出土した。41・42・44は明灰色を呈する杯蓋である。

41は天井と口縁部の境に稜を持つが、42・44は1条の沈線を残すのみである。杯身(43)は明灰色をしており、外面調整は中心から2/3まで回転ヘラケズリがなされている。MT15型式に併行するものと考えられる。。

SB-5出土遺物（第29図45～50、図版22）

須恵器では杯蓋(45・47)、甕の口縁部(46)などがある。45は口径13.4cmを測り、肩部に稜がみられる。47は口径13.3cmを測る。口縁部はやや開き気味で天井と口縁部の境に沈線がみられる。46は口径14.0cmを測る口縁部で波状文が成されている。土師器は杯(48・49)、壺(50)等がある。48は口径13.5cm、器高5.8cmを測る杯で、淡褐灰色をしている。外面は底部中心から1/2まで不定方向ヘラケズリ、内面はナデにより調整されている。49は淡橙灰色の杯で口径10.3cm、器高5.0cmを測る。外面には指押えの痕跡が確認される。50は口径13.8cmを測る壺で茶褐色を成す。胴部外面はタテハケにより、口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケにより調整されており、胴部内面には押圧痕がみられる。

SB-7出土遺物（第29図51・52）

51は明灰色を成す杯蓋で、天井と口縁部の境に稜を持つ。52はSB-7のカマド内から出土したもので口径16.8cmを測る土師器の甕である。色調は淡褐灰色を成し、外面には平行タタキの痕がうかがえる。韓式系のものと考えられる。

堀立柱建物出土遺物(第29図53・54、図版22)

堀立柱建物の柱穴覆土から出土した遺物は少量ですべて細片であった。

53は堀立柱建物1内から出土したもので口径13.9cm、明灰色を呈する須恵器杯蓋で、天井と口縁部の境の稜は退化した沈線が1条入るのみである。54は口径12.4cmを測る土師器の壺で色調は赤茶褐色を呈する。調整は外面口縁部はヨコハケにより、内部はナデにより調整されている。

SD-31（方墳周溝）出土遺物(第29図55～59、図版23)

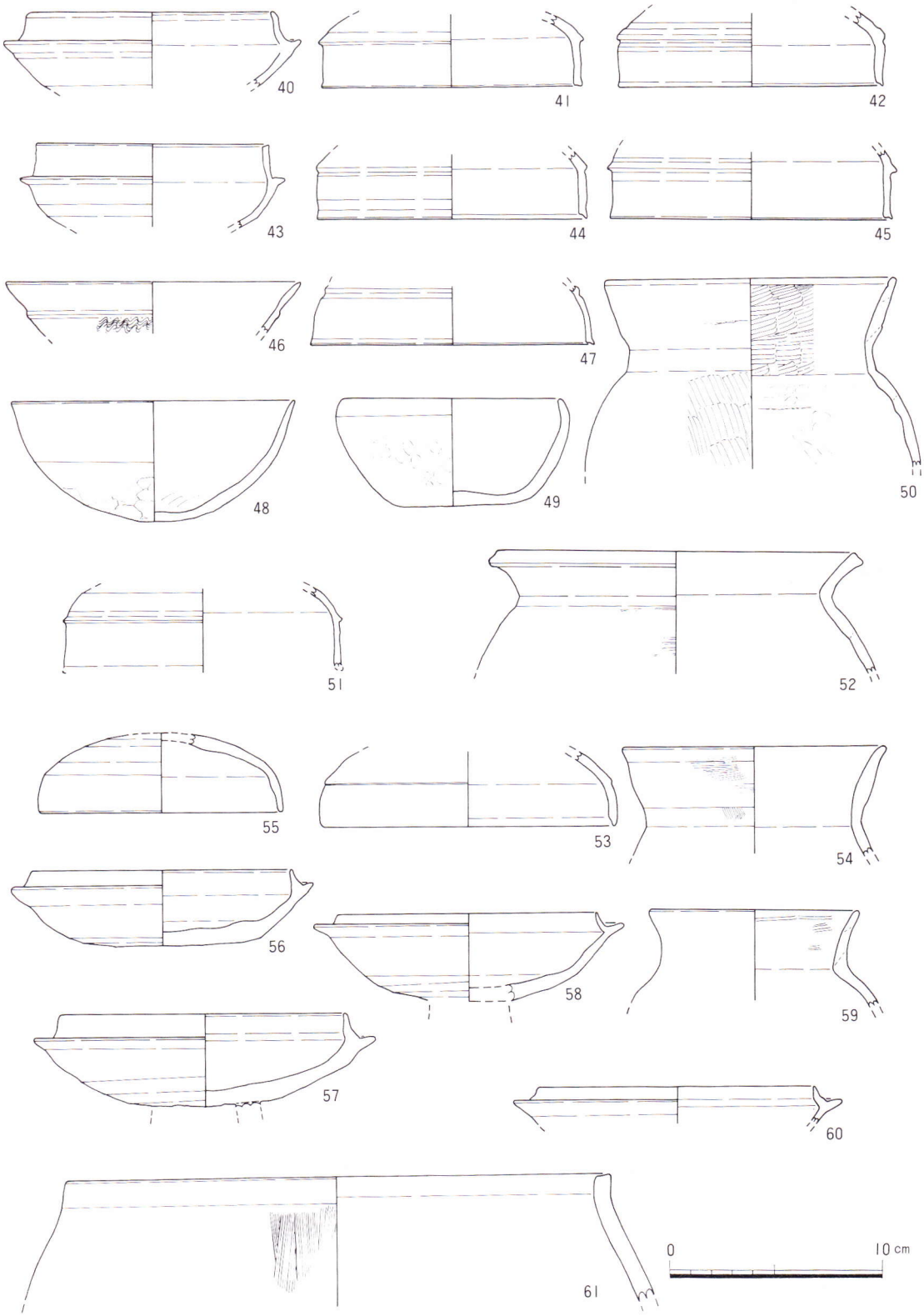
コンテナに約1箱出土している。杯蓋(55)は口径11.5cm、器高3.8cmを測り、色調は灰色を成す。56は口径12.3cm、器高3.5cmを測る杯身であり、ほぼ完形で出土した。TK209型式に併行するものと思われる。57･58は有蓋高杯の杯部である。59は土師器の壺で口径9.9cmを測る。摩滅が著しく調整は観察しがたいが口縁部内面にヨコハケがみられる。色調は淡赤褐色を呈す。

SD-24出土遺物(第29図60・61)

60は須恵器杯身でTK209型式に併行するものと思われる。61はカマドの口縁部で、色調は赤褐色を呈する。胎土には白色粒、長石、片岩などが含まれる。外面はタテハケにより、口縁部はヨコナデにより調整されている。口径は25.6cmを測る。

SD-32出土遺物(第30図62～71、図版24・25)

この遺構から出土した遺物はコンテナに約1箱分で、そのほとんどが土師器である。須恵器は数点のみの出土であった。62は須恵器甕で最大径18.1cm、残存高8.3cmを測る。体部

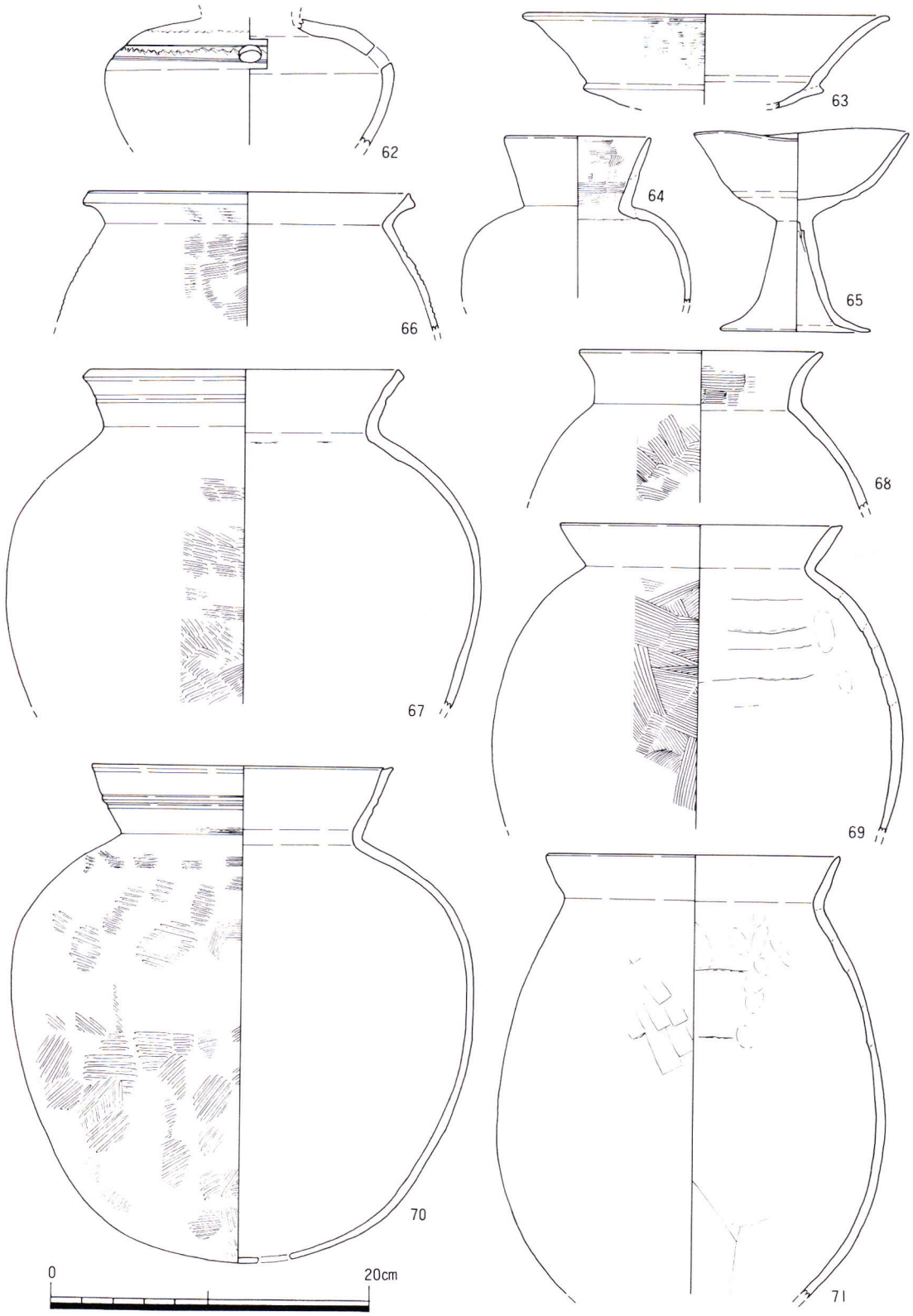


第29図　遺物実測図 6

高の半分よりも上に最大径を持つ。体部、最大径より上に沈線に挟まれた波状文を持ち、直径1.3㎜の円孔を穿つ。形状・大きさ等からTK23～47型式に併行するものと思われる。63は口径23.2㎝を測る土師器高杯の口縁部である。内湾しながら外に開く下部と外反しながら外に開く上部のつなぎ目には外側に突出した段を持つ。調整は内面と外面下部はヨコナデにより、外面上部は平行タタキ後にナデで行われている。色調は淡茶灰色を呈し、胎土には片岩を少量含んでいる。65は口径13.7㎝、底部径9.6㎝、器高12.6㎝を測る土師器の高杯でほぼ完形で出土した。色調は淡赤褐色で胎土に片岩を少量含む。調整は摩滅が著しいため不明であった。土師器壺(64)は口径9.5㎝、胴径14.5㎝、残存高10.2㎝を測る。調整は内面体部はナデにより、内面口縁部はヨコハケにより成されている。外面調整は摩滅のため不明である。色調は淡茶灰色をしており、胎土には片岩を少量含んでいる。土師器甕(66～71)には外面調整がヨコハケのもの(69)、板ナデによるもの(71)、平行タタキのもの(66、67、70)がある。平行タタキの甕については和歌山県が昭和52～54年に行った鳴神地区遺跡発掘調査のJ地区SK-271内出土遺物にその類例がみられ、韓式系のものと考えられる。68は口径15.6㎝の外反する口縁部を持つ。淡茶褐色を成し、胎土に片岩、石英を多く含む。69は口径17.8㎝、体部径25.8㎝、残存高19.6㎝を測る。直線的に外に開く口縁部は内外面ともヨコナデにより調整されており、体部内面には指圧痕が残る。外反しながら外に開く短い口縁部を持つ66は外面体部および外面口縁部にタタキ痕を残す。色調は橙灰色で胎土に多くの片岩を含む。67は口径10.5㎝、体部径30.2㎝、残存高21.6㎝を測る。直線的に外に開く口縁部には１条の沈線がめぐらされている。淡茶褐色を成し、胎土に石英、長石、片岩を多く含む。70は破砕された状態で出土したが復元するとほぼ完形になり底部に穿孔された痕跡をもつ。口径19.4㎝、体部径29.6㎝、器高31.7㎝を測り、やや内湾気味に外に開く口縁部には２条の沈線を持つ。体部最大径は器高の上部1/3のところにあり、須恵器甕と類似したプロポーションを持つ。淡橙茶色を成し、胎土に石英、長石、片岩を含む。71は口径19.9㎝、体部形24.9㎝、残存高28.0㎝を測る。体部最大径が器高の半分よりも下にあり、細長い卵型のプロポーションを持つ。内面底部と外面体部に板状工具によるナデ調整の痕がみられる。色調は淡茶褐色を成し体部外面に黒斑を持つ。胎土には石英、長石、片岩、赤色粒、白色粒が含まれる。

SX-4出土遺物(第31図72・75・76、図版26)

杯蓋(72)は明灰色を呈し、口径11.8㎝、器高4.6㎝を測るものである。天井と口縁部の境に稜を残し、口縁の端部には段がみられる。外面調整は中心から1/2以上回転ヘラケズリが施される。75は橙灰色を呈する土師器の甕で、胎土には片岩を含んでいる。調整は内面の口縁部はヨコハケによりなされており、内面肩部には指圧痕がみられる。外面調整は摩滅が著しく不明である。76は土師器高杯の脚部で脚部高7.2㎝、脚部径12.2㎝を測る。色調は淡褐灰色で、胎土には白色粒、赤色粒、片岩を含む。外面調整はヨコナデによりなされており、くびれ部のあたりに３ヶ所スカシ孔が開けられている。



第30図　遺物実測図 7

遺物包含層出土遺物(第31図73・74、図版27)

73・74は、B区において第3層から出土した遺物である。73は明灰色を呈する杯蓋で、天井部と口縁部の境に稜があり、口縁の端部には段がみられる。外面調整は中心から2/3まで回転ヘラケズリがなされている。74は明灰色を呈し、口径10.4cm、器高5.4cmを測るものである。たちあがりの端部は丸く仕上げられている。外面調整は中心からたちあがりの付け根部分のところまで回転ヘラケズリが施される。MT15型式に併行するものと思われる。

丸瓦(図版27a)が出土した。残存長27.1cm、残存幅14.7cm、高さ7.2cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、やや焼成不良の感がする。径1.4cmの孔が玉縁部分などに2ヶ所みられることや、形態的なことなどから軒丸瓦の可能性もある。B区第3層からの出土である。

この他、第3層からは瓦器などの鎌倉・室町時代の遺物が出土している。

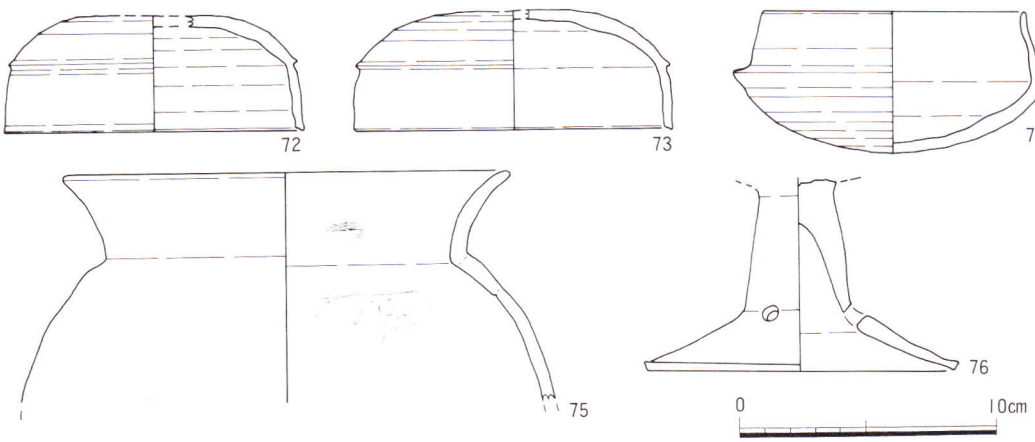
製塩土器(第32図77～85、図版28)

出土した製塩土器はすべて器厚が2～3mmと薄く、淡橙灰色系をしている。ほとんどが口縁部を直線的に内傾させたものである。

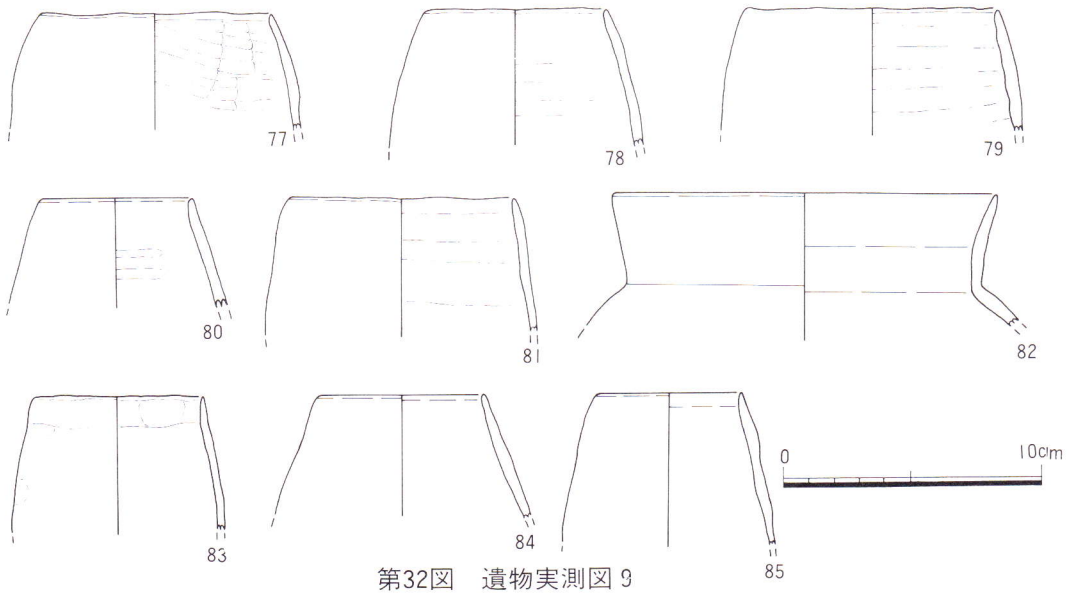
77は橙灰色をしており、胎土に黒色粒、長石を含む。口径6.1cm、器厚は2.0～3.0mmを測る。外面はナデにより調整されており、内面には貝殻条痕がうかがえる。78は口径4.8cm、器厚2.0mmを測り、色調は淡橙灰色をしている。内面には貝殻状痕を残し、外面はタテナデにより調整されている。79は口径6.7cm、器厚2.0～3.0mmを測る。橙灰色をしており、胎土に赤色粒を含む。外面はナデにより調整されており、内面には貝殻条痕が確認された。77～79はSB-4から出土した。

80は口縁部が直線的に内傾している。外面はヨコナデがされており、内面には貝殻条痕がみられる。橙褐灰色を呈する81は胎土に赤色粒、片岩を含む。口径6.0cm、器厚2.0mmを測り、内面に貝殻条痕、外面にナデの痕跡を残す。80・81はSB-5から出土した。

82は口径10.2cm、高さ2.4cmの口縁部を持つ。色調は内外面とも淡橙灰色であるが、その断面は黒灰色をしている。胎土には赤色粒、片岩を含み、調整は内外面ともヨコナデによる。第3層から出土したものである。



第31図　遺物実測図8

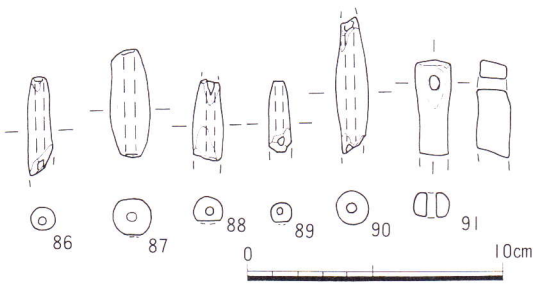


第32図　遺物実測図9

83は乳灰色を呈し、口縁部は内傾しているが端部から7㎜はほぼ垂直に立ち上がるものである。内外面に押圧痕がみられ、調整はナデによるものと思われる。淡橙灰色を呈する84は直線的に内傾する口縁を持ち、内外面ともナデによる調整で仕上げられている。85は橙灰色を呈し、口縁端部が鋭くなっており、口径3.8cm、器厚2.0～3.0㎜を測る。調整は内外面ともナデによるものである。83～85はSX-4から出土した。

土錘（第33図86～91、図版29）

土錘は、細長く両端が細くなった紡錘形のもの（86・88～90）、両端のやや細くなった円筒形のもの（87）、棒状両孔式のもの（91）がある。86はSB-4から出土したもので、淡褐灰色を呈し、直径1.0cmを測る。87は淡褐灰色を呈する。直径1.5cmを測るものである。91は淡灰褐色であり、孔径4.0㎜の孔をもつ。



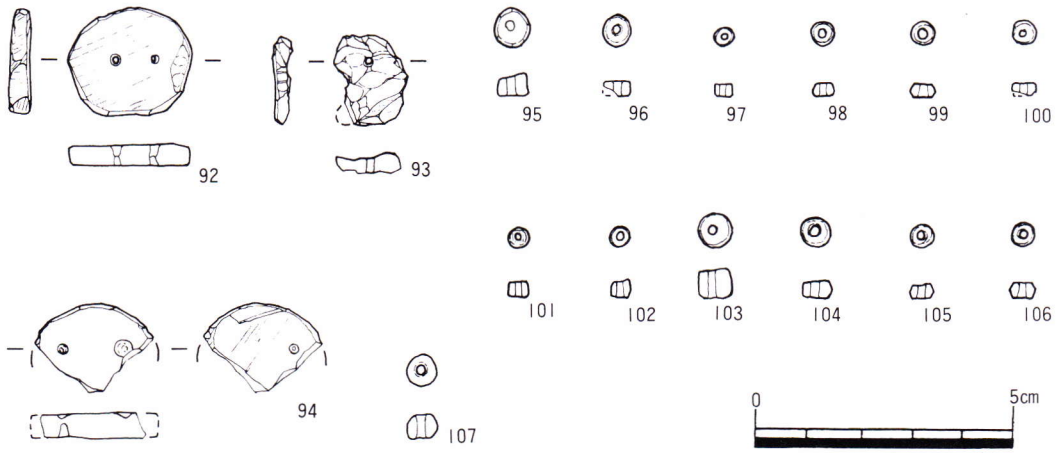
第33図　遺物実測図10

石製品

石製模造品（第34図、図版29）は滑石製の有孔円板（92）、臼玉（95～106）、有孔円板未製品（94）がある。他に緑色片岩製の勾玉（93）がある。

有孔円板（第34図92、図版29）は直径2.4cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cmを測る。色調は灰茶褐色を呈し、白い縞が入る。面は両面ともに研磨を受けて平滑となり、穿孔は両側から行われている。側縁部は小さい単位の研磨面をもつが研磨は雑である。SB-8からの出土である。

臼玉（第34図95～106、図版29）は色調が黒灰、茶灰、黄灰褐、黄緑、緑、濃緑色などがあり、大きさは直径0.7～0.35cm、厚さ0.6～0.25cm、孔径0.25～0.1cmの範囲である。95・103が比較的大形のものであり、97が最も小さいものである。99・105・106については、側



第34図　遺物実測図11

面がそろばん玉状の稜をもつものである。穿孔は一方向からとみられる。95はSB-4・第1層、96・97はSB-4・第3層、98はSB-7・第1層、99はSB-5・第1層、100はSB-5・第2層、101はSX-4・第2層、102～106はSD-31（方墳周溝）からの出土である。

有孔円板未製品（第34図94、図版29）は復元直径2.6cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cmを測る。色調は黄茶褐色を呈し、片方の面のみ研磨を受ける。穿孔は両側から行われているが、貫通していない。孔は研磨を受けた面から0.3cmの深さまでが1ヶ所、反対の面から0.1cmの深さで2ヶ所を穿けている。側縁部は雑な研磨がみられる。SX-4出土のものである。

SB-2・第1層から砥石（図版30a）が出土している。残存長8.5cm、幅7.9cm、厚さ6.2cmの規模を測る。上面（図版30a）と側面の片面を研磨面として用いている。底面（図版30a′）と側面の片側には刀子などで線状に刻んだ様な溝が観察できる。表面は火を受けた痕跡が残る。石材はきめの細かいものであるが、未鑑定である。

SB-4・第2層から緑色片岩製の用途不明品（図版30b）が出土した。残存長9.6cm、幅3.3cm、厚さ3.1cmを測る。棒状の製品であるが、側面に対称に研磨面をもつ。

ガラス製品

ガラス製小玉（第34図107、図版29）は、直径0.65cm、厚さ0.45cm、孔径0.15cmを測る。表面が風化しており、白色を呈する。SK-16から出土した。

自然遺物

桃核が炭化した状態で出土した（図版30c～e）。c・dはSB-4・第3層から、eはP-17掘り方から出土した。また、SB-4から骨片、SD-31（方墳周溝）・第2層から馬歯が出土した。

参考文献　和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』　1984年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981年

6、まとめ

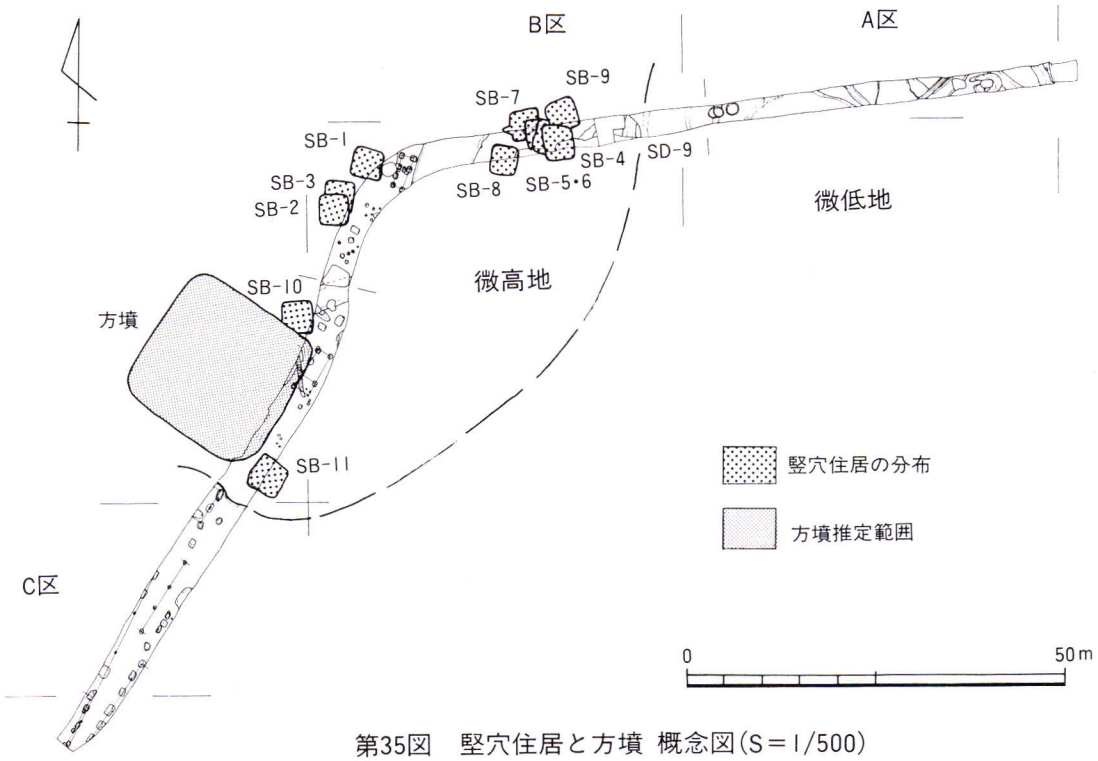
(1)B・C区検出の竪穴住居と方墳について

本調査で検出した古墳時代の竪穴住居11棟、及び方墳1基は全て第5層・黄褐色粘質土の上面において検出したものである。調査地を北東からA・B・C区に分割して調査したが、B区からC区北東半分に第5層・黄褐色粘質土がみられた。

第5層は安定した微高地を形成しており、この微高地の中心部はB区からみて調査区外北東方向にあるものと考えられる。このような微地形は鳴神V遺跡においてもみられ、方墳(方形区画墓)が群集して営まれていた。なお、A区は古墳時代の溝が多数検出されており、遺構の掘削基盤層をみるならば、A区東側が第6層・淡黄褐色砂質土の河道堆積層であり、A区西側が第7層・灰色粗砂である。以上のことから、A区は微低地であったと考えられる。微高地と微低地の境界線を推定して図に示した(第35図)。

竪穴住居について

微高地上に展開する竪穴住居群であるが、平面形は方形のプランを呈するものが一般的である。確実に平面形が長方形のものはSB-4の1棟だけである。住居の平面的な規模は、調査区が幅の狭いことなどの制約のため不明確なものが多いが、一辺2.9~3.6mの範囲となり、小規模な住居群であるといえる(竪穴住居一覧表参照)。住居の主軸の方向性はまち



第35図　竪穴住居と方墳 概念図(S=1/500)

まちであり、統一性は読みとれない（第35図）。

住居はその遺構の切り合い関係からSB-3⇨SB-2、SB-7⇨SB-6⇨SB-5⇨SB-4、SB-9⇨SB-4の新旧順位を確認することができた。SB-3⇨SB-2、SB-7⇨SB-6⇨SB-5⇨SB-4の変遷は住居の建て替えであると考えられる。

次に、出土遺物から竪穴住居の時期を考える。遺物はTK23～TK10型式併行期の須恵器などが住居の覆土下層から出土している。これらの遺物の時期から竪穴住居群は5世紀末から6世紀前半の集落であると考えられる。SB-7からはTK23型式、SB-5はTK47型式、SB-4からはMT15型式、SB-2からはTK10型式にそれぞれ併行する須恵器が出土した。

以上、住居の遺構切り合いの検討からの新旧関係、及び住居跡覆土出土遺物の年代観から鳴神Ⅳ遺跡における竪穴住居の変遷を５期に設定し以下説明する。なお、各期の設定は須恵器の型式に対応させるならば、１期をTK23型式併行期(5C末)、２期をTK23～TK47型式併行期（5C末～6C初)、３期をTK47型式併行期（6C前のやや新しい時期)、４期をMT15型式併行期（6C前)、５期をTK10型式併行期（6C中）と考えた。まず、１期はSB-7が考えられる。SB-7はカマドを西辺にもつ。２期はSB-6が考えられる。３期はSB-5・9の２棟が考えられる。SB-5は壁溝を巡らし、主柱穴をもつ。４期はSB-3・4の２棟が考えられる。SB-3・4共に壁溝及び主柱穴をもたないものである。５期はSB-2が考えられる。壁溝は無いが、カマドが南東隅に造られる。以上、５期について概観したが、SB-1･8･10･11については所属時期が不明である。

次に住居の構造について検討する。主柱穴をもつもの（SB-1･5･10）と、もたないもの（穴を掘らないもの)とがあり、共存する状況である。主柱穴は4本柱が主であることが確認でき、深さは床面から10cm前後と浅く掘り込まれているのが特徴的である。次に壁溝であるが、巡らせるものと無いものがある。時期のわかる例から推定するならば古い段階のものが壁溝をもつ様である。カマドは１期から５期を通して作られていたものとみられる。貯蔵穴は調査範囲内では確認できなかった。

出土遺物については、製塩土器が各期にわたって住居覆土から出土しており、住居11棟のうち８棟から出土している。おそらくは、ほとんどの住居で製塩土器を所有していたものと考えられる（竪穴住居一覧表参照)。また、滑石製模造品がSB-4・5・7・8から出土している。SB-8の有孔円板１点を除けば、あとは臼玉であり、SB-4･5･7から出土した。SB-4・5・7は住居の建て替えを行ったものと考えられ、この住居に居住した人は滑石製臼玉を使用し続けた人々であったといえる。それに加えて、SB-4・5で鉱滓、SB-6でフイゴが出土した。これらの遺物はSB-7⇨6⇨5⇨4と住居を建て替えた人々が鉄製品を作っていたことを推定させる。また、SX-4から出土した滑石製有孔円板未製品は、この集落において滑石製模造品を製造していたことを示している。また、SD-32(５世紀末頃)から韓式系土器が出土していることも重要である。

以上、検出した鳴神Ⅳ遺跡の古墳時代中期後半～後期前半の集落について、簡単に整理

竪穴住居一覧表

住居No.	規模(m)	主軸	主柱穴	覆土(cm)	壁溝	カマド	製塩土器	滑石製模造品	主な出土遺物	備　考
SB1	2.0以上	N-14°-E	○	15	○		○		須恵器杯蓋、土師器	
SB2	2.1以上	N-10°-E		10		○			須恵器杯身、砥石	
SB3	1.6以上	N-10°-E		10			○			
SB4	2.9 ＊ 3.0以上	N-7°-W	無	75			○	臼玉3	須恵器杯蓋・身・高杯・土錘、鉱滓 鉄製品(リング状・板状・刀子) 炭化桃核、片岩ハンマー、骨片	平面形が長方形
SB5	2.4以上	N-12°-E	○	25	○		○	臼玉2	須恵器杯蓋・甕、 完形の土師器椀(柱穴内) 鉱滓	
SB6	1.5以上	N-26°-W	無	15			○		須恵器、土師器 フイゴ羽口	
SB7	1.4以上	N-14°-W	無	10		○	○	臼玉1	須恵器杯蓋(カマド内)	
SB8	2.9 ＊ 1.8以上	N-6°-E	無	10				有孔円板1	須恵器、土師器	
SB9	2.9以上	N-27°-W		35			○		須恵器、土師器	
SB10	1.7以上	N-3°-E		5	○	○			土師器	
SB11	3.6 ＊ 1.6以上	N-30°-E	○	5			○		須恵器、土師器	
SX4	5.5 ＊ 6.8以上	N-14°-E		40			○	臼玉1、 有孔円板未製品 1	須恵器、土師器	住居の残骸？

を行った。昭和52年～54年に行われた国道24号バイパス建設に伴う調査で検出されたM地区（音浦遺跡）の規模の確認された6棟の竪穴住居と比較するならば、本調査検出の竪穴住居はひとまわり規模の小さなものであることが指摘できる。更に比較するならば、相違点として、M地区のものは主柱穴が明確に4本であり、柱穴の深さも深く、貯蔵穴をもつものが一般的である。共通点としては、M地区の住居からも滑石製模造品が出土することである。なお、これらの住居は5世紀末から6世紀前半の時期であると考えられており、本調査検出の竪穴住居群と同時期のものであり、住居の共通点及び相違点は何に起因するものなのか、今後の課題であるといえる。

方墳について

本調査において、方墳の周溝の南東辺とみられる溝（SD-31）を検出した（第21図、図版18）。溝の基底部は隅丸方形を呈するものと思われ、検出長約12.8mを測り、復原するならば一辺約14mが考えられる。周溝幅約1.4m、深さ0.6mの規模をもつものである。土層の堆積状況は3層に分層でき、最下層の第3層は墳丘側から土が流れ込んで堆積しているものと考えられた。遺物は主として第2・3層からTK43～TK209型式併行期とみられる須恵器杯身・杯蓋（第29図55・56、図版23）・高坏（第29図57・58、図版23）、土師器壺（第29図59）、滑石製臼玉（第34図102～106、図版29）、馬歯などが出土した。出土遺物から最終埋

没は6世紀後半～7世紀前半のことと思われる。

検出した方墳1基は微高地上において、集落の展開が当調査区において終息、あるいは移動した後の時期のものであると考えられ、古墳時代後期後半にはこの周辺が墓域の一角を成したものであると考えられる。墓域の中心は、調査地の北西部にあるものと推定することができる。

ところで、平野部での古墳は周辺地において、鳴神Ⅴ遺跡と秋月遺跡にみられる。秋月遺跡においては古墳時代前期から後期の前方後円墳1基・方墳7基・甕棺墓1基などが検出されており、布留式古段階併行期の土師器を出土した前方後円墳を中心に展開した墓域である。

鳴神Ⅴ遺跡については、昭和52年～54年に行われた国道24号バイパス建設に伴う調査において、布留式古段階併行期の土師器を出土した円形周溝墓が1基検出されている。また、平成5年に行われた和歌山市都市計画道路建設に伴う調査において、庄内式新段階の土師器を出土した方形区画墓（方形周溝墓）から始まる方形区画墓7基（調査時にSD-46としたものを、本調査検出例からみて方墳と考える。）を検出している。この鳴神Ⅴ遺跡調査時に、庄内式新段階のいわゆる方形周溝墓から古墳時代中・後期に展開する、いわゆる方墳が、同一墓域内で同系統のものとして展開をみせたことから、同じ呼称を探し、『方形区画墓』なる名称で一括して取り扱ったが、本調査（鳴神Ⅳ遺跡）の様に単独で検出した場合に呼称に困る。同じものを、あれこれ違う呼び方で呼んでは混乱をきたすものと考え、ここでは以前の『方形区画墓』を翻して『方墳』と呼ぶことにする。

したがって、鳴神Ⅴ遺跡検出の円形周溝墓は円墳、方形区画墓は方墳と以後呼ぶものとする。ただ、庄内式新段階や布留式古段階の時期は古墳の初現時期の問題を強く含むものであるが、その問題には深く立ち入らずに名称を用いるものとしたい。

さて、本調査（鳴神Ⅳ遺跡）で検出した方墳であるが、鳴神Ⅴ遺跡検出の方墳群と比較した場合、周溝断面形がU字形であることや、平面形が類似すること、馬歯が出土すること、埴輪が出土しないことなど類似する点が多い。特に、鳴神Ⅴ遺跡検出の古墳時代後期（TK-217型式併行期の須恵器が最終埋没土から出土する。）の方墳周溝・SD-46とは平面形の規模がほぼ一致する。次に、相違点として、本遺跡検出の方墳は周溝から滑石製模造品の臼玉（第34図102～106、図版29）が出土することがあげられる。このことは、古墳の造営者の性格と深く関わることと思われ、同一微高地上に検出した住居群のうちSB-7⇨6⇨5⇨4と住居を建て替えた人々との関係が注目される。

以上、鳴神Ⅳ遺跡で検出した古墳時代中期後半～後期前半の竪穴住居群及び古墳時代後期後半の方墳について報告したが、紀ノ川南岸の和歌山平野において、まとまった古墳時代の集落についての貴重な資料を得ることができた。また、鳴神Ⅳ遺跡で方墳を検出したことは、周辺地において秋月遺跡と鳴神Ⅴ遺跡の平野部の古墳群に加え、鳴神Ⅳ遺跡にも

古墳群が存在することを明らかにすることができた。

遺跡周辺では鳴神Ⅳ遺跡の南東に隣接して展開する花山古墳群及び花山の丘陵北西縁辺部に展開する音浦遺跡の古墳時代集落、また国道２４号バイパス建設に伴う調査で検出された鳴神Ⅳ遺跡南縁部の別単位の微高地に展開するとみられる竪穴住居などと当調査において検出した古墳時代集落との関係が重要であり、今後注意が必要であろう。

参考文献
和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』　1984年
㈶和歌山市文化体育振興事業団『鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』　1990年
㈶和歌山市文化体育振興事業団『鳴神Ⅴ遺跡発掘調査概要報告書―和歌山市都市計画道路松島本渡線建設に伴う調査報告―』　1994年
㈶和歌山県文化財センター『秋月遺跡―向陽高校危険校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』　1994年

(2)A・C区検出の噴砂について

A区東端深掘グリッド及びC区南西端の２ヶ所で地震による液状化現象に起因する噴砂の砂脈を検出した。基本土層の第７層・灰色粗砂（10YR6/1(褐灰)粗砂）が液状化した地層である(第５図参照)。この液状化層は平成５年の当事業団の鳴神Ⅴ遺跡の調査時にも確認することができた。

A区においては噴砂の砂脈は遺構面には及ばず、遺構面下の無遺物層中において観察することができた。平面的にみて、噴砂の貫入によって生じた砂脈の方向性はN-18°-WからN-42°-Wまでを測る。

C区においては、噴砂によって生じた砂脈を遺構面上に平面的にN-18°-WからN-7°-Eまでの方向性を観察することができた（図版19)。砂脈の最大幅は約３cmを測る。なお、噴砂による砂脈は平面的には遺構のある場所では遺構の輪郭に沿って形成されていることを観察することができた。また、C区の壁面に噴砂の砂脈が貫入する状況を観察することもできたが、砂脈の貫入は第１層・灰色粘質土（N3/0(暗灰)シルト）まで及んでいた（図版19)。第１層は近世以降の耕土層であり、噴砂による砂脈貫入を引き起こした地震は江戸時代以降のものであることが確認された。

ところで、周辺では太田・黒田遺跡（第24次調査）及び秋月遺跡（和歌山市教育委員会調査・昭和62年日進中学校校地内）にも噴砂検出例があり、紀ノ川北岸の川辺遺跡検出例などと含めて、この地域に発生した南海地震を考える上での貴重な資料を提供することができたといえる。

参考文献
寒川　旭『地震考古学 遺跡が語る地震の歴史』中央公論社　1992年
㈶和歌山市文化体育振興事業団『鳴神Ⅴ遺跡発掘調査概要報告書』　1994年
和歌山市教育委員会『秋月遺跡現地説明会資料―日進中学校体育倉庫建築に伴う発掘調査について―』1987年

(3)遺跡Ⅳ遺跡の地形環境

和歌山市立博物館　　額田　雅裕

1．鳴神Ⅳ遺跡付近の地形

鳴神Ⅳ遺跡は、完新世段丘（沖積段丘）Ⅱ面の旧後背低地と、一部が旧自然堤防に立地する[1]（第36図）。その北西にある鳴神Ⅵ遺跡は紀ノ川の沖積低地に立地し、両遺跡の間の北鳴神集落の北側に段丘崖が認められる。そこから発掘区域までの距離は約300mである。完新世段丘Ⅱ面は、永暦元年（1160）の大洪水によって、宮井川（当時の紀ノ川本流又は分流）が下方侵食し、沖積低地（氾濫原）が段丘化したものと考えられる[2]。同面には、条里型土地割がみられる。それは、阡陌線がN10°Wで、日前宮付近に435町が分布する[3]。宮井用水路（太田溝）は、鳴神Ⅳ遺跡の第6次発掘調査のトレンチ付近では条里型土地割の方向と一致して、東から西へ流れている。A区からB区の約70mは、用水路に沿ってその南側の正願寺墓地との間に設けられ東—西方向、B区からC区の約75mは、宮井用水路がB区の中間付近で流れが変わるため北東—南西方向となる。

トレンチ付近の微地形は、現在すべて旧後背低地にあたる。C区トレンチの西側には旧自然堤防があり、そこに北鳴神の集落が立地している。

2．トレンチ断面観察の所見

鳴神Ⅳ遺跡第6次発掘調査のトレンチにおける模式的な層序は、上位から①灰色砂混シルト、②黄褐色砂混シルト、③茶灰色砂混シルト、④灰褐色シルト、⑤黄褐色シルト、⑥黄褐色砂混シルト、⑦灰色粗砂である。A区からB区東端より約12mまでは①・②・③・⑥・⑦、そこから西南側のB区からC区では①・②・③・④・⑤・⑦が堆積している（第5図）。

①層は標高（T.P.）4m前後の厚さ10～25cmの旧耕土、②層は数cmの床土の薄層である。③層は、10～45cmの厚さで、古墳時代中期～後期の遺構面を埋積する遺物包含層である。同層は、古墳時代の遺構面を覆い、同層上面に中世（鎌倉時代～室町時代）の土壙が掘削されていることから、古墳時代後期から平安時代頃までに堆積したと考えられる。完新世段丘Ⅱ面の形成と同層の堆積終了の時期とはほぼ一致し、段丘化によって堆積環境が変わったものと思われる。④層は、最大約50cmの厚さで、C区北東端より約25mから南西側にのみ堆積する。それは、⑤層の上面が南西側へ緩く傾斜して低いため、そこを埋積したからである。⑤層は、その上面が鳴神Ⅴ遺跡において古墳時代～鎌倉時代の遺構面にあたる鍵層である。⑥層は、A区の旧河道を埋める堆積物で、古墳時代中期～後期の遺物を包含する。最下位の⑦層は、無遺物層で、上面が古墳時代中期～後期の遺構面となっており、それ以前の堆積と考えられる。A区の東端及びC区では、地震時に形成された噴砂跡が観察されたが、同層はその液状化をおこした砂層である。

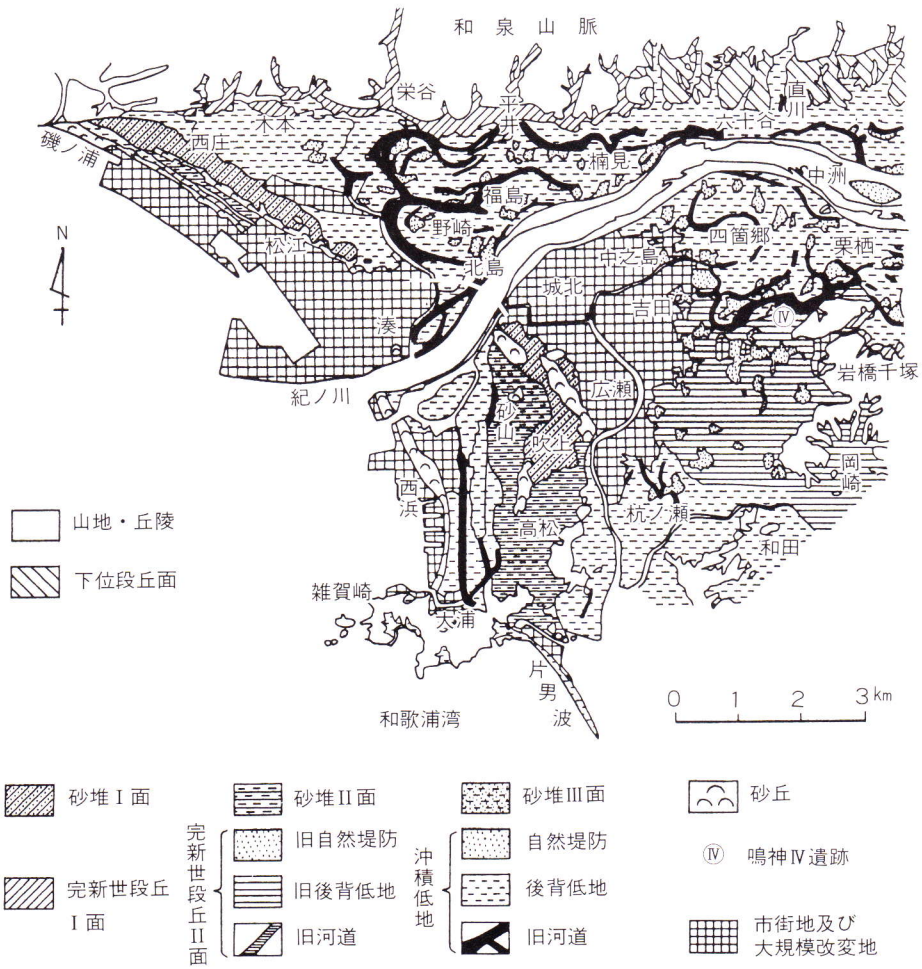
溝状遺構のうち方向性が認められる8本のうち7本は、北西—南東ないし北東—南西方

向を示し、一定の灌漑システムによる水路と考えられるが、地表面の条里型土地割とは方向が一致しない。谷状遺構(SD9)は、⑤層の上面にある緩傾斜の皿状地形で、古墳時代中期～後期の灰黄色砂混シルトで埋積されている。それは、弥生時代から古墳時代にかけての池と思われる。

A区の旧河道は、川底が南東側へ傾斜して深くなっており、南東の岸が判明していないが、川幅は少なくとも2.5m以上ある。それを埋積する堆積物（⑥層）からみて、旧河道は古墳時代中期以前のものと推定される。この旧河道は、空中写真では判読できない。

3．古墳時代頃の旧地形

古墳時代には、完新世段丘II面がまだ段丘化していないので、鳴神Ⅳ遺跡は紀ノ川の沖積低地に位置していたと考えられる。トレンチの地層断面の観察では、古墳時代の遺構面がA区からB区東端より約12mまでが後背低地で、用水路と思われる溝状遺構が数多く検出



第36図　紀ノ川下流域の地形分類図
額田（1988）を一部修正

された。そこから南西側は、古墳時代頃に微高地（埋没自然堤防）となっていたようである。微高地は、標高が約3.8mと、後背低地との比高が50cmもなく、削平された平坦面である。そこには、古墳時代中期～後期の竪穴住居が11棟、掘立柱建物６棟、古墳時代後期の方墳１基など、おもな遺構がすべて立地することから、その当時、微地形によって土地利用がわかれていたことがわかる。

③層より上位の堆積物は、旧後背低地では層厚が30～80cmであるが、旧微高地では20～40cmとやや薄い。鳴神Ⅳ遺跡では、古墳時代後期以降にそれ以前の起伏を埋積し、平坦な地形（後背低地）に変化したようである。

完新世段丘Ⅱ面では段丘化した中世初頭以降の地層が旧耕土と床土しかなく、同面は紀ノ川の氾濫を受けにくい、ほぼ完全に離水した地形面といえる。

注

1)①額田雅裕「鳴神Ｖ遺跡の地形環境」『鳴神Ｖ遺跡発掘調査概要報告書』和歌山市文化体育振興事業団、1994，49～52頁。②額田雅裕「和泉山脈と和歌山平野」『和歌山地理』８，1988，11～24頁。

2)額田雅裕「太田城付近の地形環境」『和歌山市立博物館研究紀要』２，1987，24～41頁。

3)中野榮治「名草郡の条里」『紀伊国の条里制』古今書院，1989，113～166頁。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なるかみよんいせきだい6じはっくつちょうさがいほう
書　　名	鳴神Ⅳ遺跡第6次発掘調査概報
副書名	—地方改善施設整備事業鳴神地区道路改良工事に伴う調査報告—
巻　次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	北野隆亮　井馬好英　木村善晶
編集機関	財団法人和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640　和歌山県和歌山市西汀丁29　ＴＥＬ0734-32-0012
発行年月日	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
なるかみよん 鳴神Ⅳ いせき 遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 なるかみ 鳴神	3020150	316	34° 13′ 43″	135° 12′ 44″	19941004 19941216	520	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳴神Ⅳ遺跡	集落 古墳	古墳時代	竪穴住居 11 掘立柱建物 6 柵列 1、方墳 1	須恵器、土師器 製塩土器、土錘 滑石製摸造品	古墳時代の集落 古墳

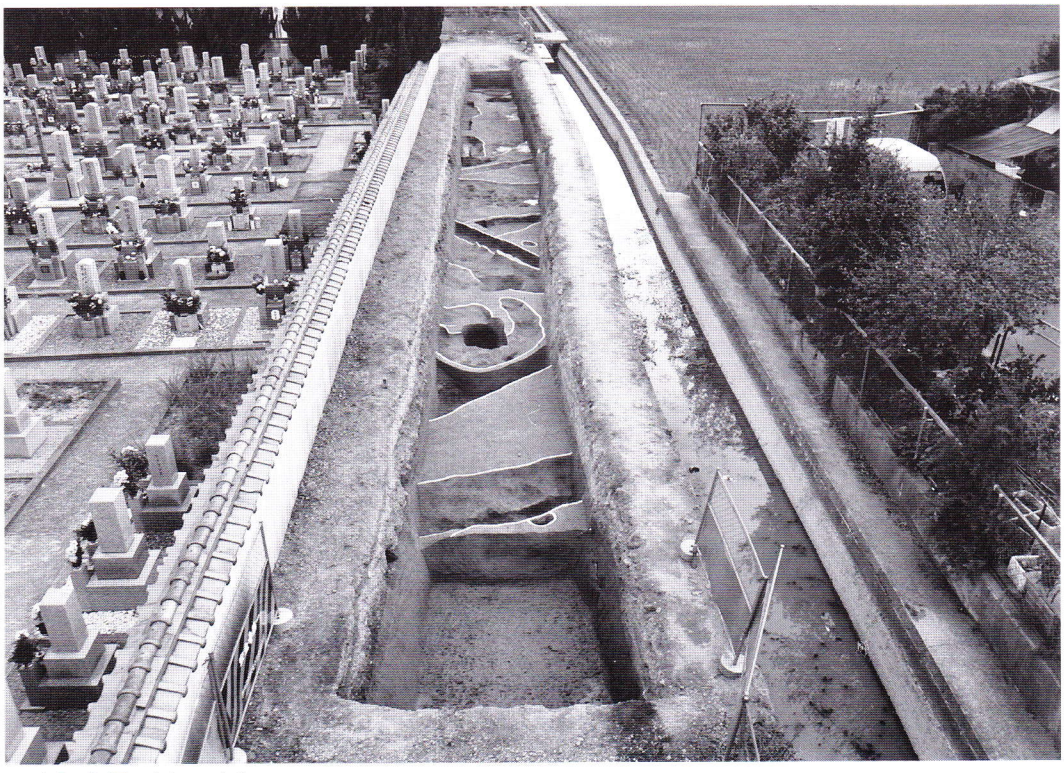
図　　版

A区 調査前（東から）

B区 調査前（東から）

図版2

C区 調査前（南東から）



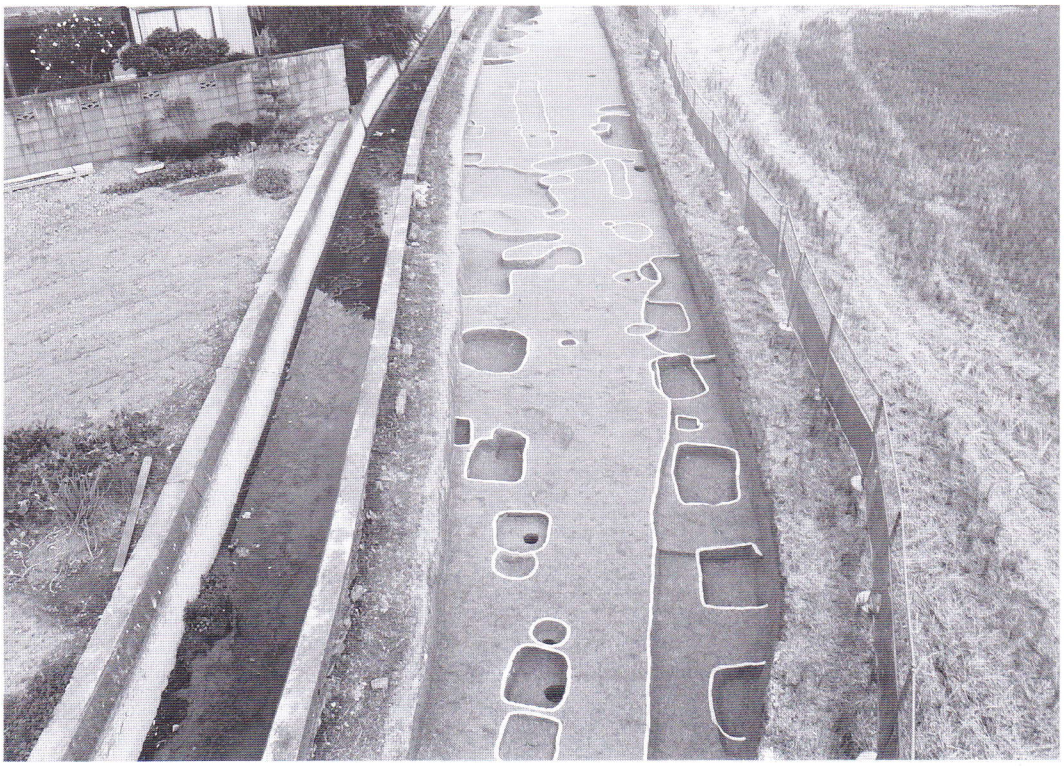
A区 全景（東から）

B区 全景（東から）

B区 全景（南西から）

図版4

C区 全景（北東から）

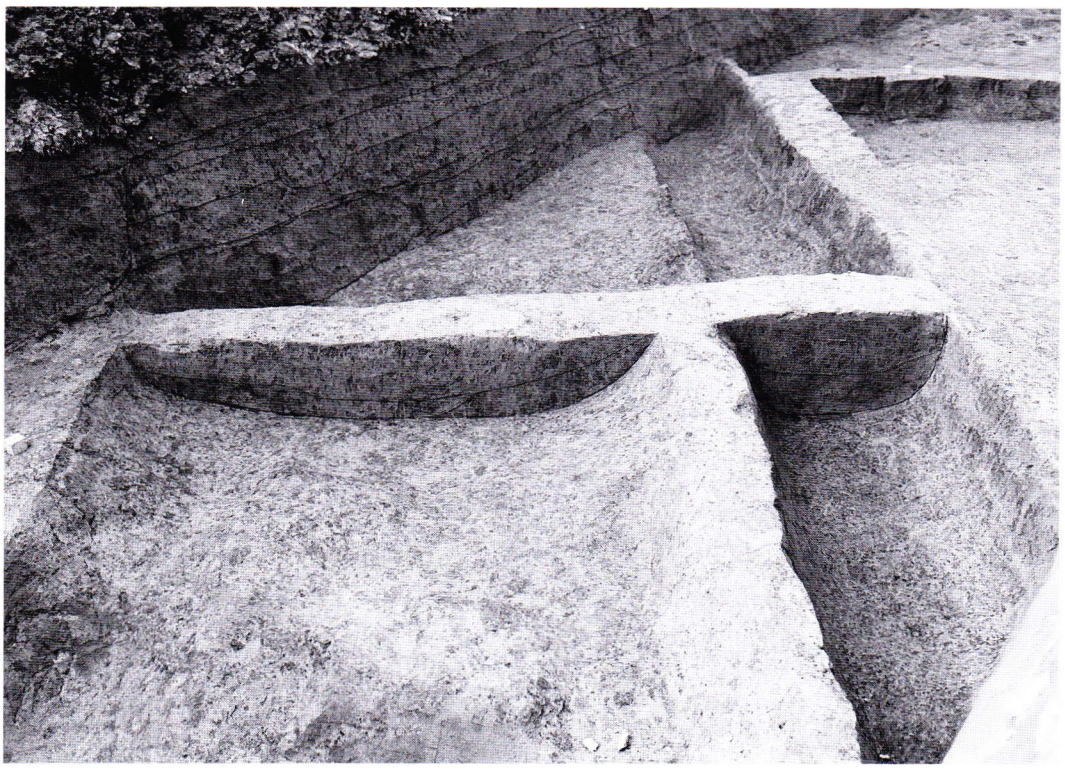


C区 全景（南西から）

A区 SD-3（西から）

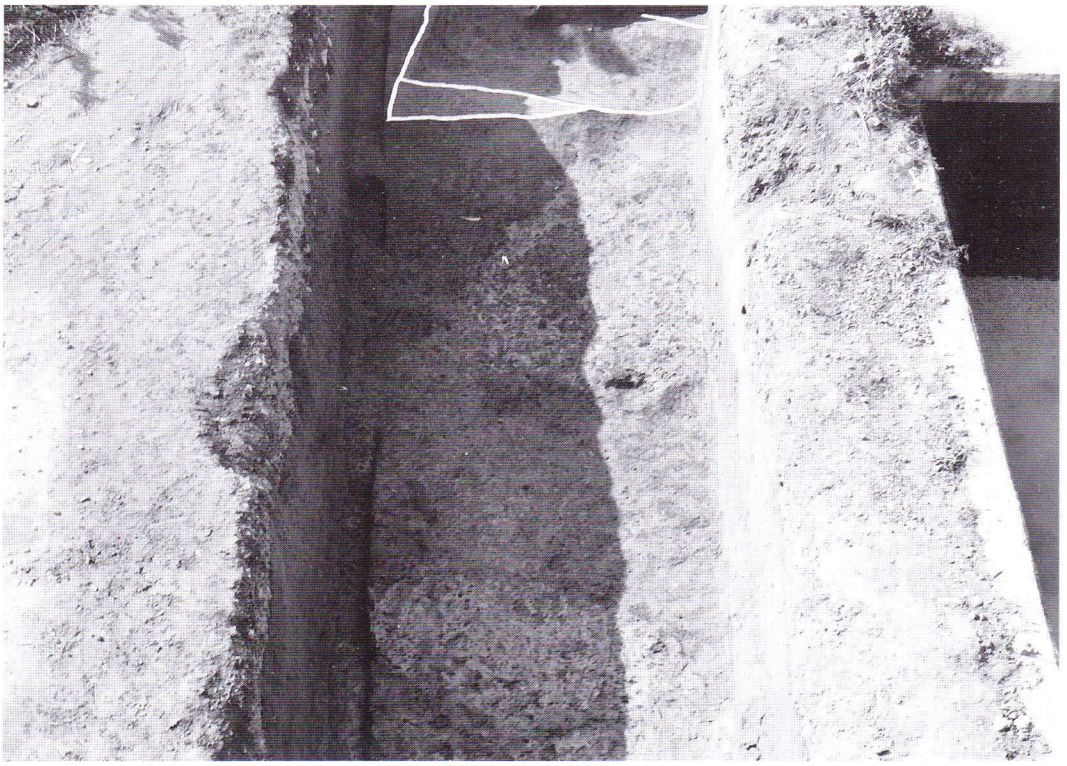
A区 SD-4（北から）

図版6



A区 SD-6・7土層堆積状況（北から）

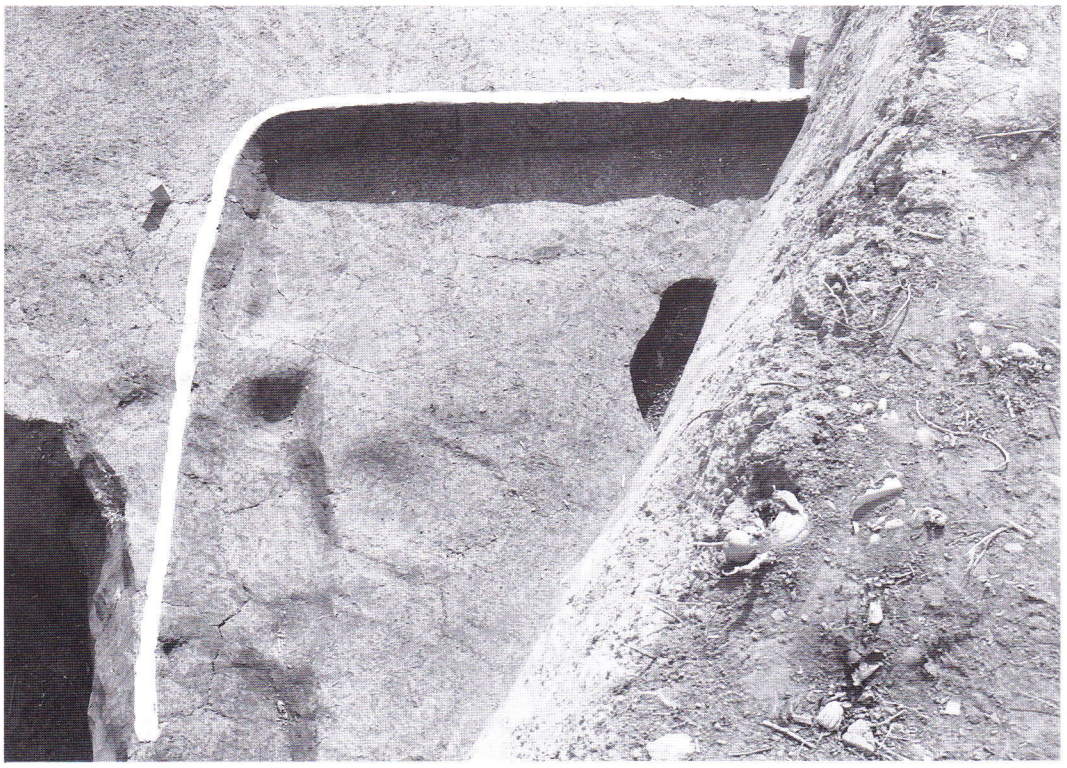
A区 SD-8（北から）



B区 SD-9（東から）

C区 SD-32土層堆積状況（東から）

C区 SD-32遺物出土状況（西から）

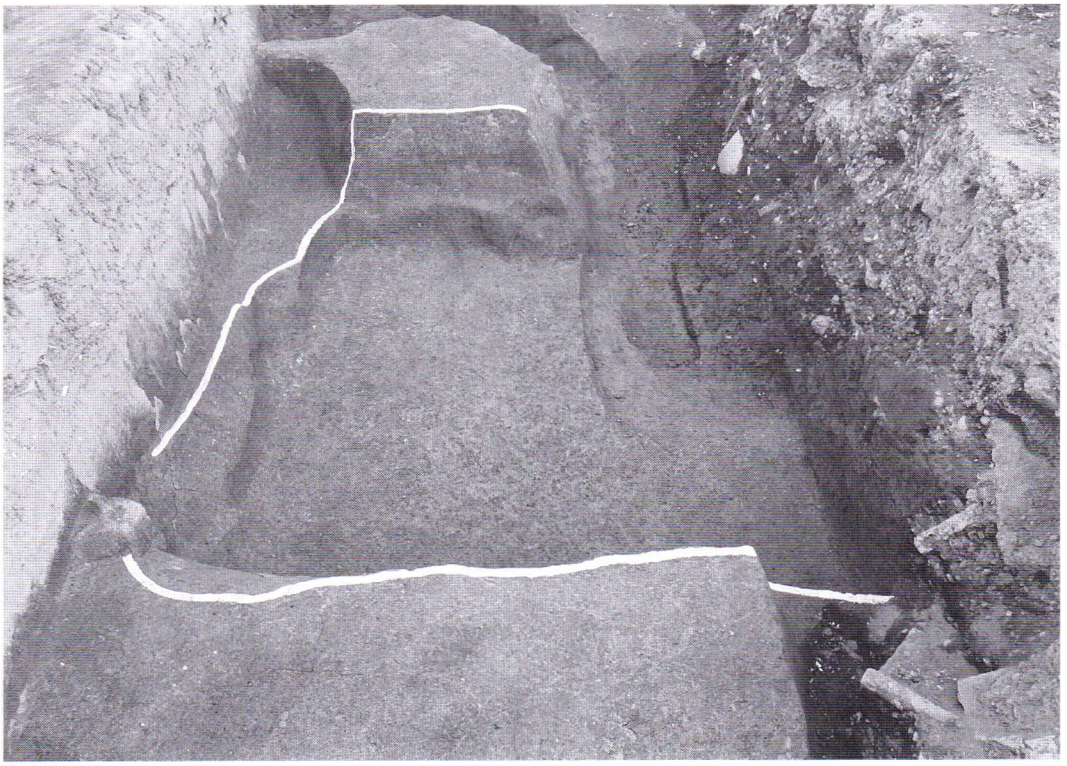


B区 SB-1（北から）

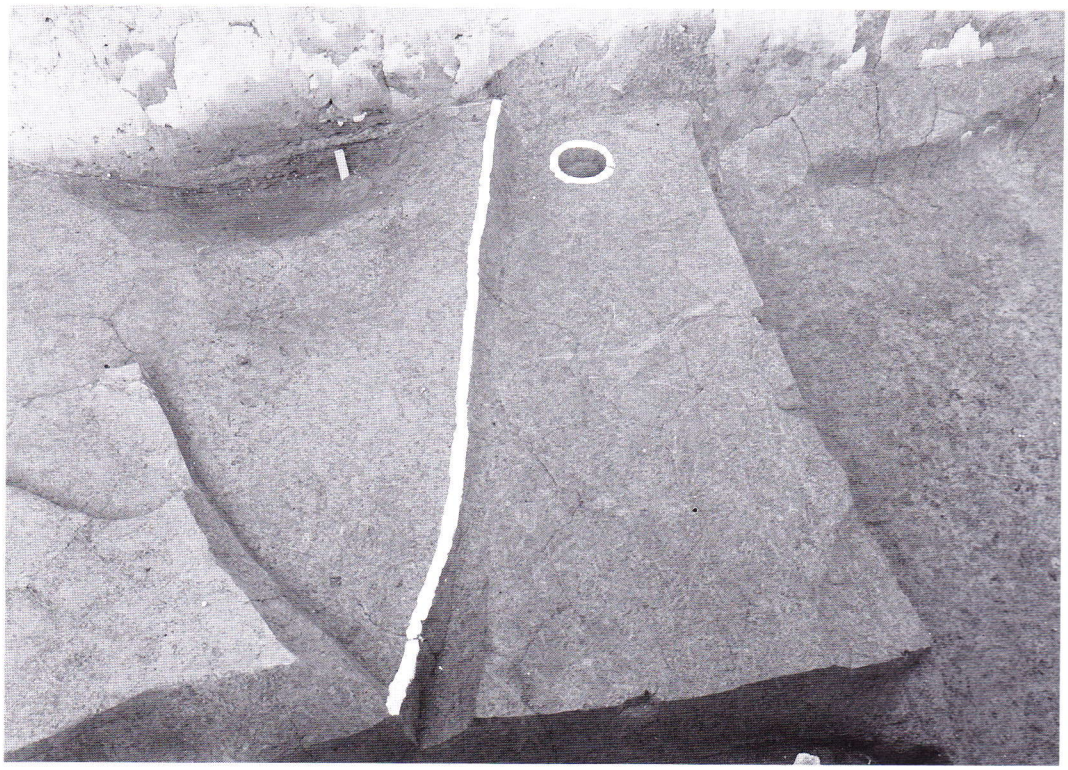
B区 SB-2・3（南東から）

B区 SB-2カマド断割り状況（東から）

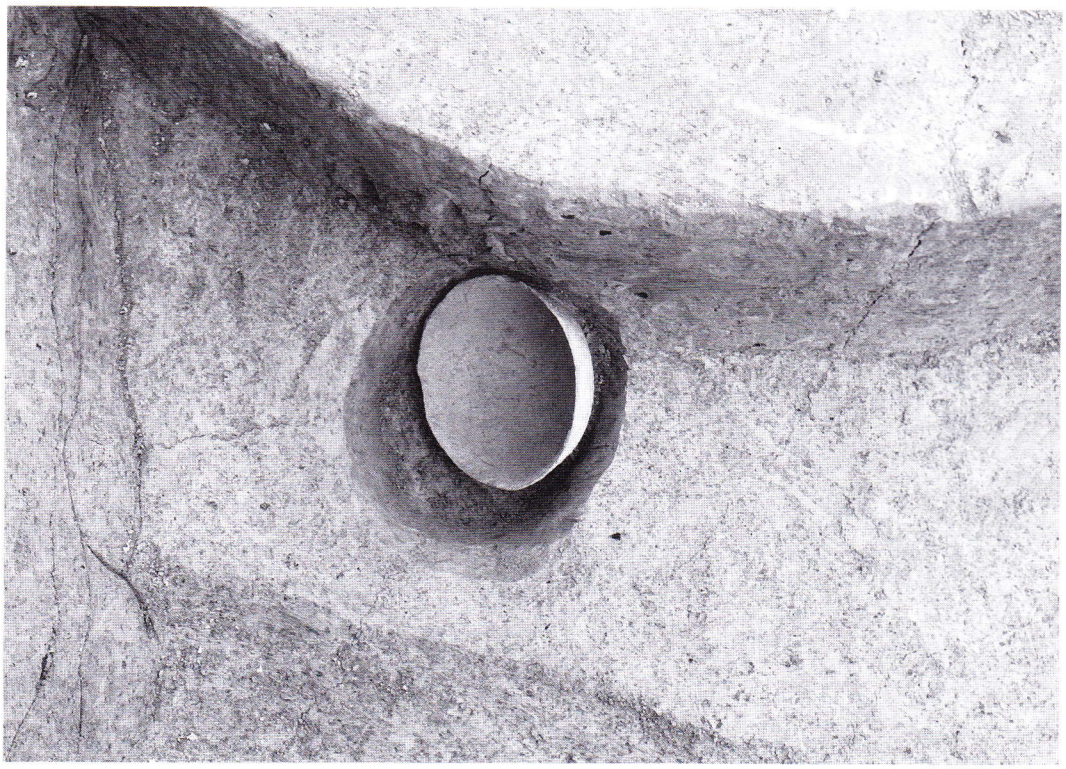
B区 SB-4・5・6・7・9（南から）



B区 SB-4（西から）

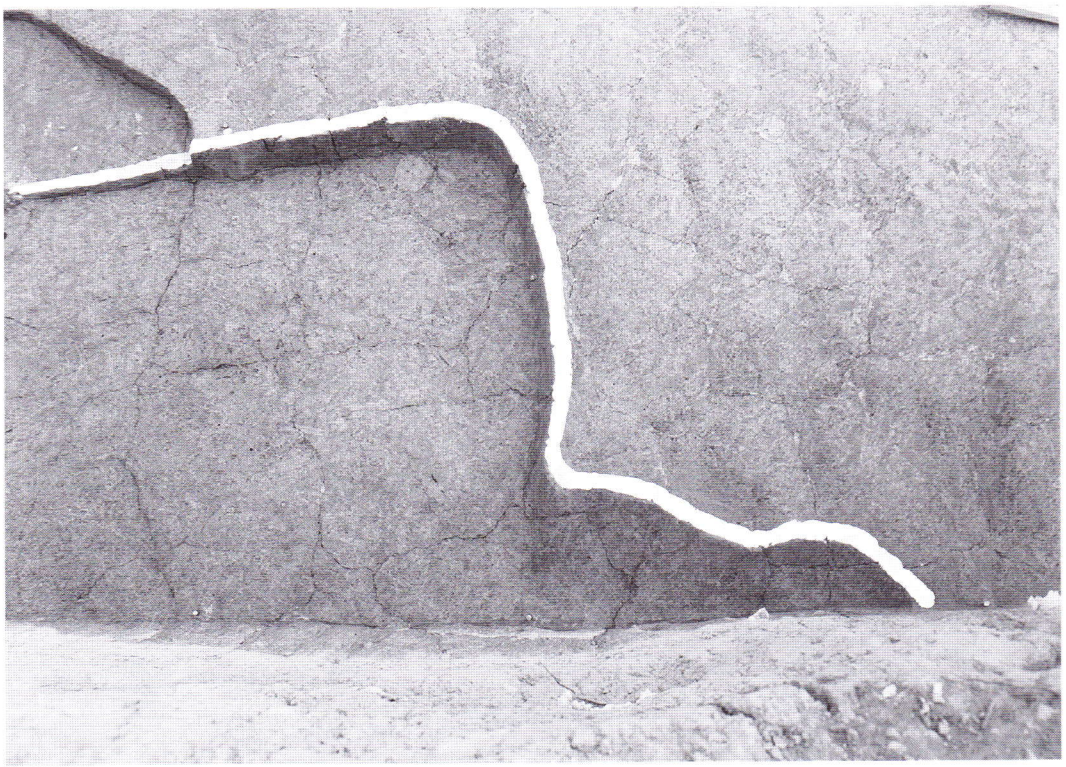


B区 SB-5（南から）



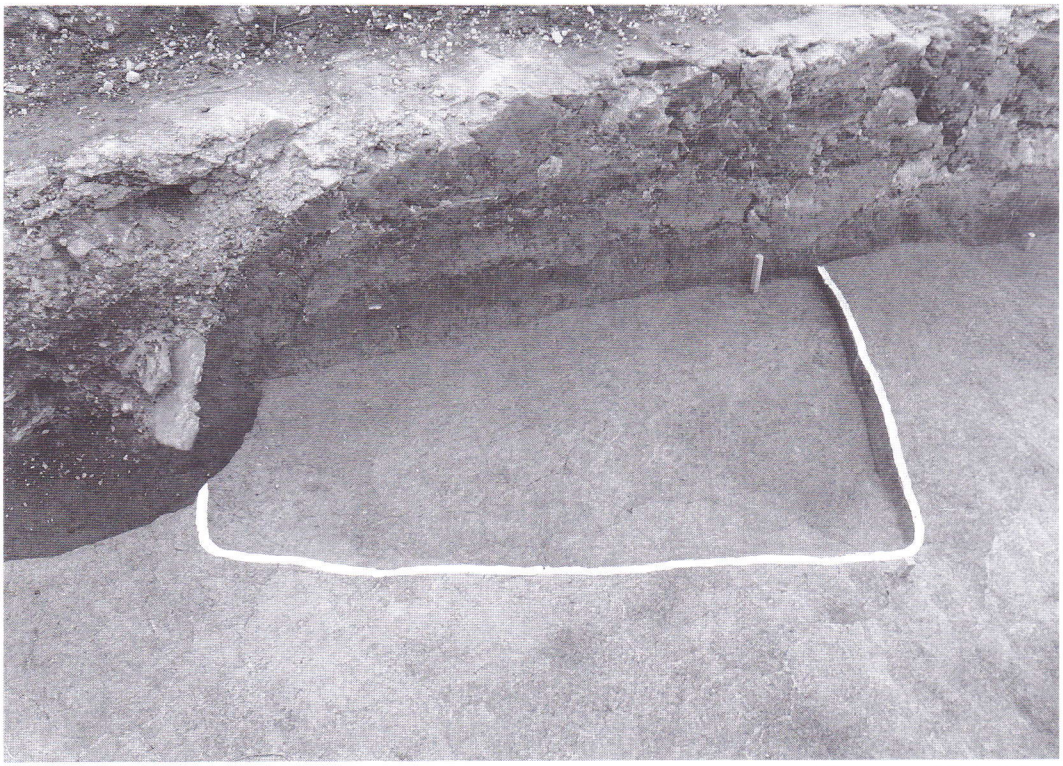
B区 SB-5柱穴内遺物出土状況（西から）

図版12

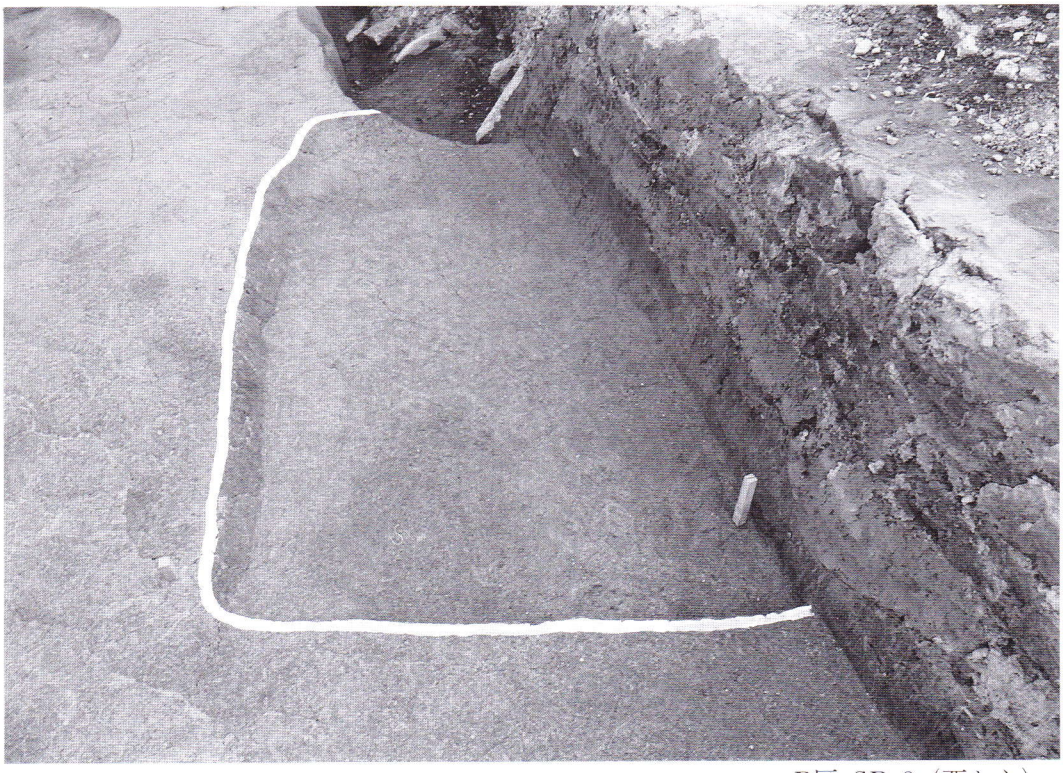


B区 SB-7（北から）

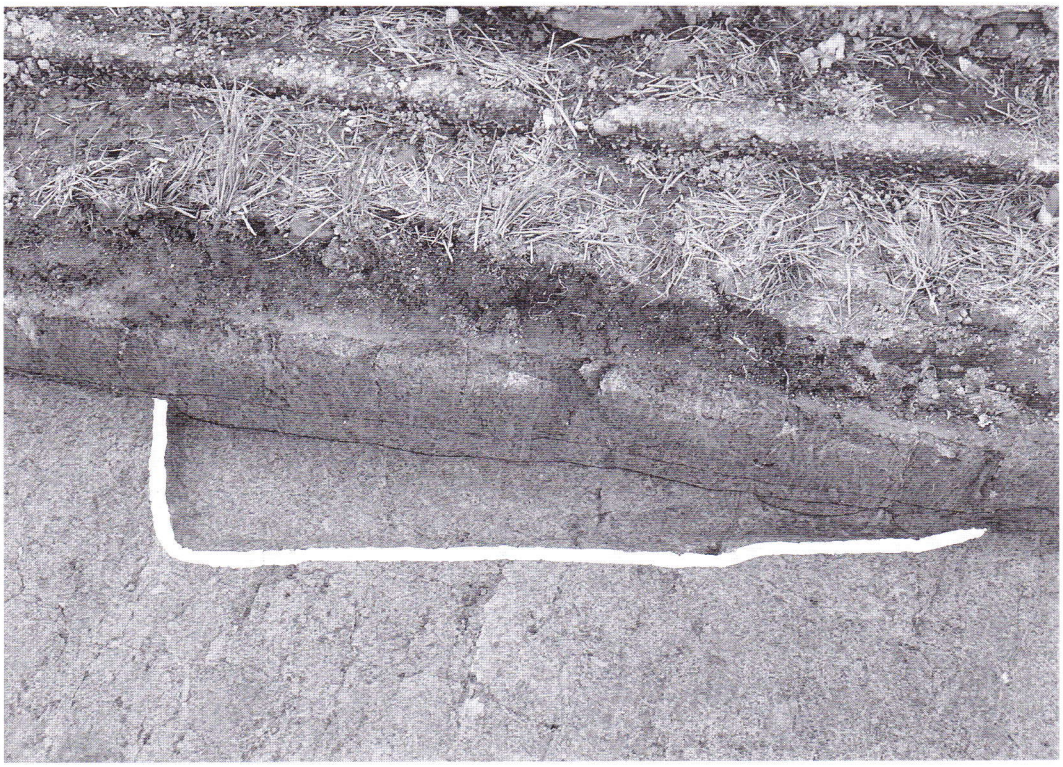
B区 SB-7カマド袖部断割り状況（東から）



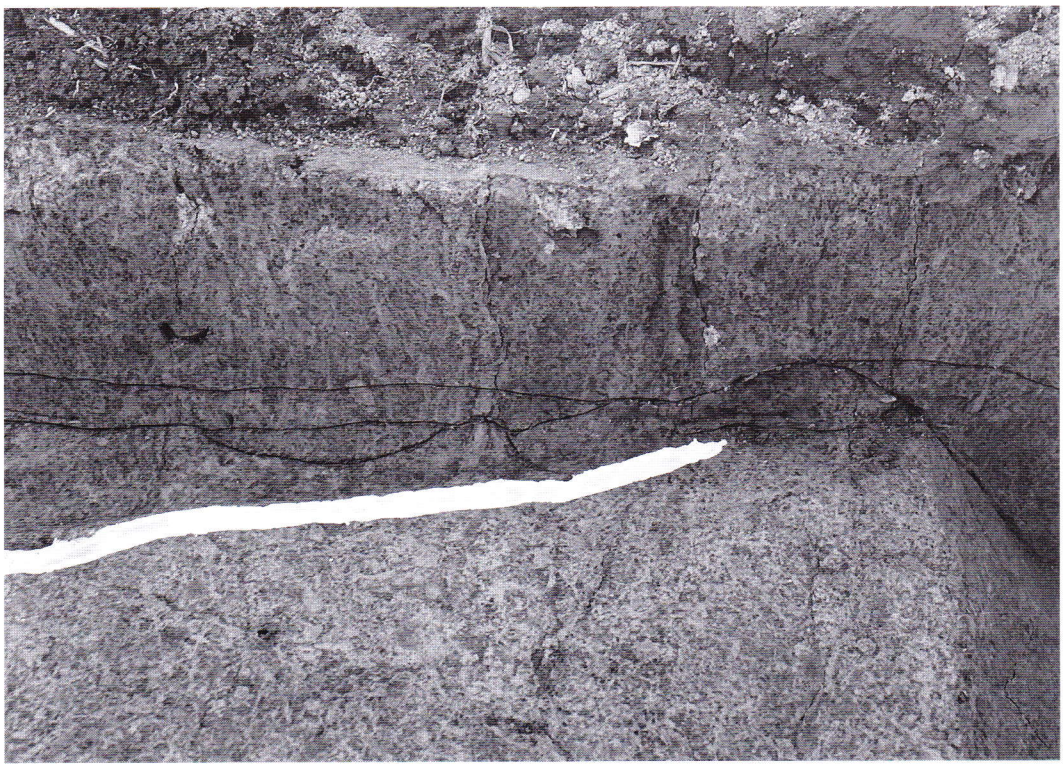
B区 SB-8（北から）



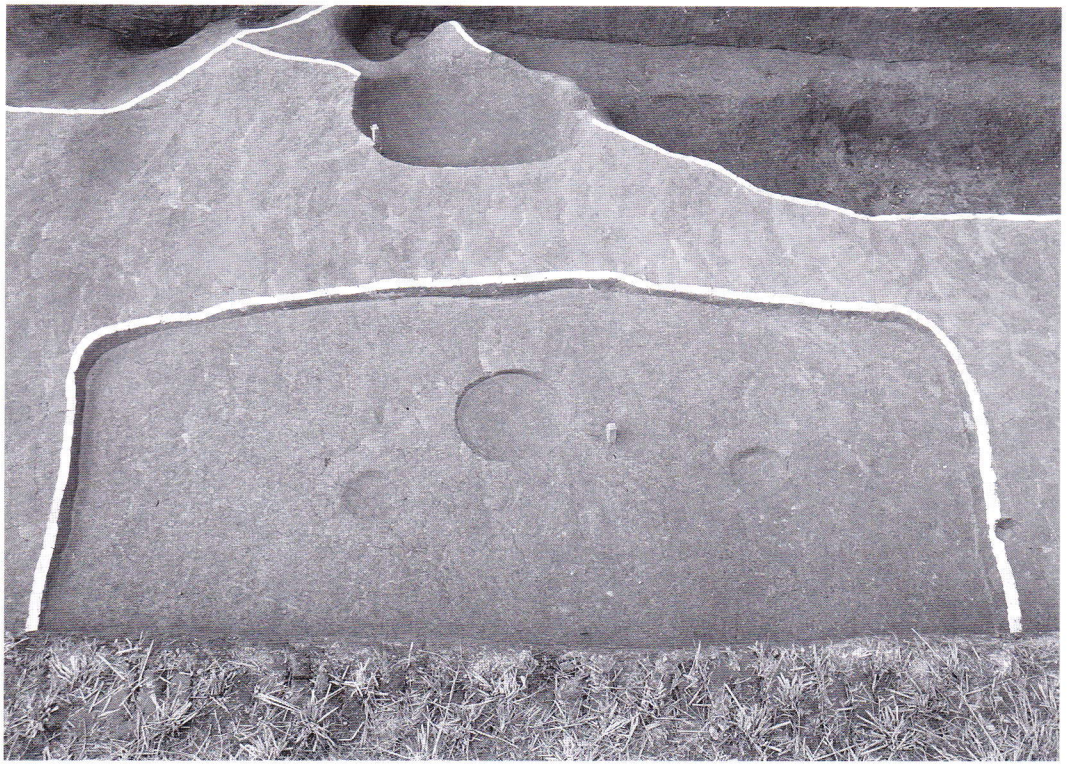
B区 SB-8（西から）



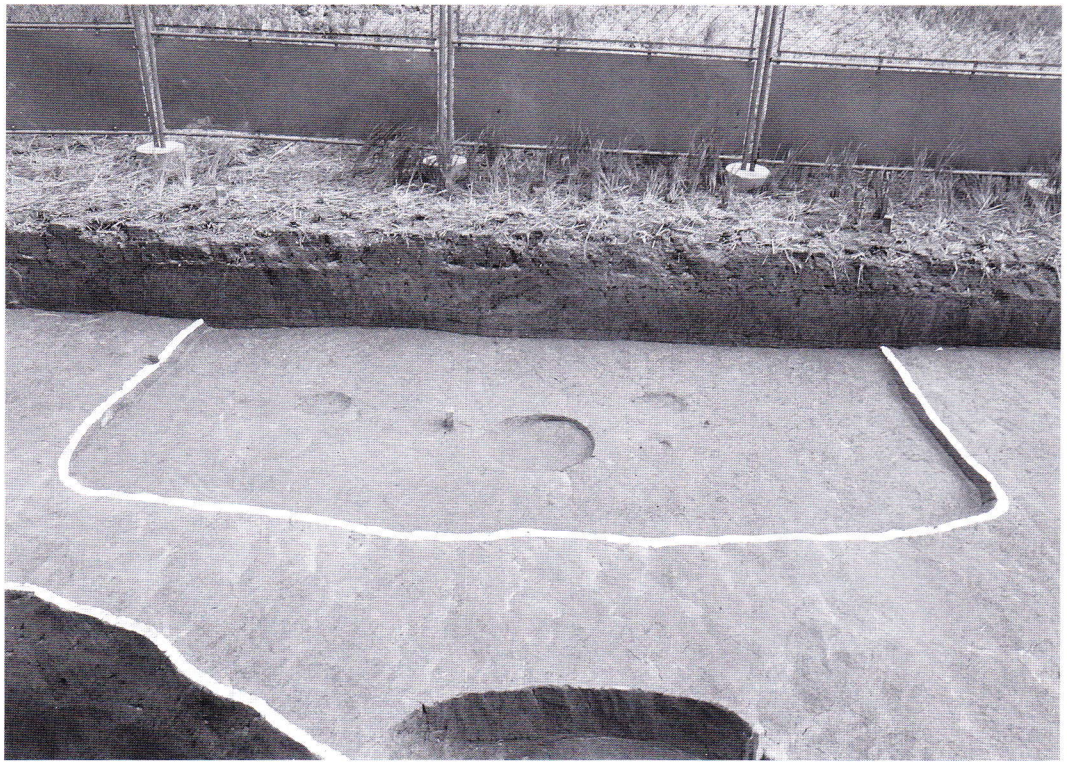
C区 SB-10（東から）



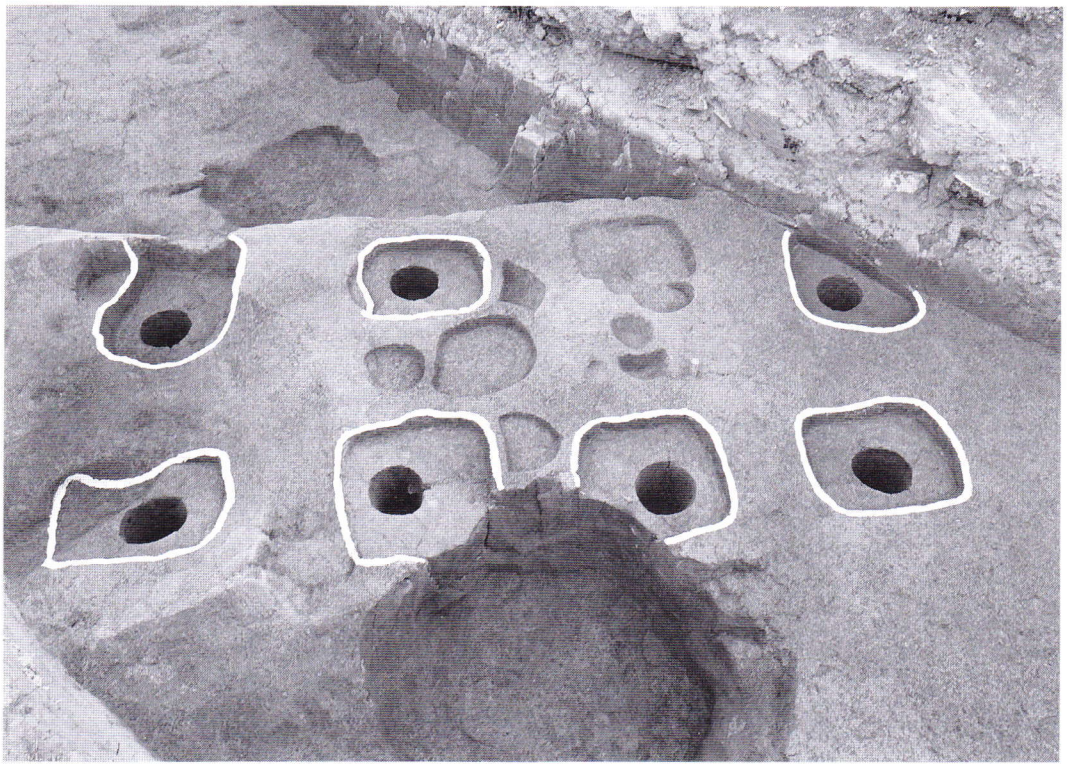
C区 SB-10カマド周辺土層堆積状況（東から）



C区 SB-11（南東から）

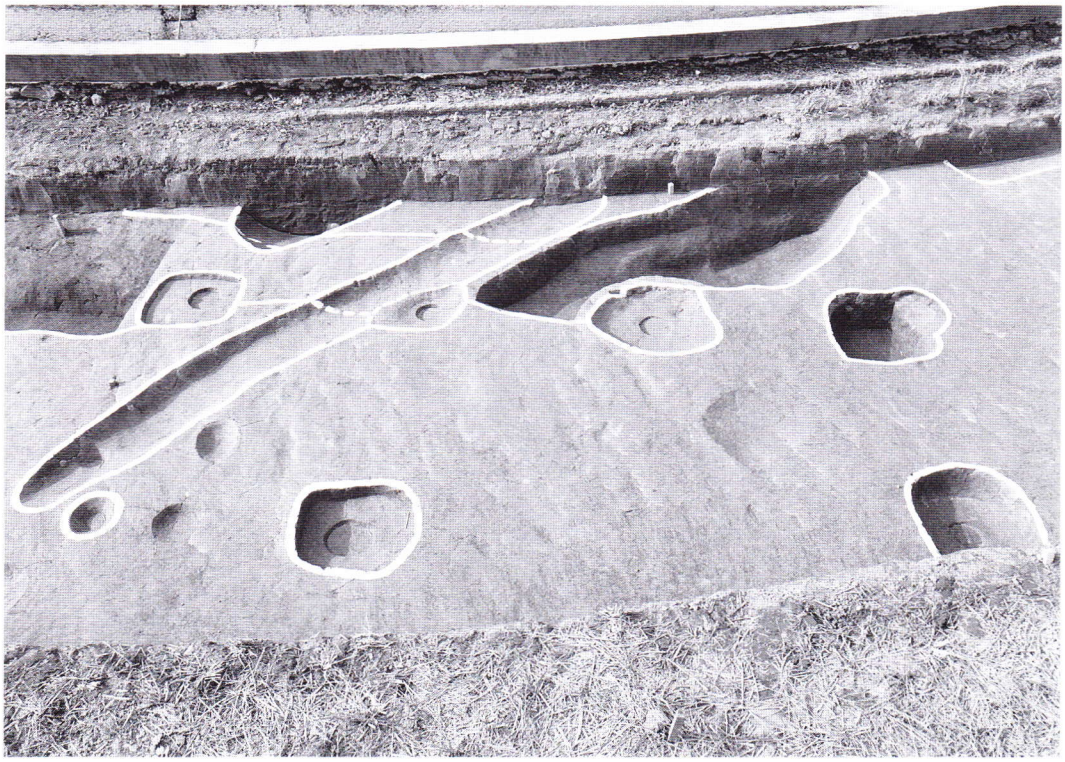


C区 SB-11（北西から）

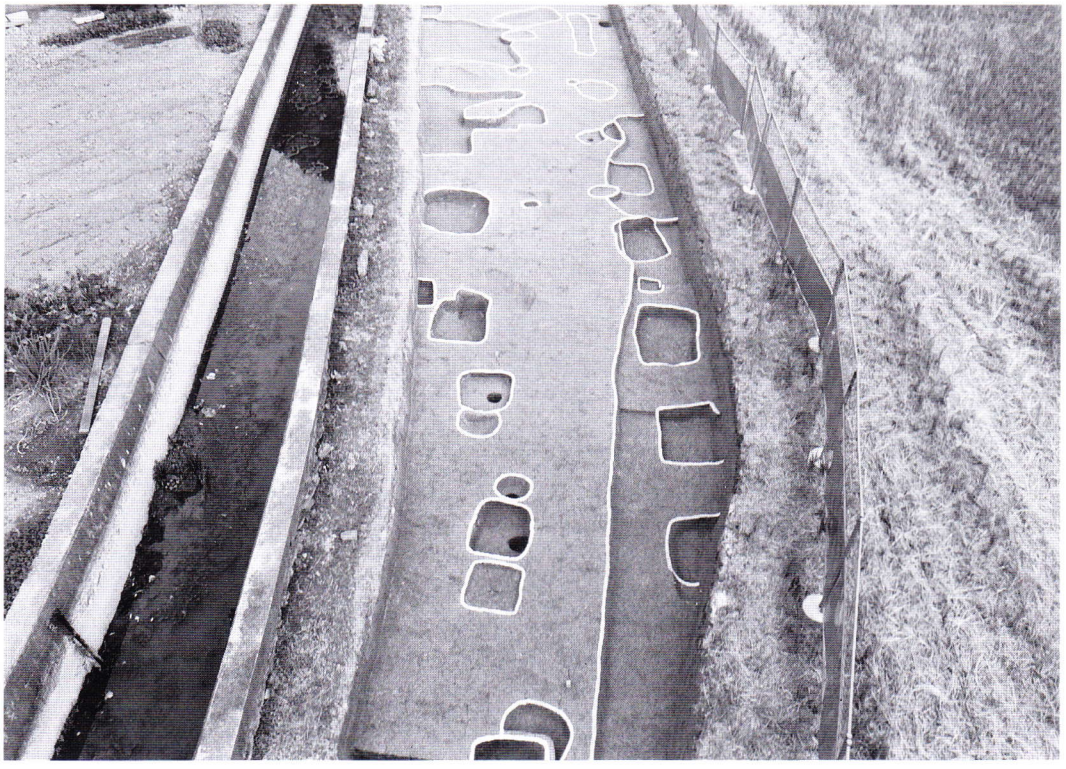


B区 掘立柱建物１（西から）

B区 掘立柱建物１（南から）

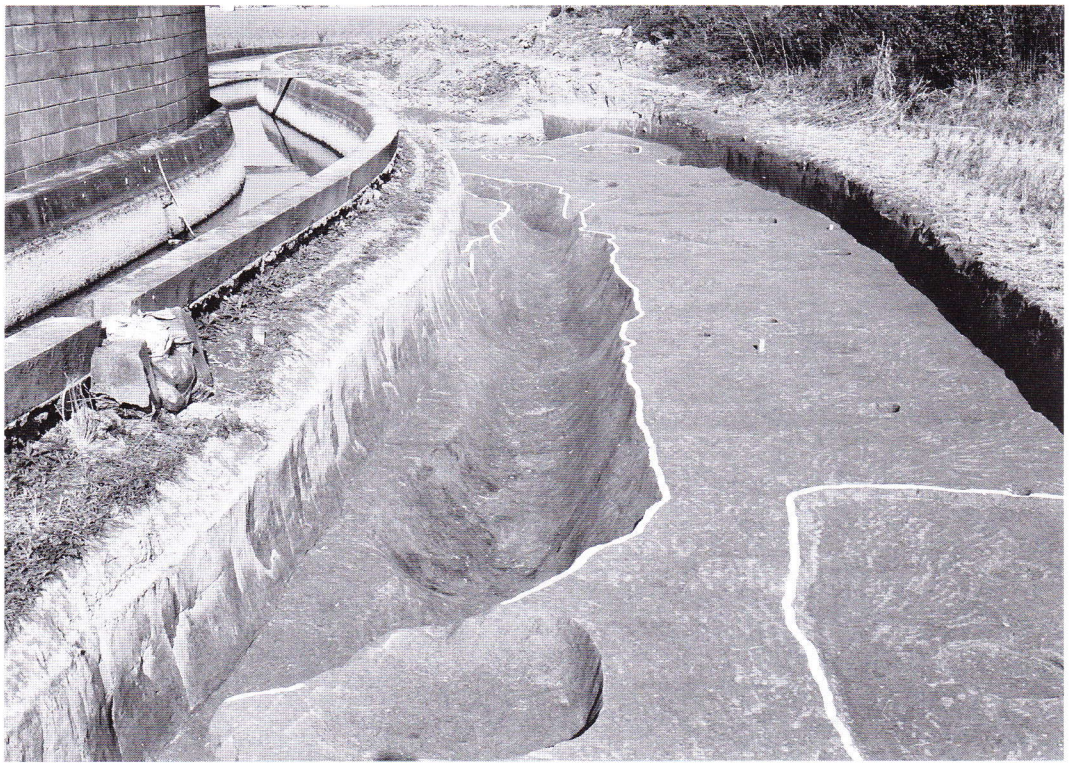


C区 掘立柱建物２（南東から）



C区 掘柱建物群（南西から）

図版18

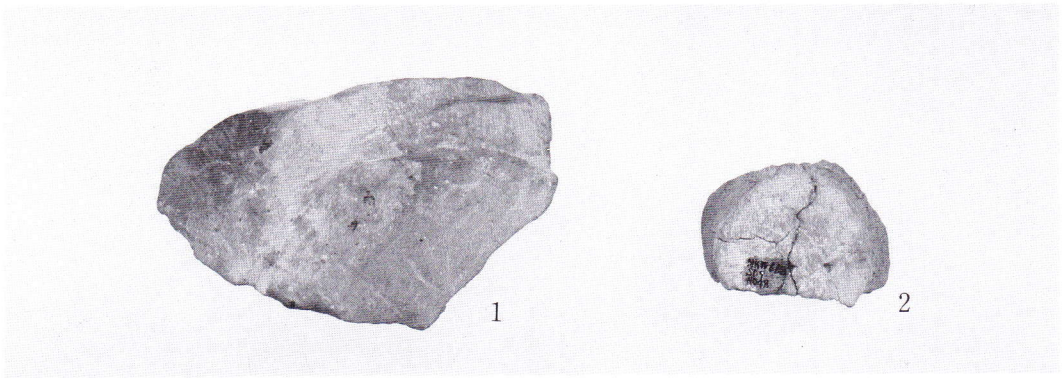


C区 方墳（SD-31）（南西から）

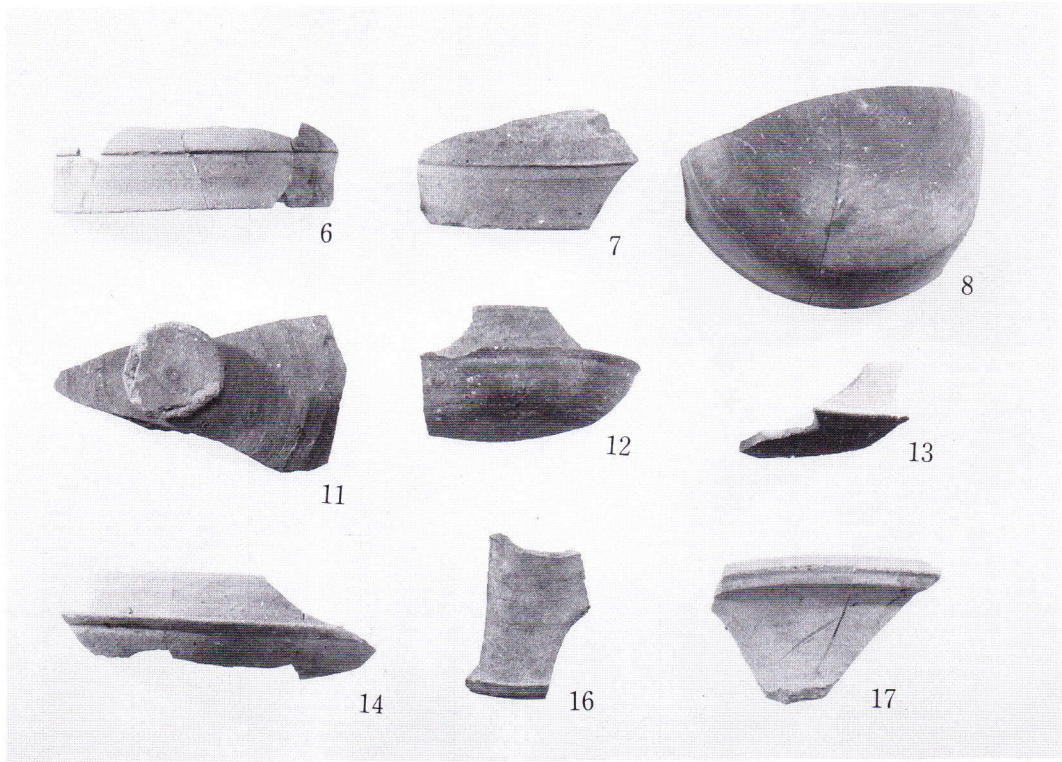
C区 方墳（SD-31）土層堆積状況（南西から）

C区 南東壁土層断面噴砂・砂脈貫入状況

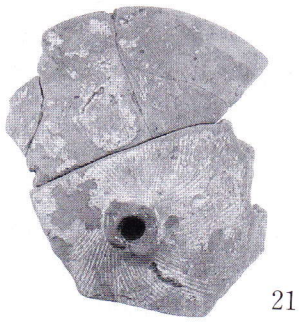
C区 遺構面噴砂・砂脈検出状況



SD-9出土遺物　1・2弥生土器底部

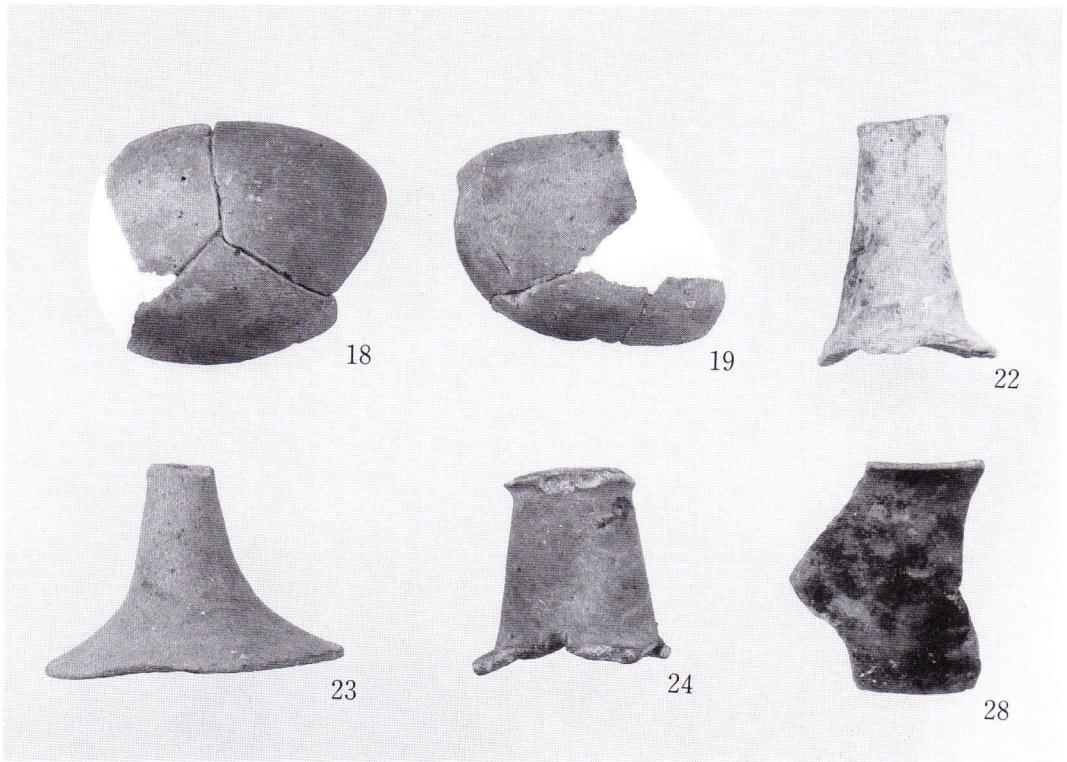


SD-9出土遺物　6～8・11須恵器蓋、12～14須恵器杯身、16須恵器高杯、17須恵器甕

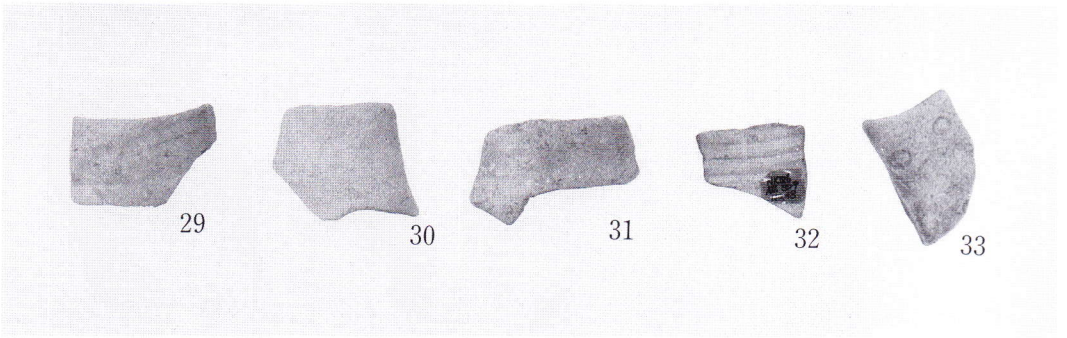


SD-9出土遺物　21土師器高杯

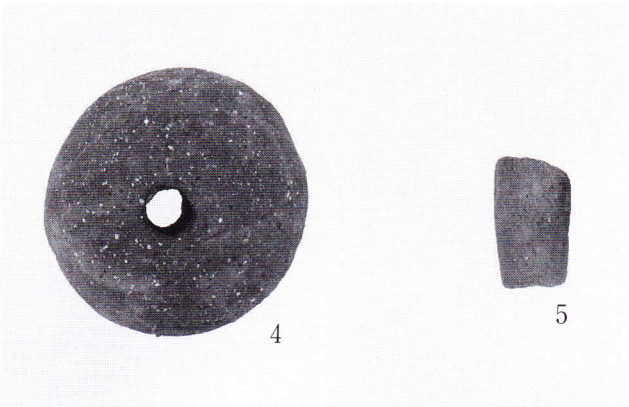
SD-9出土遺物　26土師器壺



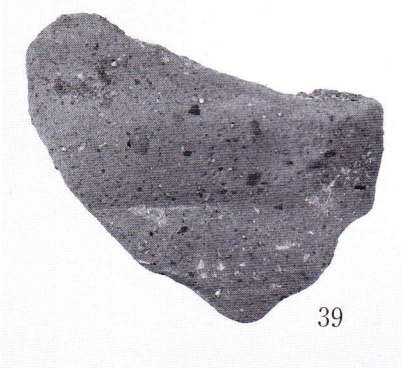
SD-9出土遺物　18・19土師器杯、22～24土師器高杯、28土師器甕



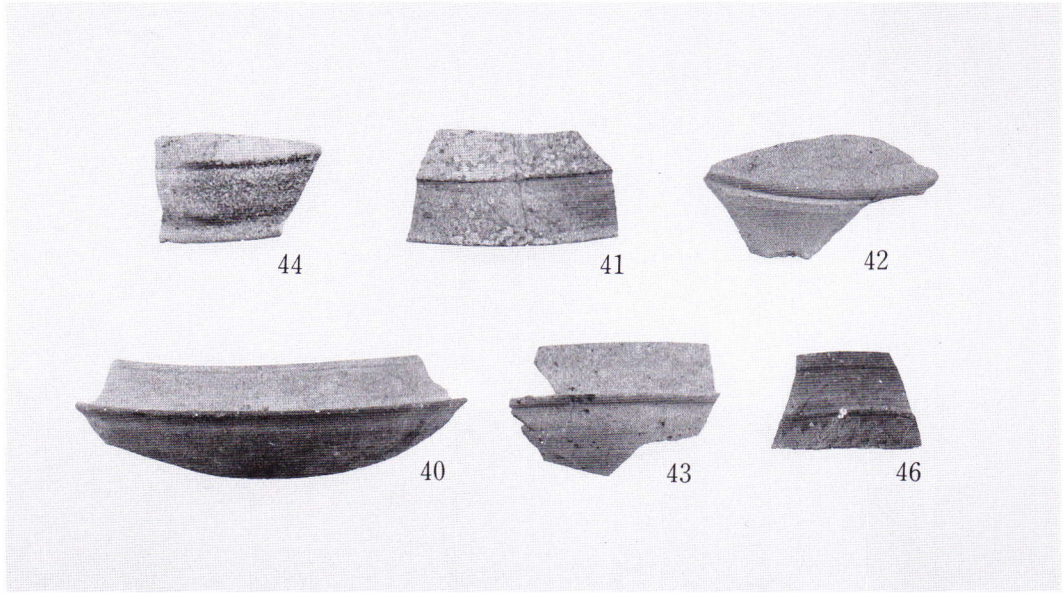
SD-9出土遺物　29～33製塩土器（32は内面）



SD-8出土遺物　4土玉　5土錘



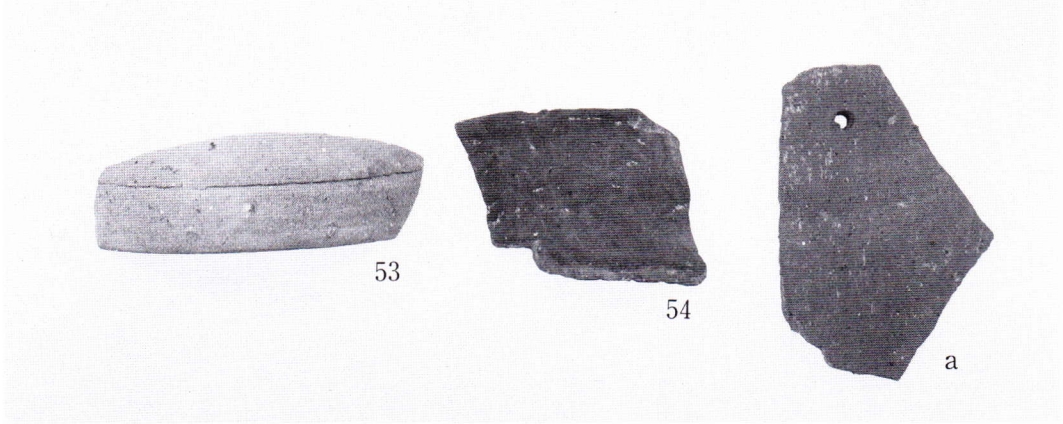
SD-9出土遺物　39埴輪



SB-2・4・5出土遺物　41・42・44須恵器杯蓋、40・43・46須恵器杯身

SB-5出土遺物　48土師器杯

SB-5出土遺物　49土師器杯

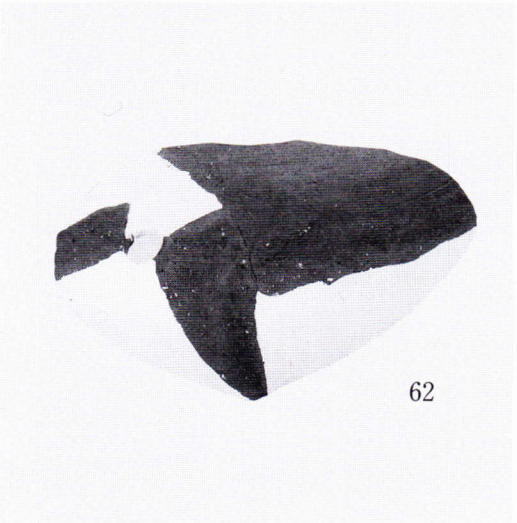


掘立柱建物出土遺物　53須恵器杯蓋　54土師器壺　a土師器甑

方墳（SD-31）出土遺物　55須恵器杯蓋

方墳（SD-31）出土遺物　56須恵器杯身

方墳（SD-31）出土遺物　57須恵器高杯



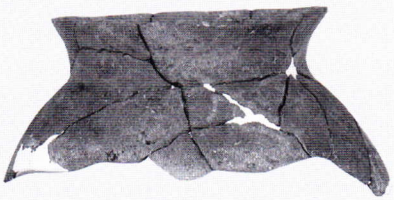
SD-32出土遺物　62須恵器𤭯

SD-32出土遺物　65土師器高杯

SD-32出土遺物　67土師器甕

66

SD-32出土遺物　66土師器甕

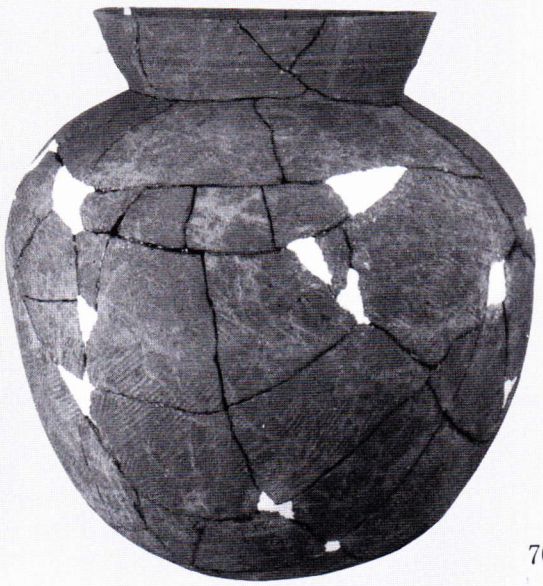


68

SD-32出土遺物　68土師器甕

71

SD-32出土遺物　71土師器甕

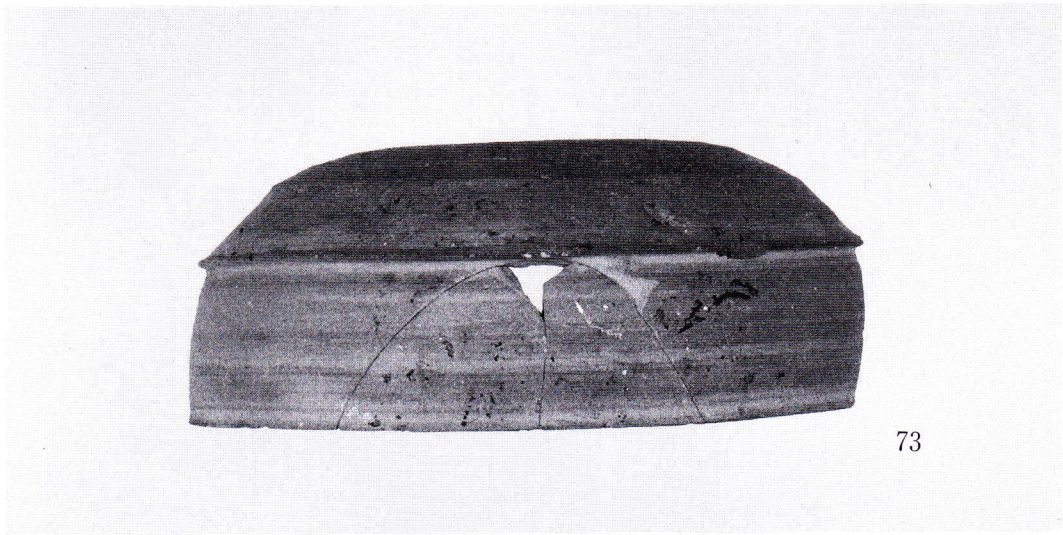


70

SD-32出土遺物　70土師器甕

図版26

SK27出土遺物　a土師器杯

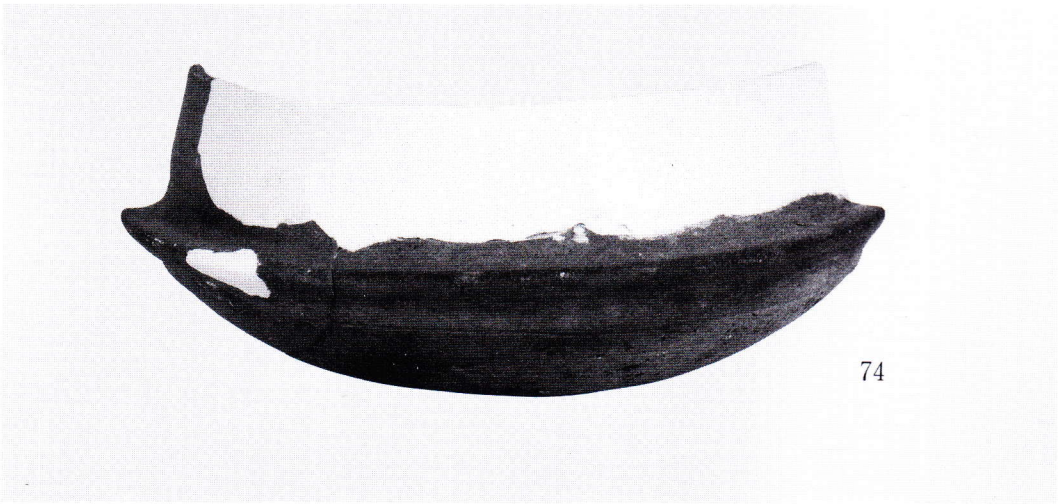


SX-4出土遺物　73須恵器杯蓋

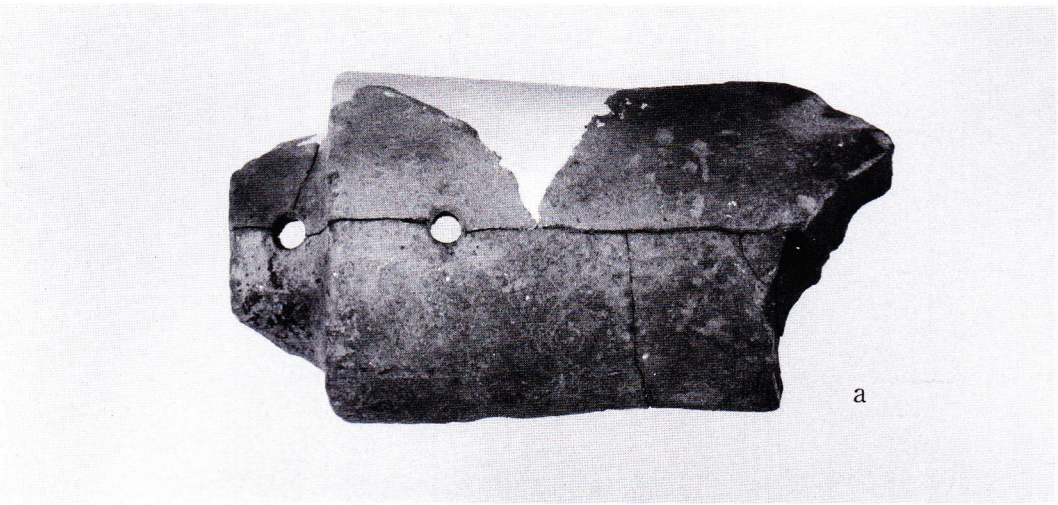
SX-4出土遺物　75土師器甕

SX-4出土遺物　76土師器高杯

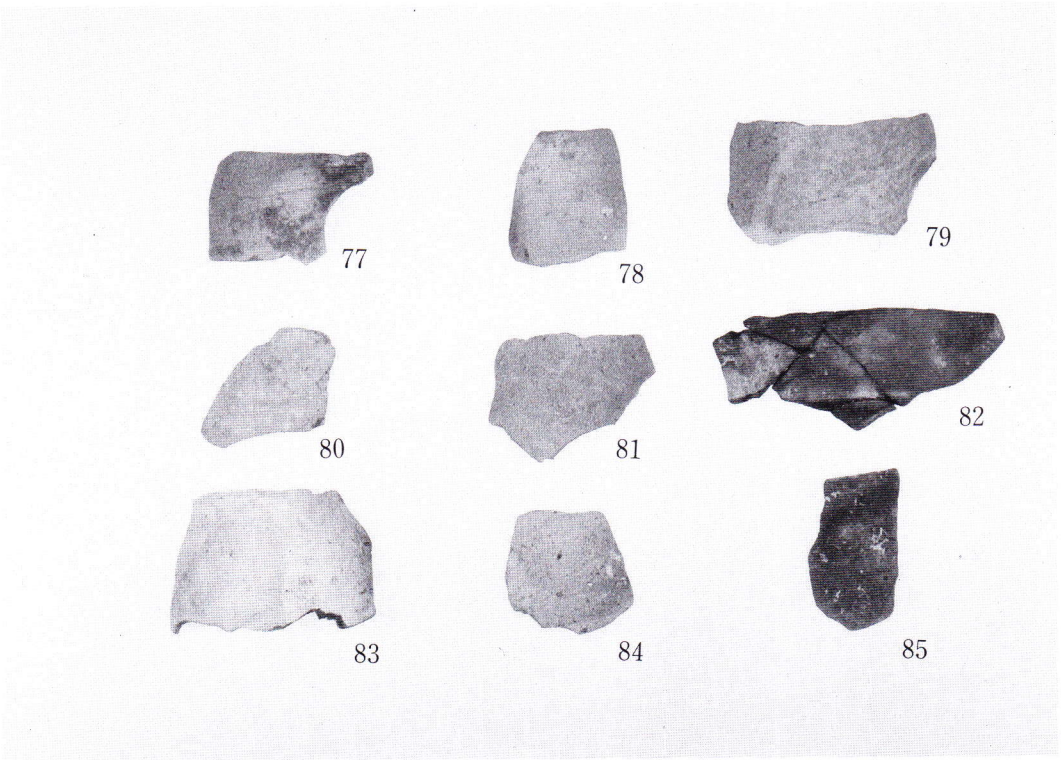
遺物包含層出土遺物　72須恵器杯蓋



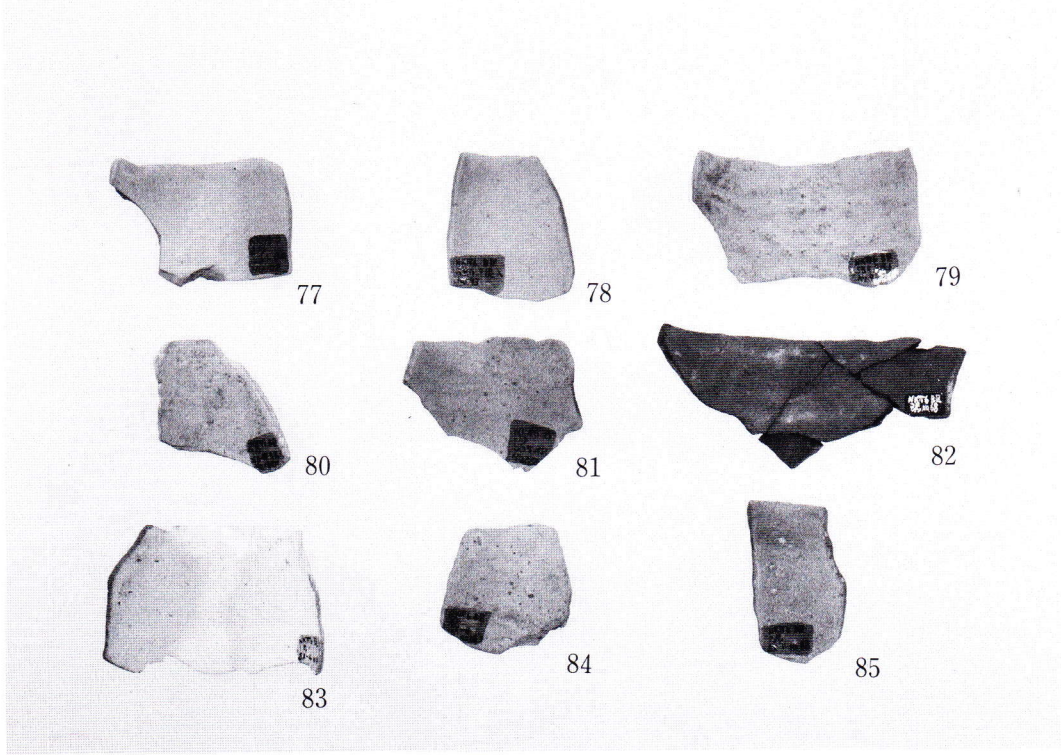
遺物包含層出土遺物　74須恵器杯身



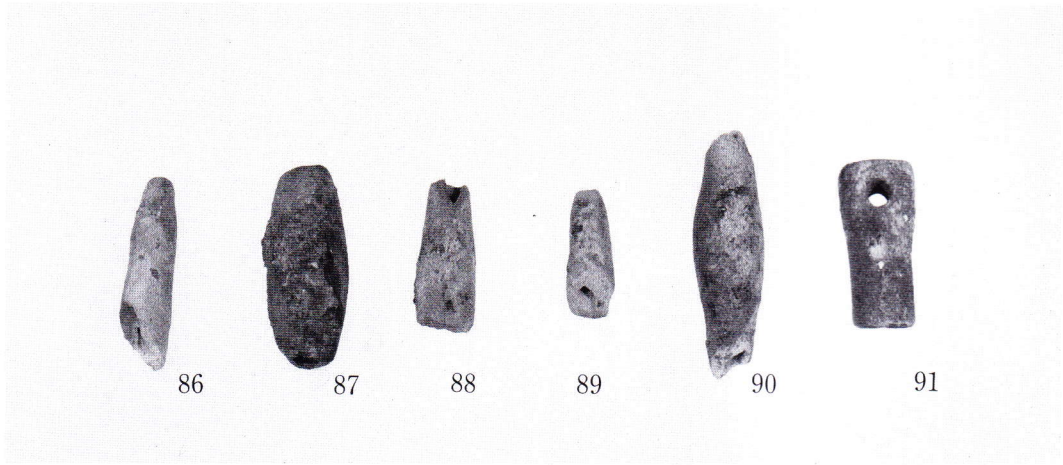
遺物包含層出土遺物　a丸瓦



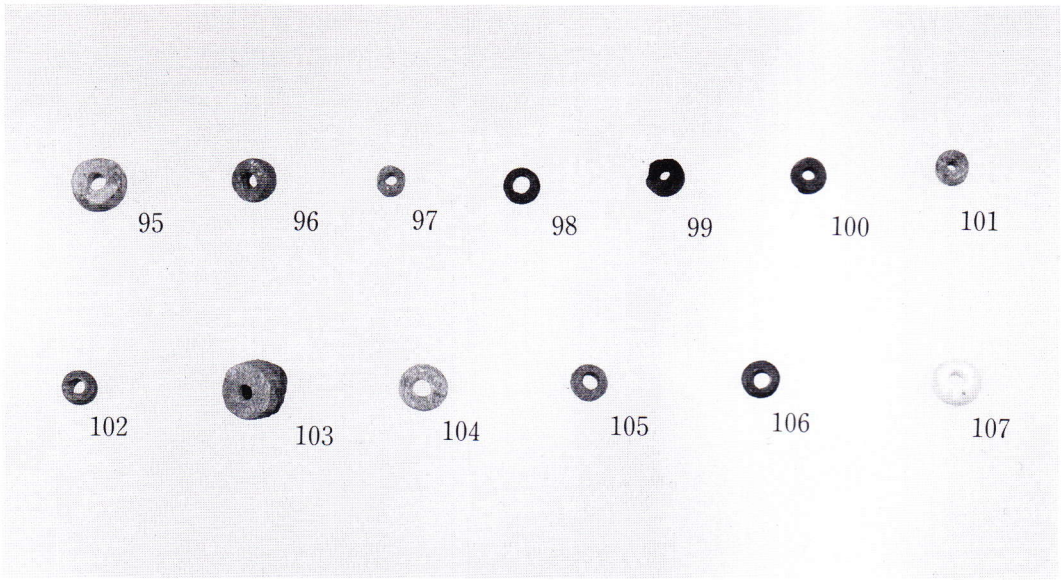
製塩土器（外面）



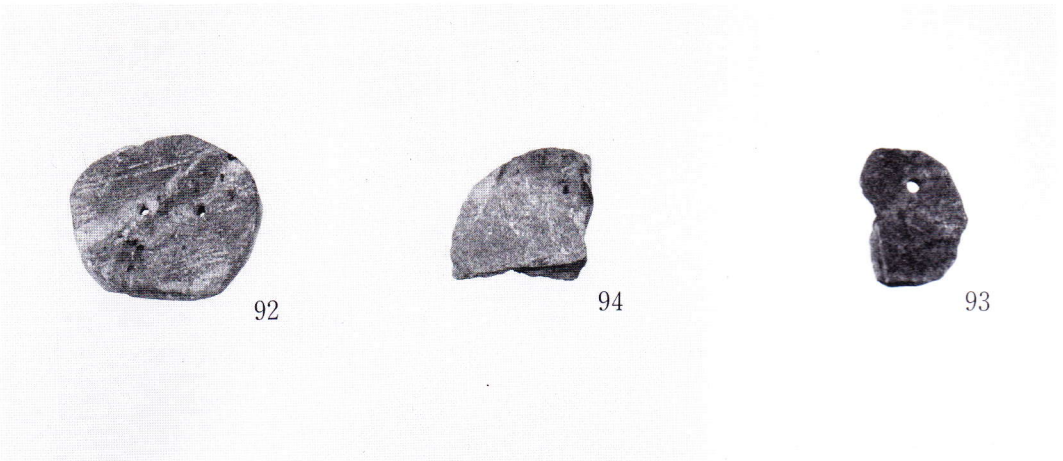
製塩土器（内面）



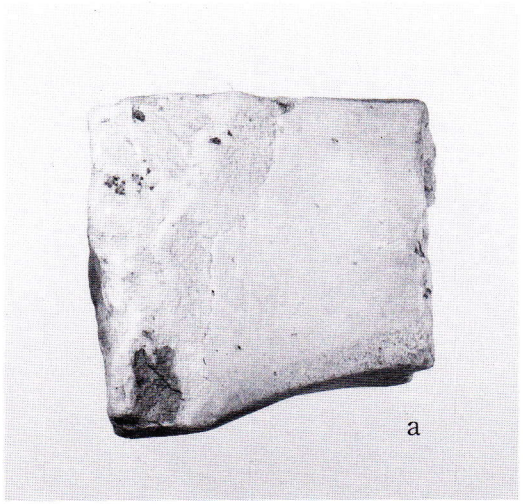
土錘



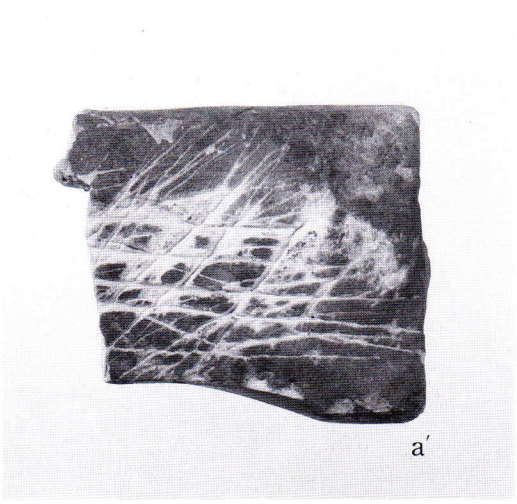
石製品　95～106滑石製臼玉、ガラス製品　107ガラス小玉



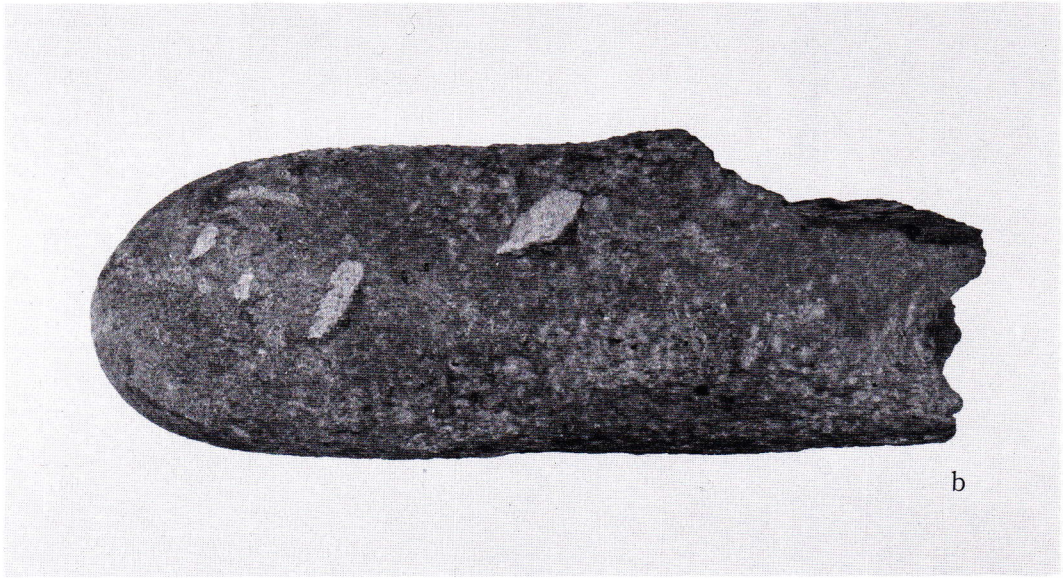
石製品　92・94滑石製有孔円板、93緑色片岩製勾玉



石製品　a 砥石（表面）



石製品　a′ 砥石（裏面）



石製品　b 緑色片岩製用途不明品

自然遺物　c～e 桃核

平成７年３月31日発行

鳴神Ⅳ遺跡　第６次発掘調査概報

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　西岡総合印刷株式会社

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 1995